〔表紙〕

忠義公史料　明治元年二月六

〔扉に、表紙の文字の外に市来四郎編の記載あり〕

目録

一藩兵奥羽鎮撫使附属ヲ令セラル二月二十七日
記　御沙汰書二通
請書
留守居届書
藩吏通牒文二廉
一外国公使上京参内ニ付、諸藩警衛取締等ノ個条ヲ達セラル二月二十七日
記　回章文
警衛取締方心得書
一外国人上京ニ付道饗祭ヲ修行セシメラル二月二十七日
記　弁事局達書
祭典次第書
式祭勤仕届書
祝詞文
一吉井幸輔軍防事務判事任命二月二十七日
記　辞令
一鷲尾隆聚ノ警衛ヲ命セラル二月二十七日
記　達書
一天皇便殿ニ御シテ在京ノ諸侯ヲ召見シ、同心協力益々国事ニ勉メンコトヲ詔諭シ、宴ヲ別殿ニ賜フ二月二十八日
記　勅書
酒饌ヲ賜フ諸侯名面
参照　春嶽私記節録
一忠義・久光父子ノ勲労ヲ賞シ物ヲ賜フ二月二十八日
記　達書
藩記
参照　元徳（毛利）家記節録

嵯峨實愛手記節録

一親征御軍令ヲ宣布セラル二月二十八日

記　御軍令

陸軍諸法度条々

回章文二通

一凡ソ上申稟請ノ書、之ヲ弁事局ニ進啓セシメラル二月二十八日

記　達書

藩記

一佛・英・蘭公使参内ノ旨通達セラル二月廿八日

記　達書

藩記

一佛国公使入京ニ付、騎馬警衛且警衛諸藩ト申談シ混雑ナカラシム二月二十八日

記　達書

留守居届書

一薩・藝・長三藩ニ命シ、外国公使朝参ノ際日御門内外ヲ守衛セシメラル二月二十九日

記　御沙汰書

参照　土方久元日記節録

一奥羽鎮撫使発途ノ日延期ヲ令セラル二月二十九日

記　御沙汰書

留守居届書

一藩内所役々ノモノ権威ケ間敷、或ハ不作法等ナキ様厳重取締方ヲ達ス二月二十九日

記　藩吏申渡書

一タバコ商人國府本町永山仁兵衛聞書（本文分明ナラサレトモ、五日晩云々ノ文意ニヨレハ、正月五日大坂ニテ藩邸焼失ノ時、大坂ノ会・桑兵ノ為メニ拘留セラレタルトキノ口書ニモヤアラン欤）

一佛国全権公使及船将二人、蘭国公務代理総領事務及書記官朝参ス、天皇之ヲ紫宸殿ニ延見シ、益々交際ヲ厚クシ、之ヲ久遠ニ要スル聖旨ヲ勅諭ス、公使等恩命ヲ奉シテ退ク二月晦日

記　参朝案内状

勅語並ニ公使等奉答

外国公使参朝次第書

藩記

一英国公使朝参ノ途中刺客アリ其従者ヲ衝突ス、公使遂ニ朝スルヲ果サス二月晦日

記　肥後藩上申書

肥後藩隊長上申書
巡邏諸藩上申書
山崎藩隊長上申書
紀伊以下十一藩上申書
暴動概状
参照　春嶽私記節録
大久保利通日記節録

一外国事務督晃親王以下ヲ英国公使ノ客館ニ遣ハサレ、之ヲ慰問シ且書ヲ遺リ之ヲ謝ス二月晦日

記
春嶽私記節録
参照　土方久元日記節録

一諸藩ニ令シテ英公使参朝ヲ乱妨スル犯人ヲ捜索シ、警護ヲ厳ニシ後日ヲ戒ム二月晦日

記　達書二通
留守居届書

一大山格之助奥羽鎮撫使参謀ヲ命セラル二月晦日

記　辞令
藩上申書
留守居届書

一小松帯刀徴士参与職・総裁局顧問ヲ命セラル二月日欠

記　辞令

一藩六組ヲ廃シ何番方限ト改称、且諸願書・片書等ハ御小姓与ト記載スヘキ等ノコトヲ達ス二月晦日

記　藩老連署申渡書

一家老座書役其外諸座書役ハ、旧名ノ如ク筆者ト改称スヘキコトヲ達ス二月晦日

記　藩吏申達書

附録（二月中）

一久光藩政変革ノ要領三ケ条ヲ訓示ス二月日欠

記　親筆箇条書
藩老連署申渡書

一諸座書役助並小役人ノ陸軍所限月別勤ヲ命セラレタルモノモ、満弐拾五歳ニ至ル迄、特別ヲ以テ勤続セシメラル、コトヲ達ス二月日欠

記　藩老申渡書

一壮年ノ者海陸軍ニ従軍シ、追々多勢出兵ノ時機ニ際シ、作事奉行以下奉行頭人等軍国ノ世態ヲ存シ、一往書役方ノ事ヲモ相兼、書附又ハ帳簿等弁達取扱ヒ、諸事着実ニ精勤スヘキ旨ヲ達ス二月日欠

記　藩老申渡書

一藩士継目養子定式忌服養子違変等ノ心得方ヲ達ス二月日欠

記　藩老申渡書

一市來正右衛門藩老ニ建言シ、藩政ニ関スル時事ヲ条陳ス二月日欠

記　建言書

一二八　藩兵奥羽鎮撫使附属ヲ命セラル

明治元年二月二十七日、藩兵奥羽鎮撫使附属ヲ令セラル、

一二八ノ一　薩州

右奥羽鎮撫使三月一日発途相成候ニ付、銃隊百人附属致候様可致旨、

御沙汰候事、

二月廿七日

一二八ノ二　薩州

奥羽鎮撫副督参謀へ致附属、大坂ヨリ乗船可致候事、

二月廿七日

一二八ノ三　奥羽鎮撫使三月一日発途相成候ニ付、銃隊百人附属致候様、且大坂ヨリ乗船可致旨被仰出候趣拝請仕候、此段申上候、以上、

二月廿八日　御官名

一二八ノ四　御書附二通

但

奥羽鎮撫使へ銃隊百人附属之儀一通、

右同大坂ヨリ乗船之儀一通、

非蔵人

松室豊前

右ハ今日太政官代軍局ヨリ御用ニ付、可罷出旨御達有之、罷出候処、右豊前ヲ以被相達、御請書今日中差出候様被相達候ニ付、可申上旨相答置申候、

右之通今日私共差支、御留守居附役勤永山左内〔盛輝〕相勤申候付、御書附相添、此段申上候、以上、

辰二月廿八日　内田仲之助〔政風〕

伊勢様〔島津広兼〕

一二八ノ五　御書附一通

但

奥羽鎮撫使御発途ニ付、銃隊附属且大坂ヨリ乗船之儀御請書、

御官名　　非蔵人

松室豊前

右ハ太政官代軍局へ持参、右豊前へ面会差出候処、慥ニ致落手候旨申聞候、

右之通今日私共差支、御留守居附役勤永山左内相勤申候間、此段申上候、以上、

二月廿八日　　内田仲之助

二八ノ六
明治元年戊辰二月

奥羽鎮撫使三月一日発途相成候付、銃隊百人附属致候様、且大坂ヨリ乗船可致旨、被　仰出趣拝請仕候、此段申上候、以上、

二月廿八日　　御官名

右辰二月廿八日、太政官代軍局ヨリ御用ニ付、可罷出旨御達有之、永山左内罷出候処、非蔵人松室豊前ヲ以、右御書付被相渡、御請書今日中差出候様被相達候趣、内田仲之助ヨリ伊勢様宛之首尾書相添、左候テ御請書之儀ハ、同日太政官代軍局江左内持参、右豊前江面会差出、致落手候旨申聞候段モ、同人ヨリ伊勢殿江首尾書有之、

二八ノ七
一先月廿八日、太政官代軍防局ヨリ御用ニ付、可罷出旨御達有之、御留守居付役勤永山左内罷出候処、奥羽鎮撫へ銃隊百人附属、且大坂ヨリ乗船之儀、御別紙之通被相渡、御請書被差出候様、被相達候旨申出候付、達貴聞、御軍賦役頭取へ相達、左候テ御請書御別紙之通、即日非蔵人松室豊前へ被差出候処、致落手候旨申聞候段申出候、御書附等三通御留守居首尾書相添、此段申越候条、

中将様可被達

御聴候、以上、

但

銃隊御附属之儀、御兵具方附士隊別紙之通被差出候、此段ハ為御心得ニ候、

辰三月八日　　島津伊勢

島津圖書(久治)殿

桂　右衛門（久武）殿
川上　龍衛（久齡）殿
新納　刑部（久脩）殿
町田　内膳（久憲）殿

一二九　外国公使上京参内ニ付、諸藩警衛取締等ノケ条ヲ達ス

一二九ノ一　二月廿七日

太政官代江唯今早々出頭候様申来候付、罷出候処、非蔵人を以被相渡候ニ付、右御書付弐通致廻達候、御廻留より御返却可被下候、以上、

紀伊中納言内
中嶋三郎右衛門
水野十大夫
大橋左衛門

二月廿七日

御名様
御留守居中様
外様略ス

右御書附等写三通之通、黒田美濃守様衆より相達、本書は伊達陸奥守様衆江順達仕候段、辰二月廿八日、御留守居内田仲之助より伊勢様江首尾書相添略す、

一二九ノ二　二月廿七日

一今般英・佛・蘭公使上京、参内被　仰付候、左之通御取窮相成候間、警衛取締等被仰付候藩々、奉得其意可相勤候、

一滞在中洛中外随意徘徊被差許候事、

一茶店・酒楼等江私ニ差越候儀被差留候事、

一夜分外出被差留候事、

一宮方江行合候節ハ、路傍へ為相控可申、堂上或ハ諸侯江行合候節ハ、双方道之半を譲り可為致通行候事、

但
宮様方江公使行合候節ハ、御供頭相通シ通行可有之、公使より相当之礼式可有之候間、御会釈可有筈候事、

一諸商ひ物買求、且小屋物等見物いたし候儀、被差許候事、

右為心得相達候事、

二月廿七日

別紙之通候間、早々順達夫々江可被触示候也、

但

差急候間、迅速順達可有之候事、

弁事

役所

紀伊中納言殿〔徳川茂承、紀州藩主〕

浅野安藝守殿〔長訓、芸州藩主〕

黒田美濃守殿〔斉溥、筑前藩主〕

島津修理大夫殿〔忠義、薩州藩主〕

水戸中納言殿〔徳川慶篤、水戸藩主〕

池田備前守殿〔茂政、備前藩主〕

伊達陸奥守殿〔慶邦、仙台藩主〕

池田因幡守殿〔慶徳、因州藩主〕

留守居中

〔慶明雑録二十六・島津忠義家記三にて校訂〕

一三〇 外国人上京ニ付道饗祭ヲ修行セシム

明治元年二月廿七日、外国人上京ニ付、道饗祭ヲ修行セシム、

一三〇ノ一 弁事局達書

明廿八日卯刻外国人上京ニ付、道饗祭修行可有之候事、

但堺町門前・清和院門前、

二月廿七日

吉田侍従〔良義〕三位殿

一三〇ノ二 明治元年二月廿八日

神祇官祭儀録ニ云、外国人参

朝承蕃客来

朝之例、行道饗祭於今出川・中立賣両御門、時岡神祇少史奉仕、衣冠・斎服・単襖・袴

祭典次第二月廿八日

卯刻立高案於門下設神座原註、今出川南西、中立売東西

先行清祓式

次供神饌

次着座

次祝詞

高天原尓事始氐、天津日嗣乃高御座現津御神止、天下所知食須皇御孫之命乃大宮所止定米奉留玉敷乃平乃宮乃大八衢尓、湯津磐村之如久塞座、大神等之大前尓申久、八衢比古八衢比賣久那斗止、御名者申氐称辞竟奉久者今

年二月乃廿八日云日尓遠幾外国人等乃大御門近久伏従
参来流仁依氐麗備疎備来留物有者相率相口会事無久下行
者下乎守利上往者上乎守里夜之守日之守尓護利奉斎奉
礼止進留幣帛者明妙照妙和妙荒妙奉備御酒者堰辺高知堰
腹満双大海原尓住物者鰭乃広物鰭乃狭物奥津藻菜辺津
藻菜大野原尓生物者甘菜辛菜和米荒米尓取添氐進留宇
豆乃幣帛乎平介久聞食氐皇御孫命乃大御代乎茂御世乃足
御代尓守幸閉給倍止惶美恐美毛申波久止白須
次撤神饌退出
神饌（原註高坏三本立紙立捻掛）
白米
酒
松魚
鮑
大根
昆布
黒米
塩
鮓
鯛
人参
和布
五色絶
麻

一三〇ノ三
明治元年二月廿八日
今卯刻
障神祭無滞勤仕相済候、仍此段御届申上候、以上、
白川神祇伯殿家〔資訓〕
二月廿八日　時岡神祇史
弁事
御役所

弁事局叢書

一三〇ノ四
明治元年二月廿八日
今卯刻
障神祭無滞勤仕相済候、仍此段御届申上候、以上、
二月廿八日　鈴鹿神祇権大祐
弁事
御役所

案スルニ、道饗祭ノ事、蓋シ之ヲ白川・吉田ノ二家ニ分命シテ、之ヲ四門ニ修セシナリ、而シテ達書ハ吉田氏ヲ存シ、白川氏ヲ佚シ、祭儀録ハ白川氏ヲ載セテ、吉田氏ヲ略ス、二書ヲ参看スレハ其事見ルヘシ、但シ上申書鈴鹿某ナルモノハ、吉田氏ニ属セシモノナリ、

明治元年三月八日 一三〇ノ五

又云、三月八日、如二月廿八日之儀、

此乃玉志磯乃平乃宮乃大八衢尓湯津磐村之如久塞座大神等乃広前尓申久八衢比古八衢比賣久那止止御名者申天称辞竟奉久者此度遠木外国人等乃朝廷尓伏従参来比帰住武跡母尓荒振神等乃残止留事在婆神夜良比尓追比給比下行者下乎守里上往者上乎守夜之守日之守尓護利奉利給氐今年三月乃初乃八日止云日乃朝日乃豊栄昇尓進留幣帛者明妙照妙和妙荒妙備奉御酒者堰辺高知甕腹満双大海原尓住物者鰭乃広物鰭乃狭物奥津藻菜辺津藻菜辺津藻菜大野原尓生物者甘菜辛菜和米荒米尓取添氐進留宇豆之幣帛乎安幣乃足御幣止平介久聞食氐皇御孫命乃大御代乎厳御代乃足御世尓幸倍奉給倍止申須辞別氐白左久如斯斎麻波利清麻波利奉仕礼麻毛洩落武事有婆大直日神直日止見直聞直給比氐皇我大御代袁堅磐尓常磐尓守里幸閉給倍止称辞竟奉良久斗宣

一三一　軍防事務局判事吉井友實ニ命シ、権判事大村益次郎ト共ニ軍制ヲ議セシム

明治元年二月二十七日、軍防事務局判事吉井徳春ニ命シ、権判事大村永敏(益次郎、長門藩士)ト共ニ軍制ヲ議定セシメラル、

吉井幸輔(友実)

軍防事務判事被　仰付置候処、猶大村益次郎ト申談、軍制御基本取調ヲモ被　仰付候事、

二月

大村永敏ノ達書見ル所ナシ、履歴書ニ云、二月軍防局ニ徴サレ、御親兵ヲ編制シ、兵営ヲ伏水ニ建設スト、

一三二　参与兼親兵掛鷲尾隆聚警衛兵ヲ命セラル

明治元年二月二十七日、鷲尾隆聚警衛兵ヲ命セラル、

一鷲尾殿警衛拾人可被差出候事、

（記）

鷲尾隆聚兵ヲ高野山ニ勒ス、後京都ニ率ヒ帰ル、此日部兵ヲ以テ親兵ニ充テラレタルニ仍リ、藩兵ノ守衛ヲ命セラレタリ、然レトモ藩ハ各出兵シテ、之ニ充ツル兵員ナキニ仍リ、後日之ヲ辞シタリ、

一三三　在京諸侯ヲ召見シテ詔諭シ宴ヲ賜フ

明治元年二月二十八日、便殿ニ御シテ、在京ノ諸侯ヲ召見シ、同心協力、益々国事ニ勉メンコトヲ詔諭シ、宴ヲ別殿ニ賜フ、

朕夙ニ天位ヲ紹キ、今日天下一新ノ運ニ膺リ、文武一途公議ヲ親裁ス、国威之立不立、蒼生之安不安ハ朕カ天職ヲ尽不尽ニ在レハ、日夜不安寝食、甚心思ヲ労ス、朕不肖ト雖列聖之余業、

先帝之遺意ヲ継述シ、内ハ列藩・万姓ヲ撫安シ、外ハ国威ヲ海外ニ耀サン事ヲ欲ス、然ルニ徳川慶喜不軌ヲ謀リ、天下解体遂及騒擾、万民塗炭之苦ニ陥ントス、故朕不得已断然親征之議ヲ決セリ、且已ニ布告セシ通、外国交際モ有之上ハ、将来之所置尤重大ニ付、天下万姓之為ニ於テハ、万里之波濤ヲ凌キ、身ヲ以難苦ニ当リ、誓テ国威ヲ海外ニ振張シ、

祖宗　先帝之　神霊ニ対ント欲ス、汝列藩、朕カ不逮ヲ佐ケ、同心協力各其分ヲ尽シ、奮テ為国家努力セヨ、

（記）

本日、在京諸侯召に依り参内す、御学問所に於て謁を賜ひ、聖諭を示させられ、了て小御所に於て酒饌を賜ひ、夜に入りて退朝せり、此日参内の諸侯は、左の如し、

前田中納言（斉泰、前加州藩主）
越前宰相（松平慶永、前福井藩主）
美作中将（松平慶倫、津山藩主）
出雲少将（松平定安、松江藩主）
黒田下野守（長知、筑前藩世子）
毛利長門守（元徳、長州藩世子）
島津修理大夫（忠義、薩州藩主）
津和野侍従（亀井茲監、津和野藩主）
鍋島侍従（直大、佐賀藩主）

〔浅野長勲、芸州藩世子〕
安藝少将
〔護久、熊本藩世子〕
細川右京大夫
〔詮、平戸藩主〕
松浦肥前守
〔朗徹、丸亀藩主〕
京極佐渡守
〔隆備、綾部藩主〕
九鬼大隅守
〔氏恭、狭山藩主〕
北條相摸守
〔久利、出石藩主〕
仙石讃岐守
〔長和、西大路藩主〕
市橋下総守
〔誠成、丹後田辺藩主〕
牧野豊前守
〔高厚、豊岡藩主〕
京極飛騨守
〔俊滋、三日月藩主〕
森　對馬守
〔政詮、岡山新田藩主〕
池田信濃守
〔忠幹、新宮藩主〕
水野大炊頭
〔松平親貫、杵築藩世子〕
能見但馬守
〔安斐、竜野藩主〕
脇坂淡路守
〔高典、多度津藩主〕
京極下総守
〔長爵、岡田藩主〕
伊東播磨守
〔俊益、柳生藩主〕
柳生但馬守
〔貞篤、小泉藩主〕
片桐主膳正
〔英尚、園部藩主〕
小出伊勢守

〔徳定、若桜藩主〕
池田相摸守
〔明実、水口藩主〕
加藤能登守
〔直諒、高槻藩主〕
永井日向守
〔直哉、櫛羅藩主〕
永井信濃守
〔信親、栢原藩主〕
織田出雲守
〔徳潔、因州新田藩主〕
池田攝津守
〔重義、麻田藩主〕
青木源五郎
〔信正、丹波亀山藩主〕
松平圖書頭

【参照】

春嶽私記

廿八日（二月）　在京諸侯依　召参内（原註衣冠着用）、於御学問所御対面　聖諭之御書付御垂示、右相済後於小御所酒饌ヲ賜リ、夜ニ入テ退朝ナリ、

一三四　島津忠義・久光父子ノ勲労ヲ賞シ、物ヲ賜フ

明治元年二月廿八日、忠義・久光父子ノ勲労ヲ賞シ、物ヲ賜フ、

一三四ノ一　達書

積年　王事ニ勤労、遂今日　王政復古
皇運挽回ニ至候事、偏ニ両藩父子之尽力ニ有之、
叡感不斜候、猶此上益以勉励
王室を可奉輔佐被
思召候事、
辰二月廿八日

一三四ノ一　忠義・廣封へ賜物

御文台
御硯箱
御短刀（原註、銘国俊、御仕立、御金具銀雲ノ彫、御目貫金鳳凰、後藤一乗作）
○忠義ハ銘備州長船住兼光

（記）藩記ヲ載ス、
一御短刀　一腰（備州長船住兼光）
但錦御袋入
一御文台　一ツ
但柏白木箱入
一御料硯　一ツ
但書同断

右ハ昨廿八日午半刻、御参　内被為在候様、
御所ヨリ被　仰出、同刻御供揃、
御衣冠ニテ御参
内被遊候処、長門少将様ニモ御同様ニテ、暫時御扣之
処、於御学文所議定職之御方々御一同被為拝
天顔、於同所
勅書御拝見之上御復座、再太守様・長門少将様別段御
前ニ被為
召、右之通御拝領、御下リ之上三條前中納言様ヨリ、
此御方様並長州様ニハ積年勤
王之御志御厚
叡感被　思食上、之ニ付別段之御訳ヲ以、頂戴被
仰付、御文台・御料硯ハ、岩倉前中将様ヨリ
主上御持伝之御道具ニ付、被下候旨御達之旨承知仕候
積年王事ニ勤労、遂今日王政復古、　皇運挽回ニ至
候事、偏両藩父子ノ尽（力脱カ）ニ有之、叡感不斜候、猶此上
益以勉励　王室ヲ可奉輔佐被　思召候事、
御本文、即短刀等御拝領ノ御廉ニ付、長州様ヨリ
叡慮ノ御趣意、猶又御聞繕相成候処、御別紙御下ケ
相成候由、写御廻相成候段承知仕候間、此段以張紙

申上候、

右御三品之儀、非蔵人羽倉肥前ヨリ相渡リ候、

一外諸侯様方ニハ、未刻ヨリ御参

内之御達ニテ、追々御上リ、是又御趣意書御拝見之上、

太守様御始御一同、御酒肴・御菓子御頂戴之旨、非蔵

人右同人ヨリ承申候、左候テ酉申刻比

御帰殿被遊候事、

二月廿八日

【参照一】

元徳家記

右戊辰二月廿八日、長門守参　内、薩摩少将一同拝領

物之節、三條大納言殿於　御前被　仰渡候、

【参照二】

嵯峨實愛手記

二十八日諸藩被召出、御学問所御対面、

叡慮之旨以御書付被　仰聞畢、此後薩・長二藩同所被

召出、年来勤　王御賞有之、御短刀・御硯・文台右二

人同様賜之候、於小御所在京諸藩各被召賜酒肴、官武

一同相和有勧酬、奥座官武三職端座、非役武士着座也、

戌半退散、

一三五　軍令ヲ宣布セラル

明治元年二月十二日、御軍令ヲ宣布セラル、

御軍令

今度

聖断ヲ以　御親征被

仰出候ニ付テハ、偏ニ蒼生之塗炭ニ陥リ候ヲ被歎

思召候、鴻大之

聖慮ヲ奉戴シ、速ニ

皇国平治奉安

宸襟候様、御軍列ニ被　召・加候大小諸藩、大ニ軍備

ヲ厳ニシ、同心戮力尽忠誠可遂成功候事、

一海陸軍トモ進退駈引之儀ハ、其手々々之総督ニ委任

被　仰付候条、其旨可相心得事、

一私論ヲ以公事ヲ誤リ、各藩区々ニ不相成様、深ク心

ヲ可用事、

一別紙陸軍諸法度条々堅可相守事、

右之条々於相背ハ、可被処御軍法者也

慶應四年

陸軍諸法度条々

一長官々々之差図ニ随ヒ、諸事厳重ニ覚悟アルヘキ事、
一一勝ニ驕慢シ、一敗ニ挫折スベカラサル事、
一進戦之節ハ、総勢ヲ二ニ分チ、其一ヲ先鋒トシ、其一ヲ中軍トシ、交番ニシテ可相勤事、
　但路之遠近地之広狭ニヨリ、二駅或ハ三駅ニ分配止宿之儀モ可有之事、
一行軍ハ六里内外ヲ以、定則トスヘキ事、
　但敵境ヨリ先キハ、必ス申之刻ヨリ内着陣勿論之事、
一総勢之内交番ニシテ、身方地方ニテハ十分之一、敵境ヨリ先ハ五分之一之人数ヲ以、斥候差出、巡邏不怠可相勤事、
一各藩ヨリ一両人宛、総督陣営ヘ可相詰事、
一帰順之モノハ先ツ先手ニ相加ヘ置、実行相顕候上、寛容之御処分可有之事、
一宿陣之不自由、宿駅人馬之湊等、無余儀次第ハ令勘弁、聊権威ケ間敷振舞無之様可相心得事、
一於軍中、上下貴賤寝食労逸ヲ可同事、
一浮説流言等、総テ軍勢之気鋒ニ相拘リ候事堅不可唱、味方又ハ敵之情実難被差置事件聞及候節ハ、早速中軍ヘ可申出事、
一猥ニ神社仏閣ヲ毀チ、民家ヲ放火シ、家財ヲ掠ル等、乱暴狼藉ハ勿論、押買等堅禁制之事、
一喧嘩口論又ハ陣場之争ヒ等、堅致間敷様可相心得事、
一外国人ニ行逢ヒ、乱妨無礼難捨置節ハ召捕置、中軍ニ申出候ハヽ、曲直其国之公使江相糺、至当之御処置可有之ニ付、猥ニ放砲斬殺等堅禁制之事、
　但外国人之居住所江猥ニ不可立入事、
一銃砲弾薬並金穀等分取之品々ハ、中軍ヘ可申出事、
右之条々堅可相守者也、

慶應四辰年　　海陸軍大総督

以回状致啓上候、然ハ今日坊城殿ヨリ御仮建江被召呼、別紙御軍令書壱通御渡、其御許様方江可及御通達旨ニ付、右写指廻申候、早々御順達、留ノ御方ヨリ御返却可被下候、以上、

二月廿五日　　越前宰相内　島津十大夫　伊藤友四郎

御名〔島津忠義、薩州藩主〕〔長勲、芸州藩世子〕
淺野紀伊守様

北條相摸守様（氏恭、狭山藩主）
加藤遠江守様（泰秋、大洲藩主）
池田信濃守様（政詮、岡山新田藩主）
池田修理様（徳登、因州新田藩主）
市橋下総守様（長和、西大路藩主）

右御留守居中様

以廻状致啓上候、然ハ今日太政官代ヨリ御呼出ニ付、罷出申候処、別紙両通御渡御座候間、刻付ヲ以御順達イタシ候、此段得御意候、以上、

淺野安藝守
留守居

二月廿八日申ノ下刻　三宅万大夫

御名様

御留守居中様

外様略ス

別紙御廻章弐通、藝州様ヨリ順達ニ付、本書ハ亀井隠岐守様へ致順達、写相添此段申上候、以上、

辰三月十六日　新納嘉藤二（立夫）

伊勢様

一三六　上申稟請ノ書ヲ弁事局ニ進啓セシム

明治元年二月廿八日、凡ソ上申稟請ノ書、之ヲ弁事局ニ進啓セシメラル、

一三六ノ一
今般

大政御一新相成候ニ付、諸願伺届等都テ太政官代弁事役所江可差出候、但本紙ニ写書相添、二通ツヽ差出候様可相心得候事、

二月

一三六ノ二
藩記ヲ載ス、

右辰二月廿九日、太政官代江御用ニ付、御留守居附役赤井直之進罷出候処、非蔵人松室甲斐を以、右御書付被相渡候旨、内田仲之助より伊勢様宛之御届書相添、

一三七　佛・英・蘭公使参内ノ旨通達セラル

一三七ノ一
明治元年戊辰二月

薩州

明後晦日午半刻佛・英・蘭公使参
内被
仰付候間、為心得相達候事、
二月廿八日
右辰二月廿九日、太政官代江罷出候様切紙到来、御留守居附役赤井直之進罷出候処、非蔵人松室甲斐を以、右御書付被相渡候趣、内田仲之助より伊勢様宛之首尾書相添、

一三七ノ一
明治元年二月二十八日

〔徳川茂承〕紀伊中納言
〔松平慶倫、津山藩主〕美作中将
池田丹波守
稲葉右京亮〔久通、臼杵藩主〕
本多肥後守〔忠鄰、山崎藩主〕
酒井右京大夫〔忠義、前小浜藩主〕
谷大膳亮〔衛滋、丹波山家藩主〕
安藤飛騨守〔直裕、紀伊田辺藩主〕
牧野豊前守〔誠成、丹後田辺藩主〕
京極飛騨守〔高厚、豊岡藩主〕
以上連署〔ママ〕

木下備中守〔利恭、足守藩主〕
加藤出雲守〔泰令、新谷藩主〕
以上連署〔ママ〕

明後晦日午半刻、佛・英・蘭公使参
内被
仰付候間、為心得相達候事、
二月廿八日

徳川茂承・酒井忠禄
本多忠明家記

一三八　佛国公使入京ニ付警衛ニ混雑ナカラシム

一騎兵　三騎　藝州
一同　三騎　土州
一同　三騎　肥後
一同　五騎　薩州
一同　五騎　加州
一同　五騎　筑前
右明廿九日
佛国公使入京ニ付、騎馬警衛被
仰付候条、明暁天伏見迄出張右藩々申談、混雑無之様

警衛可致候事、
二月

別紙早々廻覧可被致事、
二月
佛国公使入京ニ付、別紙御書付二通、写之通淺野様衆ヨリ相達、本書ハ黒田様衆ヘ順達跡、写相添此段申上候、以上、
辰二月廿八日　内田仲之助〔政風〕
伊勢様〔島津広兼〕

島津忠義家記

明三十日午刻各国公使参内ニ付、日御門内外警固可致旨、御沙汰候事、
二月廿九日

【参照】

土方久元日記節録

明治元年二月廿九日
廿九日　雨
朝拜如例五時ヨリ参殿致拜謁候、今日ハ英国ミニストル及通弁官参殿ニテ、三條公御面会被遊候後ヨリ、太政官ニ罷出候テ、徳大寺殿ニ致拜謁、夫ヨリ三條公ニ又々謁シ、水戸大野謙助・一柳藩飯塚亀五郎ニモ致面会候処、主人鶴次郎殿ヨリ懇願之筋有之承候、夫ヨリ知恩院大僧正ニ致面会、夫ヨリ壬生殿ニ拜謁致シ、五時半比ニ引取候ナリ、

一三九　薩・藝・長三藩ニ外国公使朝参ノ際ノ三門守衛ヲ命ス

明治元年二月廿九日、薩・藝・長三藩ニ命シ、外国公使朝参ノ際、建春・日華・月華ノ三門ヲ守衛セシム、

各通　薩州
藝州
長州

一四〇　奥羽鎮撫使発途ノ日延期ヲ命ス

明治元年二月二十九日、奥羽鎮撫使発途ノ期日延日ヲ令セラル、

一四〇ノ一　　薩州

来三月朔日、奥羽鎮撫使京都発途之趣相達置候処、同二日発途ニ相成候間、其旨可相心得

御沙汰候事、

二月二十九日

一四〇ノ二
明治元年二月二十九日、鷲尾隆聚警衛ヲ命セラル、

鷲尾殿警衛拾人可被差出候事、

留守居ヨリ届書ヲ載ス、

御書付三通

但明三十日、各国公使参

内ニ付、警固之儀一通、

奥羽鎮撫使三月二日御発途之儀一通、

鷲尾様ヘ警衛之儀一通、

非蔵人

松室豊前

右ハ太政官代ヨリ只今御用御達有之、罷出候処、右豊前ヲ以被相渡、只今御請書差出候様御達ニ付、差上置申候、右之通只今私共差支、御留守居付役勤永山左内相勤申候間、御書付相添此段申上候、以上、

辰二月廿九日　　内田仲之助

伊勢様

一四〇ノ三
御書付二通

但外国交際之儀
〔朱〕「太行太政官日誌ニ有之候付御書留略ス」
叡慮之旨被

仰出、各国公使急々参

朝被仰付候儀一通、
〔朱〕「太行朱書、右同断」
右ニ付、古来ヨリノ次第

三職ヨリ御達之儀一通、

非蔵人

松尾伯耆

右ハ今日御用之儀有之、太政官代ヘ可罷出旨、以切紙御達有之罷出候処、非蔵人右伯耆ヲ以被相渡、御触下ヘ早々布告可致旨被相達候付、可申上旨申述置申候、

右之通、今日私共差支、御留守居附役永山左内相勤申候間、御書附相添此段申上候、以上、

辰二月十七日　　内田仲之助
〔関山金生〕
糺様

追テ、御触下ヘハ私共ヨリ早々御廻達可仕候、

一四一　藩内所役々ヘ取締心得ヲ達ス

明治元年戊辰二月

今般締方横目並番所詰見聞役等引取ニテ、番所詰之儀ハ、所曖・与頭ヘ申付候段ハ、別段申渡通ニ候、就テハ所役々自然権勢ニ募リ、船改等ノ節不作法ノ儀共有之候テハ、屹ト不相済事候ニ付、其勤職ノ者ハ一涯律儀廉直ヲ相守、聊心得違ノ事共無之様、兼テ地頭ハ勿論、郡奉行ニモ万事致主宰、取締向等諸事厳密行届候様可被取計候、此旨地頭・郡奉行ヘ可申渡候、

慶應四年辰二月廿九日　　刑部(久修)新納

一四二　タバコ商人國分本町永山仁兵衛聞書

明治元年戊辰二月

國府本町(国分市)　永山仁兵衛

外ニ鹿児島ヨリ　壱人

右問屋江忍罷在候処、五日晩八拾人位抜身ヲ以、家宅廻リ相囲ヒ、弐拾人位踏込召捕、御城内江引越、柱江ク、リ付、抜身ヲ以両方ヨリ首ニアテカヒ、鎗ヲ以尻江差当、御屋敷之形行可申出攻掛候得共、御城下ヨリ十里余相離レ、田舎者ニテタバコ商売ニテ罷在候間、何モ存不申旨申出、外ニ鹿児島人ハ、城下之者ニ候ハヽ、シラヌト申ハ無之筈問掛、私ニモ手代江罷居候者ニテ、全クノ売人ニ候段、頻ニ断申出候得ハ、柱江クヽリ付被居、夜四ツ時分ニモ候哉、其侭臥居候半、鼻息ノ音相聞得、誰ニテ可有之哉トノ事候処、召捕之薩人ト相知レ、左候ハヽ、売人別条有之間敷、差出候トノ儀ニ候半、縄付ナカラ被引起外江列行候処、拾五歳位之若衆刀之鯉口ヲツマミ放シ、薩摩者ニ候ハヽ、私親ノカタキニ候間、為切呉候様頻ニ被相望候得ハ、是ハ売人ニテ差免呉候付、士ヲ召捕御方江可相渡ト被申、御城外ニテ縄ヲ解キ差免候間、可帰ト被申聞候得共、実正有之間敷、定テ可被殺ト存候処、問屋迄之道筋迄モ被教候間、問屋江帰リ不慮之死ヲ免レ候由、

右二月廿九日國府小村ニ於テ聞書

一四三　佛・蘭公使等参朝シ拝謁ヲ賜ハル

明治元年二月

晦日、佛国全権公使レオン・ロッシュ(Léon Roches)及ヒ船将二人、蘭国公務代理総領事ド・デ・クラフ・フアン・ポルスブロック(D. de Graefe van Polsbroek)及ヒ書記官　朝参ス、

天皇之ヲ紫宸殿ニ延見シ、益々交際ヲ厚クシ、之ヲ久遠ニ要スル之旨ヲ　勅諭ス、公使等恩命ヲ奉シテ退ク、

一四三ノ一　御門御対面被致度候間、明三十日第一字参

朝有之度候、右之趣御案内申入候、此段如此御座候、

以上、

二月廿九日

〔鍋島直大、佐賀藩主〕
肥前侍従
〔伊達宗城、前宇和島藩主〕
宇和島少将
〔通禧〕
東久世前少将

デー・テ・クラフ・フアン・ポルスブロック閣下

一四三ノ二　明治元年二月三十日

二月三十日午ノ半刻、佛国公使レオン・ロッシュ、ベニュス・船将ロワ、シュビレッキス・船将ペティトワール参

朝、

但副総裁始メ公卿・諸侯及掛リ役員列座、

一皇帝陛下親シク勅シテ曰、貴国帝王安全ナルヤ、朕之ヲ喜悦ス、自今両国之交際益親睦永久不変ヲ希望ス、

佛公使曰、

天皇陛下今日各国公使等ニ拝謁ヲ賜ヒシハ、余佛国ニ対シ玉ヒテ、御厚意ナル確証ト仰キ奉ル也、　貴国ノ衆民ニ於テモ、如斯高明ナル証ヲ知ル上ハ、即チ

天皇陛下之尊キ　御宸意ヲ遵奉スルコト疑ヲ容レサル所ナリ、故ニ今日ハ即後来ニ長ク記念スヘキ日ニシテ、貴国ト各国ト、至誠ノ交誼ヲ親クスル始ナルヲ以テ、余我国帝陛下ニ代リ、

天皇陛下並ニ貴国之幸福盛美ヲ祈リ、深ク神明ノ守護アランコトヲ奉願也、

同日和蘭国公使ド・デ・クラフ・フアン・ポルスブロック、書記クラインゲース参

朝、

一皇帝陛下自カラ勅スル前ノ如シ、

和蘭公使曰、随近報承リ候処、和蘭国王陛下安全也、

天皇陛下長ク御安全ヲ保タセ玉ヒ、且御在位幾多之年ヲ重ネ玉ハンコトヲ希望シ奉ル也、

一四三ノ三　外国公使参　朝次第

一前日各国公使ヘ何刻(原註、西洋第幾字)令参内之旨、外国事務輔ヨリ書翰ヲ以三ケ国公使ヘ通達ス、

一当日各国公使参内之節、外国掛リ公卿・諸侯建春門内迄出迎、

但外国掛リ判事一人ツヽ、公使旅館迄前導トシテ被遣、公使同道ニテ参内ス、

一公使虎ノ間迄誘引、外国事務輔相勤、

但判事附添、

一虎ノ間座席進退、外国掛リ公卿・諸侯相勤、

但判事準之、

一茶菓ヲ賜フ程合ハ、外国掛リ判事取計ヒ、配膳ハ使番ニテ取扱、

一各国公使相揃候段、外国掛公卿・諸侯ヨリ以非蔵人注進、

一副総裁及外国事務督・輔、内国事務督・輔出会ス、

一皇帝出御于南殿、

一内国事務輔出御之旨ヲ外国掛リ公卿・諸侯ヘ通達ス、

一外国掛リ公卿・諸侯公使ヲ誘引ス、

但虎之間ヨリ日華門内ノ東階マテ誘引、夫ヨリ直ニ昇殿、

但判事(徴士)日華門外マテ、外国掛リ非蔵人ハ東階下マテ附添、

一日華門内、外国掛リ公卿・諸侯誘引之、先ヘ内国事務輔先導ス、

一公使ノ日華門内ニ入ルヲ見テ、楽ヲ奏ス、

一前導ノ内国事務輔誘引シテ、直ニ本座ニ着ス、

一公使東階ヨリ昇殿、外国事務輔誘引ス、

一公使拝天顔、

一公使名披露、山階宮・三條大納言侍ス、通訳外国事務判事伊藤俊介亦侍ス、

一有

勅語、大臣山階三条之ヲ伝フ、
一公使奉答ス、
一判事公使ノ奉答ヲ言上ス、
一公使随従之士官進テ拝
天顔、
一随従士官名披露、判事言上ス、
一判事伝
勅旨、
一礼式相済、公使西階ヲ下リ、月華門ヨリ退ク、
一公使ノ月華門外ヘ出ルヲ見テ、奏楽ヲ止ム、

一四三ノ四 藩記

明治元年戊辰二月
今日巳刻、依召御衣
冠・御巻纓・御差貫・御帯剣ニテ、御車寄ヨリ
御参内御扣席江御通被遊候処、佛・蘭両国公使参朝
天顔拝被　仰付、右御式ニ付、御勤向等被為済、七半
時御出口之通被遊
御帰殿候事、
二月晦日

一四四　英国公使刺客ノタメ参朝ヲ果サス

是日、英国公使(Sir Harry Parkes)モ亦将ニ　朝セントス、途中刺客アリ、
其従衛ヲ衝突ス、遂ニ　朝スルヲ果サス、

一四四ノ一 明治元年二月晦日

肥後藩上申書

今晦日、英人参
内之儀被
仰出、午刻頃知恩院旅館新門ヲ出候ニ付、三藩警衛之
人数ハ前後ニ罷在候処、通行之途中、新橋通縄手辺ニ
於テ狼藉者有之、英人ヘ手ヲ負セ候ニ付、右参
内之儀ハ見合、同所ヨリ旅館ヘ引返候由申出候ニ付、
此段不閣御届申上候、以上、
細川右京大夫内
二月晦日　青地源右衛門

内国事務局叢書

一四四ノ二 明治元年二月晦日

肥後藩隊長上申書

昨晦日、英国公使参

内之節、私共儀途中警衛トシテ、尾州・阿州之隊長申談、行列先ヲ守衛仕、午半刻知恩院発途縄手迄押行候処、英人之騎馬隊列ヲ乱シ、不一方混雑ニ付、銃卒行列ヲ円メ、早速場所へ乗付候処、士一人軒下へ斬倒レ、一人ハ被生捕居候付、猶縄手通之左右絶切、通路ヲ留取固、同類吟味イタシ候処、右両人之外見掛不申、然処後藤象次郎ヨリ、一応英人為引取候様附属之者へ申聞候間、其通相心得厳重ニ守衛イタシ、知恩院へ引取申候、此段御届仕候、以上、

三月朔日　　堀内弾右衛門
　　井上儀左衛門

細川右京大夫内〔護久、熊本藩世子〕

内国事務局叢書

一四四ノ三
明治元年二月晦日

巡邏諸藩上申書

今晦日、英人参

内之由ニテ、新橋通縄手筋へ通掛候処、北之方ヨリ帯刀之者二人計罷越、刀抜馬上之英人へ切付由、依之早速警固方ヨリ右帯刀人ヲ討留、壱人ハ召捕候趣ニ御座候、未何方之者共不相知候得共、不取敢此段御届申上候、以上、

市中
　　御取締方

二月　　弁事局記

一四四ノ四
明治元年三月十三日

山崎藩隊長上申書

去月晦日、英国公使参

朝之砌、肥後守人数、新橋通リ辻々警衛被　仰付候処、元来小藩小人数之上、右新橋通リハ小辻等殊之外多ク御座候ニ付、聊ノ人数夫々ヘ分配為仕厳相守、私共儀ハ新橋通リ半途ニ屯集仕居、屢持場内辻々巡見等仕候ニ付、新橋通リ持場中ハ、英人モ無滞通行相成候、然ルニ新橋通リヨリ縄手通リ北ヘ廻リ候テ、俄ニ人馬動揺ノ体相見ヘ、如何之訳哉ト相窺居候ヘハ、何者共不相分、右縄手ノ辻南ノ方衆人群集ノ中ヨリ突出、乱暴相働候趣ニ相聞ヘ、右縄手ハ最早持場外ニハ相成居候得共、夷人御警衛阿州様御人数等ハ、持場中全ク通リ切ニモ相成居不申、新橋持場境ヘハ少々軽輩ノ者差出置

候ニ付、不取敢外辻々分配ノ人数引纏、持場境迄押出シ度存候得共、何分人馬ノ蹂躙甚敷、夷人銃隊並ニ阿州様御人数モ、当方持場ノ方ヘ次第々々ニ御戻シニ相成、往返ノ混雑動揺ニテ、持場際迄人数ノ運ヒ更ニ相付不申、種々心配仕、漸々人数押出候処、素々短兵急ノ挙動ニ付、最早乱暴之徒倒死仕候次第ニ御座候、就テハ右残党余類抔、万一持場群聚之中ニ潜伏等ノ程モ難計相心得、乍不及夫々手配申付候得共、差テ怪敷見請候者モ無之、殊ニ衆人群乱之中ニ、諸藩士等モ混交仕候儀ニ付、自然疏忽之所業ニ相成候テハ、却テ恐入候ニ付、前後模様相伺居候折柄、外国事務御掛ヨリ、一ト先英人帰宿ニ付、道筋之群聚追払候様被仰渡、早速町家ハ店等締切申付、尚知恩院門前迄、諸人ハ尽ク相制シ帰宿ニ相成候、勿論前書之通、群聚中急遽之儀、別テ持場離レ之場所ニモ御座候間、何事モ確証ニハ難相成御座候得共、唯々見受候形勢而已荒々奉申上候、尤持場接近ノ場ニ付テハ、彼是心配モ仕候間、早速右之趣、尾州様・紀州様迄申上置候、右及乱暴候場所ハ、縄手通辻ヲ少々北ヘ相廻リ居候場所ニ御座候ノ間、初度ノ委細ハ何共難相分、右之外ニ申上候廉モ御座ナク候得共、御尋被仰出候ニ付、不取敢以書取奉申上候、以上、

本多肥後守〔忠鄰、山崎藩主〕
人数隊長
小野源大夫

本多忠明家記

三月十三日

一四四ノ五
明治元年三月十七日

紀伊以下十一藩上申書

紀伊中納言〔徳川茂承〕内
隊長
西郷清輔
安藤治兵衛

此外十藩
隊長連名

今般英国公使入京之処、知恩院ヘ止宿ニ付、私共隊ニテ近辺警衛之儀被仰付、昼夜廻番巡邏等、無怠慢相勤罷在候処、尚又去ル晦日、右公使参朝之筈ニ付、往還道筋警衛之儀被仰付候ニ付、各藩申合、別紙之通往還之受場割ヲ以、人数手配等仕候儀

ニ御座候、然ル処右公使参
朝掛ケ、於縄手辺乱妨之所業有之、終ニ参
朝及延引候段御不都合之儀ニ付、右縄手辺ハ何レ之人
数受場ニ候哉、取調可申上旨、本多肥後守家来へ被
仰聞候趣承知仕、則取調候処、右ハ発端各藩申合、手
広之場所ニテ辻々等多々故、自然取混候事哉、配当拔
ニ相成有之、今更如何共申上方無之、隊長一統不行届
之段、何共奉恐入候儀ニ御座候、此段御詫申上度手続
之趣有体奉申上候間、宜御取扱被成下候様仕度奉願上
候、以上、

三月

別紙

英国公使参　朝之節、警衛道順

新橋通辺
本多肥後守隊
三條通境町通リ
池田丹波守隊〔政礼、岡山新田藩主〕
押小路通リ境町辺
木下備中守隊〔利恭、足守藩主〕
境町御門辺
池田相摸守隊〔徳定、若桜藩主〕
故院
御所辺
一柳因幡守隊〔頼紹、小松藩主〕
日之御門辺
京極飛驒守隊〔高厚、豊岡藩主〕

従是帰路

清和院御門辺
前田飛驒守隊〔利益、大聖寺藩主〕
丸太町通リ寺町辺
加藤出雲守隊〔泰令、新谷藩主〕
押小路通リ寺町辺
本庄伯耆守隊〔宗秀、前宮津藩主〕
三條大橋辺
稲葉右京亮隊〔久通、臼杵藩主〕
縄手新門前
紀伊中納言隊

批紙

辻堅之十一藩、書面之通一同奉恐入候得共、乱妨之場
所近ハ紀州・本多ニテ、右両藩御所置其他ハ御構不被

為在候事、

三月

刑法事務局
徳川茂承家記

一四四八六
明治元年二月晦日

暴動概状

左之文ハ、千八百六十八年ヨリ千八百六十九年ニ至ル英国外交往復書集第一巻中（原註 従第七百九葉 至第七百十葉）ニ載スルトコロヲ訳スルモノニシテ、当時我国ニ在留セシ彼国公使ヨリ、本国外務執政ヘノ報告ニ係ル、

○英公使ハルリー（Harry Parkes）・パークス及衛士等、京師ニ於テ襲撃ニ逢フ、

今月廿三日（千八百六十八年三月）京師ニテ、英公使ガ天皇ニ謁見セント参　朝之途中、狂暴ノ襲撃ニ逢フタル事ハ、読者ノ既ニ聞知スル所ナリ、今其実況ヲ明解セントスル、宜ク此日公使ガ、其旅館ナル寺院ヲ出テシ際ニ於ケル行列之次第ヲ心ニ記スルヲ要ス、扨テ其行列タルヤ、公使館ノ衛士監督某ト旧薩摩藩士ニシテ、今ハ朝廷ノ官吏タル中井弘蔵（弘）ナル者ノ両人、之カ先駆ヲナシ、其次ハ公使館附騎馬ノ衛士、其次ヲパークス公使トス、外国事務局ノ重官後藤象次郎、馬上ニテ其傍ニアリ、サトウ（Satow）氏亦之ニ伴フ、ブラトシヤウ及ブリュースノ両佐官、第九連隊ノ兵ヲ率ヒ又之ニ従ヒ、ミツトフオルト氏ハ、馬ヲ得サレハ肩輿ニテ其後ヨリス、爰ニ一大天幸ト云フヘキハ、公使館附医官ウヰルス（William Willis）氏、並客員トシテ公使ニ随従シ上京シタルボルス及ライデイデインクスナル英国海軍之両医官、亦此日夫ノ行列ガ闕門ニ入ルノ景況ヲ観ント、其列後ニ随行セリ、斯クテ旅館ヨリ行クコト僅カニ数百ヤルトニシテ、夫ノ行列ノ先手既ニ街角ヲ転スルヤ、忽然数名之日本人、両傍ノ人家ヨリ突出シ来リ、刀ヲ揮テ縦横無尽ニ切廻リ、其勢頗ル猖獗ナリ、於是乎馬ハ此騒動ニ驚キテ暴レ出シ、加フルニ街路狭隘ニシテ、警衛ノ士モ其手槍ヲ使用スルニ自由ナラサルヲ苦ム、時ニ中井弘蔵急ニ馬ヨリ飛下リ、進テ暴徒ニ向ヒ戦フタリシガ、偶々蹉跌シ痛ク頭部ヲ傷ク、折柄今一人之暴徒（此挙ヤ暴徒ノ数僅ニ二人ナリシト見ユ）又闖入シ来リ、前後左右ヲ乱撃シ、人ヲ傷スル甚タ尠ラス、此時ニ当リ後藤象次郎ハ、公使ト共ニ尚未タ街角ヲ転セサリシガ、先

手ノ此騒擾ヲ視ルヨリ、忽チ馬ヲ下リ馳セ赴ヒテ、既ニ危ク見ヘタル中井ヲ救ヒ、立トコロニ彼ノ暴徒ヲ斬リ、其首ヲ刎ネタリ、然ルモ後ヨリ出タル今一人ハ、尚ホ恰モ猪子ノ荒ルヽカ如ク、四方ヲ切廻リ、身ニ銃剣・槍刀或ハ拳銃ノ為ニ数ケ所ノ疵傷ヲ受クルト雖トモ、更ニ屈スルノ色ナク、其挙動ノ意外ニ出テ、進退ノ神速ナル、実ニ驚クヘキ数多ノ人ヲ傷シ、遂ニ人家ノ後園ニ逃レ去ルニ及ヒ、力尽キ勢窮テ此ニ捕縛ニ就キタリ、此変ヤ警衛ノ士卒傷ヲ被ムル渾ヘテ九人、但シ其内一人ハ日本人ナル馬丁ニシテ、又馬之被傷四頭ナリト云フ、途中斯ル事変ノ生セシ事ナレハ、先ツ参朝ヲ見合セ、第一ノ急務ハ、夫ノ傷者等ヲ旅館ニ送リ還スニ在リ、初メ此変ノ起ル、事不意ニ出テ、敵ノ多少計リ難ク、衆群中ノ人又ソノ敵タルモ知ル可ラズ、加ルニ狭隘ナル街路ニ於テノ事ナリ、斯ル際ニ臨ンテ、彼輩皆毫モ屈スル所ナク、非常ノ働ヲナセシハ、実ニ賞スルニ堪ヘタリ、而シテ為ニ傷ヲ負フタル者ノ内ニハ、流血甚ク殆ント死ニ至ラントスルノ恐アルアリ、是ニ於テ医官等畢生ノ力ヲ尽シテ、是等ハ先ツ仮リニ血止メノ手当ヲ施シ、血液欠耗ノ為メ、身体既ニ衰弱ヲ極メ、馬ニ跨リ能ハサルハ、人夫ヲ傭フテ之ヲ運搬セシメタリ、但シ人夫ヲ傭フニ少シク時間ヲ消費セリ、又稍ヤ身体ノ自由ヲ得ルハ、苦ヲ忍ヒ馬ヨリ帰館セシメ、又夫ノ捕縛ノ暴徒ハ、人夫居サレハ其近傍ニ店ヲ出セル商人両人ヲシテ、強テ之ヲ運バシメタリ、

医官等カ治療ヲ施スニ、勉強ニシテ能ク深切ヲ尽シ、且其術ノ巧妙ナリシハ誠ニ感スルニ余リアリ、殊ニ之ヲ補助スルノ人モナク、只タ暫時間ニ、先ツ仮リニ傷所ノ手当ヲ終リ、傷者ヲシテ、速ニ病床ニ安臥スルヲ得ルニ至ラシメタルハ、実ニ是レ医官之功ト云フベシ、却説、夫ノ捕縛ニ就キタル暴徒ニ於テハ、取敢ヘス吟味アリシニ、外ニハ与党ナシト陳シ、元ト己レハ大坂ノ近傍ナル某寺ノ僧徒ニテ、親兵隊ニ編入セラレンコトヲ志シ、京師ニ出タル旨ヲ供セシガ、第二回ノ吟味ニテ、始メテ外ニモ与党アリ、共ニ相謀テ外人ヲ殺害セン為メ来リシ旨ヲ白状セリ、是ニ於テ、先キニ後藤象次郎カ斬ル所ナル彼一人ノ首級ヲ出シ、之ヲ示スニ即チ其党与ナリト云フ、而シテ渠レ又云フ、己レ此前曽テ外人ヲ見タルコトナシト、又第三回ノ吟味ニ至リテハ、外ニ尚ホ三名ノ党与アリテ、渠レ若シ事ヲ果サヽ

ルトキハ、彼輩相続ヒテ起ルノ手筈ナリシト白状セシカハ、其党与悉ク皆直ニ捕縛セラレタリ、

抑此挙ヤ、僅ニ両人ニシテ、殆ント七拾名許ノ英人ヲ襲撃シ、斯ク多人数ヲ傷スルヲ得タルハ、実ニ是レ驚クニ堪ヘタリ、此日パークス公使ハ盛服ヲ着シ、肥大ノ馬ニ乗居タルコトナレハ、暴徒之ヲ目指シ、刀ヲ揮テ切掛ケタリシカ、渠レ偶々跌キ其狙ヲ失セショリ、其刀ハ公使ノ馬丁ニ及ヒ、馬丁其脚部ヲ傷セラレ、サトウ氏ノ乗リタル馬、マタ之カ為二カ所ノ疵ヲ被ムリ、公使ハ幸ニシテ奇難ヲ免レタリ、

此変ニ就テハ、天皇政府ノ措置誠ニ喜フベキアリ、彼ヨリ求ムルアルヲ俟タスシテ、英公使ニ対シテノ此無礼ニ謝スルノ道ヲ尽サレ、其夕直ニ天皇ヨリ親シク勅使ヲ以テ公使ヲ慰労アリ、且ツ

朝廷ノ官吏及重立タル諸侯等、又自ラ来リテ負傷者ヲ訪ハル、等、其痛歎ノ情、真ニ誠心ニ出ルヤ疑ヲ容レサル所ナリ、然トモ政府カ其実情ヲ表セラレタル第一ノ確証ト云フヘキハ、外人ニ対シ暴挙ニ及フハ、

朝廷ニ於テ甚タ悪ムヘク、嫌フヘキノ所行ト思惟セラル、旨、布告ヲ以テ全国ニ知ラシメラレタルノ一事ニシテ、武士タル者斯ル犯罪アルニ於テハ、佩刀ヲ奪ヒ、身分ヲ下シテ士籍ヲ削ルヘク、又其罪ノ重大ニ渉ルモノハ、死刑ノ上三日ノ梟首ニ処スヘシトノ事ナリキ、

天皇既ニ親シク、外人ニ対シ友情ヲ表セラル、ノ明証ヲ与ヘラレ、又加フルニ此令アリ、是ヨリシテ日本人中マタ外人ヲ疾悪スルノ思念、竟ニ地ヲ払フテ絶滅スルニ至ルハ必然期スヘキカ、若シ実ニ今般ノ挙ノ如キ、即チ此思念ヨリ出タルモノタラサルヲ得ス、外人ヲ殺害シ、我身死罪ヲ免レサルハ、彼輩亦自ラ之ヲ知ルト雖トモ、憂国ノ熱心制抑シ難キノ然ラシムル所ナリ、

是レ彼ノ暴徒ノ口ヨリ出タル語辞ニ依テ徴知スルニ足レリ、渠レノ如キハ、斯ク外人ヲ殺ント迄謀リシモ、後漸ク外人ガ甚タ己レニ懇親ナルヲ知リ、始メテ先キニ報国ノ為メト妄信シタル所行ノ、却テ非ナリシコトヲ悔悟セシト云フ、

外務省記

【参照一】

春嶽私記節録

明治元年二月三十日

春嶽私記ニ云、晦日、今日外国公使入　朝拝礼之事ア

リ、第一字ヨリ佛・蘭之公使ハ入　朝シテ、英国公使ヲ待ニ不至、朝三字ニ至ツテ、入　朝之途中ニテ乱妨ニ逢フノ風聞有之候付、速ニ二国公使ヲシテ拝礼之儀式ヲ竟ヘシメ、畢テ於板敷諸官対接中ヘ後藤象二郎来テ変ヲ告ク、其次第如左、

英公使知恩院之旅館ヨリ十二人之騎兵ヲ前駆トシ、中井弘蔵先導シテ、門前ヨリ縄手通リニ右転シ、象二郎ハ猶公使ト共ニ門前町ニアル時、前途俄然トシテ騒擾ヲ発スル故、象二郎乗付ケミタルニ、弘蔵一浪士ト戦ヒ、弘蔵既ニ手負テ倒レタル際ナリ、象二郎馬ヨリ飛下リ、忽チニ右相手之浪士ヲ討留メ、猶同類之有無ヲ尋ルニ、英之通弁官サトー此場ニアリシカ、今一人ヲ見タリトイヘル故、其辺捜索スルニ、町家之軒下ニ一人之手負アリ、就テ見ルニ重傷ニシテ、気息奄々タリ、水ヲ与ヘ介抱シテ、英人ト立会、同類ヲ問フニ、初ハ隠セシカト、已ニ一人ヲ生捕タリトイフニ因テ、二人之姓名出処ヲ白状ス（案スルニ、上文討留ノ外別ニ生捕アルニ非ス、蓋シ辞ヲ設ケシモノナリ〔友厚〕）、此時朝廷ヨリ迎ニ出タル五代才助行懸リタル故、象二郎ハ才助ヲシテ公使ヲ導キ、旅館ニ帰ラシメ、象二郎ハ弘蔵之手当等ヲ命シテ、唯今参

朝セリト、白キ羽織ノ紐袴等ヘ鮮血ヲ濺キ、息モ継キアヘス注進セリ、諸官是ヲ聞テ驚愕騒然タリ、不得止両国公使ヘモ此由ヲ告タルニ、頗憂労之気色アリ、英公使ヨリノ書簡（原註、之ヲ佚ス）モ来リ、匆々トシテ辞シテ退朝セリ、○英之騎兵九人外ニ士官一人傷キタリ、九人ハ軽傷ニシテ、一人ハ重傷之由、弘蔵頭上之傷稍深ケレトモ絶命ニハ至ラサル由、

【参照二】

大久保利通日記節録

明治元年戊辰二月廿九日

一今朝岩倉公ハ参殿、太政官ヘ出席、七字退出、

晦日

一太政官ヘ出席、七字退散、今日英・蘭・佛公使参内、公法ヲ以

天顔拝被　仰付、英公使参　朝掛、於新門前暴客両人之者有之、及乱妨歩兵一人傷ケ候故ヲ以テ不参也、後藤・中井防禦、一人ハ切留、一人ハ召捕候由、大和之浪人也、外国掛宇和島侯ヘ久世公・肥前公、内国掛ヨリ徳大寺公御出ニ付、（貞臣）廣澤・小生同道参ル、

一四五　晃親王以下英国公使ヲ慰問ス

明治元年二月三十日

外国事務局督晃親王以下ヲ英国公使ノ客館ニ遣シテ、之ヲ慰問シ、且書ヲ遣リテ之ヲ謝ス、又諸藩ニ令シテ犯人ヲ捜索シ、警護ヲ厳ニス、尋テ護衛之隊長ヲ按問シテ之ヲ譴罰ス、

明治元年二月三十日

春嶽私記ニ云、公使退　朝後、諸官集議之上、外国掛リ山階宮・東久世殿・宇和島老侯、内国ニテハ徳大寺殿並吾公等、速ニ英公使旅館ニ御行キ向ヒ、発作不慮之御挨拶アリ、公使モ無余儀情態ヲ目撃セシ故カ、敢テ怒ラス、明日早謝状ヲ給ハラン事ヲ申出タリ、公豫侯ト共ニ公使之便室ニ入、閑晤スル談話平常ニ異ナラサリシ由、翌朔日三條・岩倉両卿御退散ヨリ旅館ヘ御行向候、昨日之暴動ヲ謝セラレ、生捕之者ハ、来ル四日帯刀ヲ奪ヒ士籍ヲ削リ、斬首シテ三日之間梟木ニ懸クヘキノ書面ヲ示サレタリ、

昨日於途中同類申合、白刃ヲ以随兵ヘ為手負候ニ付、

参　内モ被差延、御交際ヲ妨乱行之始末、重畳之不届者ニ付、帯刀ヲ奪ヒ士籍ヲ削リ、来ル四日顕戮斬罪之上、三日之間令梟首事、

【参照】

土方久元日記節録

明治元年二月

三十日　晴

朝拝如例、今朝武田耕雲(正生)齋孫金次郎参殿ニテ致面会、色々評議之上、事情申上候、出澤考次郎ト申、右同藩之人ニモ致面会候、昼後ヨリ佐々木三四郎(高行)方ニ行、林亀吉・毛利恭助(吉盛)其外数来候テ致小酌候、尤長崎表コトトモ承候、五時半比罷帰申候事、

今日午半刻ヨリ英・佛・蘭之公使参　内被　仰付候所、於途中英国人ヘ対シ、乱妨者有之、浪士二人ニテ、十人計モ手疵ヲ為負、不容易騒動ニテ、右一人被生捕、一人ハ後藤象次郎ヨリ討留候由、夫ヨリ英国公使ハ引帰候テ、参内ハ止ミ候ナリ、依之徳大寺殿・東久世殿・宇和島侯英国旅館ニ行向ヒ、御挨拶有之候由、自分モ條公ヨリ右事変ニ付、佛国ヘ御使者被　仰付候テ、四半比ヨリ佛国旅館ニ行、公使ニモ致面会、八ツ過致帰宅候ナリ、

一四六　英公使乱妨犯人捜索ト警護ヲ諸藩ニ命ス

一諸藩ニ令シテ、英公使参朝ヲ乱妨スル犯人ヲ捜索シ、警護ヲ厳ニシ、後日ヲ戒ム、

一四六ノ一
明治元年二月三十日
諸藩へ達書

今般被
仰出候通、今晦日英国公使参
朝掛於途中乱妨之所業有之、終ニ参
朝及延引、実以不容易事体致出来、此御処置振如何収
拾相整ひ可申哉と、深被為悩
宸襟、誠ニ以奉恐入候次第、就ては前以厳重　御沙汰
之趣も有之末ニ候条、於藩々も猶又手厚被糺、不審之
者有之候ハヽ召捕、速ニ可申出候、万一等閑ニ相心得
候者、於有之ハヽ、屹度御咎被
仰付候事、

二月

島津忠義家記
黒田長知家記

一四六ノ二
明治元年二月三十日
警護諸藩へ達書

今般被
仰出候通、今晦日英国公使参
朝掛於途中乱妨之所業有之、終ニ参
朝及延引、実以不容易事体致出来、
皇国之御大事ニも相係り候儀ニて、此御処置振如何収
拾相整可申哉と、深く被為悩
宸襟、誠ニ以奉恐入候次第ニ候、就ては其藩之儀、兼
て警衛被
仰付置候得は、別て厳重可致守衛は勿論之事ニ候得共、
猶以厚可相心得候、此往万一右様之所業出来之節、警
衛之者傍観体之儀於有之は、其主人之落度ニ被
仰付候事、

二月

島津忠義家記
徳川義直家記

一四六ノ三
今般被
仰出候通、今晦日英国公使参

朝掛、於途中乱妨之処業有之、終ニ参
朝及延引、実以不容易事体致出来、
皇国之御大事ニも相掛り候儀ニて、此御処置振如何収
拾相整可申哉と、深く被為悩
宸襟、誠ニ以奉恐入候次第ニ候、就ては兼て其藩之儀、
市中巡邏被
仰付置候得は、別て厳重可致取締は勿論之事ニ付、厚
可相心得候、此往右様之所業出来之節は、其主人之落
度被
仰付候事、
二月

一四六ノ五
御書附三通
内一通
今晦日英国公使参
朝掛、於途中乱妨之所業有之、参
朝及延引、就テハ厳重可致守衛等之儀、一通前条同
断ニ付、猶又手厚被糺、不審之者有之候ハ、召捕、
速ニ可申出等之儀、一通前文同断ニ付、別テ厳重可
致取締之儀、

右ハ、今晩弁事局ヨリ御用ニ付、御留守居附役隈元
敬一郎罷出候処、御用掛松室豊前ヲ以、右御書附被
相渡候付、可申上旨申述罷帰候段申出候間、相添此
段申上候、以上、
辰二月三十日　内田仲之助〔政風〕
伊勢様〔島津広兼〕　島津忠義家記

一四七　大山綱良奥羽鎮撫使参謀ヲ命セラル

大山格之助奥羽鎮撫使参謀ヲ命セラル二月晦日〔綱良〕
一四七ノ一　大山格之助

右奥羽鎮撫使参謀被
仰付候条、
御沙汰候事、
二月三十日

一四七ノ二
御書附一通
但
大山格之助奥羽鎮撫使参謀被仰付候儀、
右ハ軍防局ヨリ御用ニ付、御留守居附役隈元敬一郎罷

出候処、御用掛松室豊前ヲ以、右書附被相渡候付、可申上旨申述置罷帰候段申出候間、相添此段申上候、以上、

辰二月卅日　　内田仲之助

伊勢様

追テ、黒田了助事参謀被仰付置候得共、願之趣被聞召候旨相達候、此段モ申上候、以上、

一四七ノ三　　大山格之助

右者奥羽鎮撫使参謀黒田了介〔清隆〕江被仰付置候得共、差支之儀有之候付、被成御免、代右格之助江被仰付被下度奉願候、此段申上候、以上、

薩摩少将内　　内田仲之助

二月晦日

一四八　小松帯刀参与職・総裁局顧問ヲ命セラル

小松帯刀徴士参与職・総裁局顧問ヲ命セラル二月日欠

小松帯刀

徴士参与職・総裁局顧問被仰付候事、

慶應四辰年

二月　　総裁印

一四九　藩六組ヲ廃シ何番方限ト改称等ヲ達ス

藩六組ヲ廃シ何番方限ト改称、且諸願書・片書等ハ御小姓与ト記載スヘキ等ノコトヲ達ス二月晦日

明治元年戊辰二月

一此節六組被廃、何番方限ト名目被相替候付テハ、通達事・触方等付テ、小分之儀ハ是迄之通ニテ、諸願書・片書等ハ、御小姓与ト相記候様被仰付候事、

一大番頭・御小姓与番頭・当番頭合並被仰付、御役名是迄之通被召置候、

一六番被廃、一番・二番・三番・四番・五番・六番方限ト名目被相替、諸触等又ハ家付取次事等、都テ是迄之通ニテ、奏者方・当番頭方御用打込被仰付候、

一方限リ中文武引立方等之儀、右三御役之内ヨリ人柄ヲ以被仰付候、

二月　　〔島津久治〕圖書

〔桂久武〕右衛門
〔川上久馨〕龍衛
〔新納久修〕刑部
〔町田久憲〕内膳

右之通被　仰渡候条略ス、

辰二月晦日　　大番頭方組方

一五〇　家老座書役其外諸座書役ヲ旧名ノ如ク筆者ト改称スルコトヲ達ス

家老座書役其外諸座書役ハ、旧名ノ如ク筆者ト改称スヘキコトヲ達ス二月晦日

明治元年戊辰二月

一御家老座書役其外諸座書役ノ儀、如旧名以来筆者ト被相改候条、可致通達、

一糺明奉行　一十人賄料　一御役順御文書奉行次席

一糺明奉行添役　一六人賄料　一御役順御右筆次席

一糺明奉行見習　一四人賄料　一御役順表御小姓次席

右之通御役名被召替、添役・見習ノ儀ハ、帳面首尾合等モ致取扱候様被仰付候条、向々ヘ可致通達候、

辰二月卅日　　刑部

二月中　附録（凡ソ日附ノ不明ニシテ、其類ニ従ヘ附スルコト能ハサルモノハ、姑ク附録ノ部ヲ設ケ、此ニ収集ス）

但藩治ニ係ル諸件

一五一　島津久光藩政変革ノ要領三ケ条ヲ訓示ス

久光藩政変革ノ要領三ケ条ヲ訓示ス二月日欠

治乱一途ノ政体ニ変革ノ事

右ニ付急務ノ箇条

一刑法変革ノ事、

一諸役人・書役小役人等減少ノ事、

一不急ノ役場引取ノ事又ハ合並、

右ハ方今乱世ニ陥リ候上ハ、太平ノ気惧ヲ一洗シ、海陸ノ事ヲ興張有之度、此節機会ニ存候付、各申談涯々成功相立候様、可遂吟味事、

二月

是通中将様御筆ヲ以被仰出候条、此旨向々ヘ早々可致通達候、

二月　　圖書

右衛門
龍　衛
刑　部
内　膳

一五二　陸軍所勤ノ諸役人並書役小役人ノ弐拾五歳迄ノ勤続ヲ達ス

諸座書役助並小役人ノ陸軍所限月別勤ヲ命セラレタルモノモ、満弐拾五歳ニ至ル迄特別ヲ以テ勤続セシメラルヽコトヲ達ス二月日欠

明治元年二月

一諸御役人並書役小役人等、弐拾五歳以下ハ陸軍所別勤被仰付、御役料米之儀モ、是迄之通被下置候段ハ、先達申渡置通ニテ、右人数之内諸座書役助並小役人等之儀ハ、限月等ヲ以被仰付候者モ、弐拾五歳ノ年輩相備候上迄ハ、別段之訳ヲ以、勤続等申付候様可然取計候、乍併不出精ニテ限月等筈合ハ、前頭其向ヨリ御軍賦役へ引合、形行ヲ以何分可得差図候、此旨向々へ可致通達候、

二月　　伊勢

一五三　作事奉行以下奉行頭人ハ軍国ノ世態ヲ存シ書役方ノ事ヲ兼勤スル旨ヲ達ス

壮年ノ者海陸軍ニ従事シ、追々多勢出兵ノ時機ニ際シ、作事奉行以下奉行頭人等軍国ノ世態ヲ存シ、一往書役方ノ事ヲモ相兼、書附又ハ帳簿等弁達取扱ヒ、諸事着実ニ精勤スヘキ旨ヲ達ス二月日欠

当世態海陸軍ノ兵制練熟第一ノ事ニテ、壮年ノ者共ハ専ラ海陸軍方ヘ相勤、追々多勢出兵被仰付候付テハ、諸座書役等勤場差支ノ時宜必定ノ事ニ付、御作事奉行以下奉行頭人ノ儀、世態ヲ存シ一往書役方ノ御用ヲモ兼、精々致弁達、書附又ハ御帳留等モ可致取扱候、左候得ハ、其職掌致実着、諸事貫徹ノ場ニモ相成事ニ付、弥精勤可有之候、此旨向々へ可致通達候、

二月　　龍衛取次入来院恰

一五四　藩士継目養子・定式忌服・養子違変等ノ心得ヲ達ス

藩士継目養子・定式忌服・養子違変等ノ心得方ヲ達ス 二月日欠

明治元年二月

一是迄継目養子等願出候節ハ、定式之忌服相請候様申渡、忌明候節願之通被　仰付来候得共、以来ハ直ニ願通被仰付候条、其当日ヨリ定式之忌服相受候様、被　仰付候、

一養子違変之儀、容易ニハ不被　仰付候事候得共、是迄無拠子細有之、実病ニ無之者ヲ、病気ノ筋ヲ以養子違変願出候者モ有之哉ニ相聞得、　養子之儀親子之交ヲ結ヒ、夫々孝慈之道相立様、当然ノ事ニ候、乍去依訳ニ親子ノ交リ難蒙、右体無拠者ハ以来形行ヲ以、養子違変願出候様被　仰付候、

右之通向々へ不洩候様可申渡候、

二月　　右衛門

一五五　市來四郎藩政ニ関スル時事ヲ建言ス

市來正右衛門藩老ニ建言シ、藩政ニ関スル時事ヲ条陳ス 二月日欠

謹テ奉執事之閣下建言候、不肖蒙愚之微臣、御政体ニ関係之儀ハ、可奉憚身振御座候得共、当今之世態難黙止、浅陋之管見ヲ不顧建白仕候、踰等不慎之姿ニ御座候得共、寛大之御胸ヲ以被聞召被下度奉願候、

一今般於伏、坂東賊御討伐ノ次第、追々御布告之趣、且諸説伝聞仕候処、　皇威復古ノ御大機会、正邪分明、実ニ自然ノ勢神明ノ赫々タル処ニテ戴天蹈地ノ者イカテカ感激憤発致サルヘキ、誠以難有次第、随テ御国威御英名無比肩、千載ノ後ニ相輝キ被(候カ)儀ニテ、草野匹夫ノ身迄モ感戴仕候、就テハ肌(既カ)討征之勅命モ被為下候付テハ、不日ニ天兵発向ノ時機可有御座哉、弥以御国威興張、御軍備充実ハ無申迄御事ニテ、第一金穀・大小砲器・舟艦之御手当先立不申候テハ、不被為済ハ勿論御座候処、砲器ノ儀ハ追々御製造、又ハ御取入等相成候由ニハ御座候得共、御府内諸士中ニサヘ、旋条銃悉ク相備候儀ニ無御座、旧製之火縄銃・燧石銃・剣銃等ハ持合ノ人モ不少候得共、実用不相叶トテ安心不仕候付、此涯家々人々旋条銃相備候様、御処置被成下候ハ、一統難有可奉存候、就テ愚考仕候ニ、知行高五拾石所持ノ人々ヨリ、旋条銃一挺ツヽ、自力可

相備トノ御規則御座候得共、未不持ノ人勝御座候半、
依テ御物計ニテ御取寄申請被仰付、代銀ハ取納ノ時分
出来同様ノ向ヲ以返上〔ママ〕納被仰付候ハ、速ニ御規則ノ通
無脱漏相持可申候、尤五拾石以上又ハ寄合以上・一所
持衆等モ、同様被仰付度、将又五拾石以下四拾石内外
所持ノ人々ハ、此涯諸御取揚高ニテモ、五拾石ニ相充
候丈ケノ石数、月賦・年賦等ノ向ヲ以申請被仰付、御
規則通旋条銃ハ、相備候様被仰付度奉存候、

一三拾石以下壱・弐石以上所持ノ人々ハ、幾人ニテモ五
拾石ニ相充候人数ニテ、模合銃取入ノ御規則被召定度、
勘考仕候ニ、旋条銃一挺代銀凡正金拾六両程ニイタシ、
当地金相庭〔場〕壱両凡弐拾貫文ニテ、三百六拾貫文程ニ相
当リ、高壱石前ノ割合ニ等シ候得ハ、拾貫文内外ニ相
及候間、右ノ割ヲ以模合取入被仰付、上納方ハ年賦等
ニテ前条同断、取納ノ時分被仰付可然哉、旋条銃ハ御
物御格護相成居、出軍ノ者へ被相渡候様有之度、左候
得ハ持高多少無親疎御処置ニ可有御座候、殊ニ軍器充
実、軍役高ノ名実ニモ相叶可申候、昨年過上高売払被
仰渡、タトヘハ是迄弐百五拾石所持ノ人、五拾石丈ノ
過上ハ売払候付、夫ヲ三・四人ニテ買入候モ可有之、
然レハ本相〔ママ〕図リ居候時ハ、其五拾石ニモ旋条銃壱挺ハ
相掛リ候賦御座候処、割散拾石程ツヽニ相成、全ク軍
備相欠ケ候訳ニ御座候、軍役高ノ儀御座候間、多少無
親疎、或寺社領高ニモ、同様割合被相掛、当然ニ可有
御座、出来モ致来候事ニテ、重々ノ出物ノ様御座候得
共、毎々被仰付儀ニモ無御座、当今ノ世態必用ノ器械
御座候上、御上ニモ別テ御不繰合ノ砌御座候間、御気
ノ毒可被
思召儀ニモ有御座間敷奉存候、

本文付、高五拾石以上一人、家督一人ハ御扶持米不
被下、家督勤方無之モノハ、嫡子御扶持米不被下御
規則ノ処、間ニハ五拾石所持ノ人モ勤柄等ニ寄リ高
下リイタシ、御扶持頂戴仕候者モ有之、又ハ四拾七
八石以上五拾石内ニテ、御扶持頂キ居候モ有之、当
時貧富押並御国役相勤候事ニ付、右通不正迷利ノ儀
ハ断然御処置相付、本文ノ向ヲ以、四拾五六石程所
持ノ人々ヨリ五拾石ニ充候丈、諸御取揚高等申請被
仰付、御扶持不被下様相成度、左候テ少高・無高或
家内多人数ノモノヘハ、御扶持被相重被成下候ハ、
御仁恤ノ程如何計候欤、可難有哉ト奉存候、

一野戦砲ノ儀モ、昨年被相定候御規則モ御座候得共、右ハ高千石程ヨリ壱挺ハ相備、不相応ノ儀ニハ有御座間敷、五百石以上ハ弐人ニテ壱挺模合相調、御物御格護相成度御座候、

一諸郷モ旋条銃ハ御城下同様被仰付度御座候、

一兵士モ猶又相増候御制度被召建、就テハ肥後熊本一匹一領ノ制ノ如ク、百姓ノ外ハ寺門前・町・浜人ニテモ旋条銃・戎服一ト通リ、軍用金四五拾両程モ相備、願ノモノハ兵士ニ被召入、海陸軍所ノ支配被仰付候様御座候ハ、懇望ノモノモ可有御座哉ト奉存候、

一上・下・西田町ニ弐三小隊程モ町兵隊被召建度、右ハ市中其他府内ヘ居住ノ小番・新番・御小姓組等ノ家来・下人、或町・浜・寺門前ハ、等年令三拾五六才以下拾八九才以上健壮ノモノ被相撰、一刀ヲ帯セ、西洋歩卒ノ向ヲ以テ編合イタシ、給分ハ三町中出銀、或模合銀等ノ趣法、如何様ニカ相設サセ、調練又ハ事ニ臨ンテ給分ヲ与ヘ、平日ハ各産業ヲ以渡世為致、町奉行惣宰ニテ市中警衛被仰付度奉存候、

一今般被仰渡候御一門方並一所持、或持切在・抱地等所持ノ面々ハ、家内等領地ヘ住居勝手ニ被仰付候付、家来・下人等モ御府内、中宿ノ者ハ成丈ケ領地ヘ曳取相成度、其内商人等ニテ実ニ曳取難キモノハ、三町人或持切在・抱地等所持無之、寄合・寄合並或小番・新番・御小姓与等ノ家来・下人、主人替イタシ、其者共ハ是又、可成丈ケハ町兵隊ニ被召入、扶持方ハ前条同様被仰付可然哉ト奉存候、

一伏・坂戦争後、残兵関東ヘ引取候付テハ、箱根以東ノ地ハ此涯鎮静無覚束、殊ニ海陸共天嶮ノ要害、加之決死ノ兵ニ御座候得ハ、古豊臣家北條征討ノ事蹟ヲ以勘考仕候ニ、此節モ由々敷御大事ニ可有御座候間、自然時日ヲ過サヽル内ニ

天兵ヲ被向候欤、亦ハ渠降伏恭順ノ筋相立候ハ、御寛大ノ御処置ニモ可相成、兎角其根葉モ被為断候外、御良策ハ有御座間敷、御討征ニ付テハ、御国兵モ猶又可被差出哉、就テ糧米・軍用金等ハ敵地ニ可被因ハ勿論ニ御座候得共、御手当モナクテ被為済マシク候間、日州辺豪富ノ輩江、御貸上等被仰付候御計略モ被為施度、本城辺ニハ聞フル富家ノモノモ罷居候由ニ付、彼地案内ノ者ヲ為説得被差越、且鎮撫永世御附従申上候様、御処置有御座度奉存候、

一一所持ニテ、現ニ一所ノ地所持無之面々ノ家来・下人、或寄合以下小番・新番・御小姓組等ノ家来・下人、三五人程ツヽモ扶助ノ多分ニ依リ、歩兵編制ノ御趣法相建度、イツレモ西洋歩卒ノ如ク、一刀ヲ帯シ、軽弁ノ仕度ニテ教導有之候ハ、遊民体ノモノ相応ノ人数ニ可有御座候、左候テ往々京師御警衛、或御領内辺戍等ニ御調法可相成、且古王政ノ時ノ如ク、兵丁貢献ノ御時機ニモ可相成哉、其節ハ諸士ハ素ヨリノ事候得共、寄合以上ノ衆ハ、自兵引卒上京被致候御制度相建候ハ、平日家来・下人等扶助ノ詮モ相立可申候、尤領地ヘ家内住居勝手次第トノ御達ハ、実ニ時世相当、復古ノ御処置ニテ、其通相成候ハ、自然驕惰ノ宿弊モ一洗、万端倹素ニ相成、無此上事ニ御座候ノミナラス、不耕不織ノ遊民モ相減、臨時雑沓モ少ク、或金穀ノ費モ減少イタシ、旁以御良策ト奉存候、早ク家内ノ分ニテモ被曳取候様、猶又御沙汰被為在度奉存候、

一寄合以下小番・新番・御小姓組ニテモ、抱地・永作地高等ニ土着致度望之者ハ、勝手ニ被仰付、子弟等修行事付、御府内ヘ仮居又ハ親類ヘ偶(寓)居、或造士館・海陸軍所等ヘ入寮、是又勝手次第ニ被仰付度、左候テ土着ノ人ハ知行高其奇寄ニ無之候テハ、差当リヨリ活計調査、又ハ百姓共、遠方隔絶ノ所ヘ取納運送等難渋可致ニ付、土着場奇寄ノ御蔵入高ト繰替被仰付候ハ、自然トリ付モ宜敷、且ハ高地ニ土着イタシ、作式致候人モ可有御座哉、御上ニハ近在近郷等ニ御蔵入多キ方御弁利ニ可有御座候、尤古ヨリ和漢蛮共、兵ハ農兵ヲ宜シトスルノ論ハ不少、山陽(藩山陽)カ通議ニモ、兵不可廃於天下者也、而天下之費莫大於兵、故古寓兵於農、無事則耕有事則戦謀、其不費也云々、兵座食而驕不可用、兵愈多而農愈困、其費於是大矣、不可不察也云々、鎌倉以後以武人充諸国守護、毎畝課糧非復旧制、雖然其兵皆土着、亦未兵見其費也云々、織田・豊臣氏之時数更将師之封、常聚其兵於城府、其地不着者定而天下之費始不可支矣、古者養兵者常慮其費、而後世不知費之由、於養兵是古今之異勢而莫之或察者云々、古ハ無養兵之費、而兵又易於自養、後世養兵之費如此而其兵又人々自困、是兵与農両困而並受其弊也、嗚呼弊而至此終不可矯乎、曰、不可矯ハ矯之以、人情夫人々自困寧其情之所楽哉、病之而無奈何也、其将之率焉者云々、天下之可慮者莫大於無奈何無奈何之極、雖有善術不可施也、及其可施

施之日、術何謂術、曰其因情而済其困而已矣、後世之兵不地着也、而非無其地、兵皆有其地而不着也云々、足利・豊臣氏兵強ナリトイヘトモ、早ク土着ノ法ヲ施、則其強ヲ信スベシトモ論シ候、御国ハ元来無比肩強兵ニ御座候得共、過半ハ国兵ニテ、出軍跡等妻子ノ御養、旁一方ナラサル御事ニ御座候得ハ、望ノモノハ土着願出候様被仰渡、愛(ママ)リ付ノ道被召付被下候ハ、懇願ノ者モ可有御座哉ト奉存候、

一当今ノ世態、第一先キ立スシテ不叶ハ、金穀ノ二ツニ可有御座候、就テハ農工商ノ業如何ニモ御勉励専一ト奉存候、農ハ耕耨行届、或土地人員平均又ハ開拓等、工ハ紡績ヲ初トシテ、銅鉄ノ細工、右ハ重大弁利ノ機器既ニ御取建モ為有之由候付、此上ハ御勤励迄ノ事ニ可有御座、商ハ当今ニ相成リ、海内ノ貿易迄ヲ目的致居候テハ不相済、外国ノ交際ハ弥御手ヲ不被為付候テハ不相叶、海内互市ノ一端ヲ確守シ、御取縮迄ノ説ヲ主張致候テハ、御国潤相見得、御手ヲ被為延候期ハ有之間敷、就テ此内仏人モムフラント(Comte des Cantons de Montblanc)申モノヘ被命、商船御取建等ノ件々、御国体御相応ノ儀ハ速ニ被相開度、尤乱階一度相開候上ハ、容易ニ鎮定仕間敷哉、兎角御国威内外ニ相輝、益御武威相震ヒ不申候テハ、幾久敷御奉職ニ付テモ、御国力ノ強弱ニ関係可仕哉、其根本ハ金穀足リ、舟艦・砲器充実ニ可有御座、就テハ理財ノ道神大ニ御手ヲ被為付、御国体堅固ニ相据不申候テハ、御手モ延兼可申、尤古ノ闘戦ト替リアルハ器械ニ御座候間、日々千金ヲ費スト申候得共、今ニ至テハ万金ノ費ニ可有御座、殊ニ当分別テ御不繰合ノ折柄、此度浪華御屋敷焼亡、其他同所出金旁或砂糖御商法ニ、如何可有御座哉ト縮眉仕候事ニ御座候、然共差当リノ処ハ、楮幣御出来候道相開居候付、御国中ハ御差支モ有之間敷、併変化無限ノ世ニ御座候間、事ニ寄リ楮幣ハ勢ヲ失候モ難計、夫ノミナラス即今、他国御曳合モ一方ナラサル儀ニ可有御座候間、此涯八文銭・拾文銭等鉄製被仰付、楮幣曳替用ト申処ニテ、楮幣ノ勢ヲ助ケ、或他国引合ニ随分御調法可相成哉、製造ニ付テハ、西洋ヨリ鉄葉板尋常ノ品ヨリ今三重サ計リノ品御取寄相成、夫ヲ金銀ノ細工向ニテ製作致候ハ、容易キ事ニ可有御座哉、併御利潤ハ有之間敷候得共、人心ノ帰着ヲ蓄積等ノ為ニハ可相成、且追々ハ他国ヘモ相開、御弁利可有御座哉ト奉存候、

一諸器械西洋ヨリ御取寄品之内、製鉄器・紡織器等、世上ノ論評モ種々承事ニ御座候得共、愚考仕候ニ、弥以御手ヲ被為付、工商ノ業別テ御励シ相成、御国潤ノ道被召付儀専一ノ時ト奉存候、次ニハ先年閣下ヘ建言仕候紙漉蒸気機械御取寄相成、國府辺海陸イツ方ヨリモ弁利ノ処ニ、商船中ノ計ヲ以取建被仰付候ハ、外国御交際ニ付、産物ノ一端ニ相成、次ニハ菱刈(伊佐部)・真幸(えびの市)表其他イツ方ニテモ楮皮売出、其代銀ハ糞培等ノ用途ニモ相成、自然勧農ノ一助ニモ可相成哉ト奉存候、

一今般御貸上金被仰付候儀ニ付、愚考仕候ニ、イカニ富家ノ輩トハ申ナカラ、御国ノ富人ハ、他国ノ如クニ無之、分際有之事ニ候半、然テ此以前ヨリ度々御貸上等被仰付、御返下ノ道モ、決テ未難被為付候半、爰ニ相成、甚困究仕候ニモ可有御座候、タトヒ御貸上候テモ為差知員数ニ可有御座哉、又利欲ニ迷ヒ候モノハ、蓄積ヲ隠シ候モ難量、押々被仰付候テモ如何敷、且ハ積財無之姿ヲ示シ、世上取替ヒ等相止候テハ、弥以不通用成立、少々ノ取替モ相塞リ、貴賤共困ニ被成、果ハ御国中ノ疲弊弥増可申候付、楮幣御宛行相成、御貸上仕候モノヘ、相当ノ員数被渡置、御時節ヲ以、曳替可被仰付トノ御約束御座候ハ、御貸上モ相重、差当リ御用弁且ハ世上ノ通用モ不滞、旁御弁利ニ可有御座哉ト奉存候、

本文ニ付、当今世上不通用実以一統困究仕候、蓄積等有之モノハ押シ隠シ、取替ヒ等ノ相止メ候風ニ成立、加之貸屋借シ等モ過半ハ相止、末々ノ者共難渋ノ由御座候間、如何様ニカ御手ヲ被為付度儀ニ御座候、

一此節柄

朝廷万機ノ御政事、古今ノ良法御大成御議定被為在トノ御事、随テ御国政ノ儀モ御変革可被為在トノ趣被仰渡、難有次第、殊ニ伏・坂戦争ヨリシテ、人気一同一新決定ノ向ニ相見得申候間、極盛至治ノ世ニ被相定候御規則ハ、御取捨有之、就中驕惰ノ宿弊一洗イタシ、座臥ノ間モ、実場ニ臨居候程ノ心得ニ罷成候様御処置被為在度、尤冠婚葬祭、衣食住ニ至迄、倹素朴直ノ風一日モ早ク御制度厳重ニ相建度、且冗費・冗官・冗局ヲ被省、御用向取扱ノ細事ニ至迄、別テ易簡ニ相成度、是迄合並・廃官・廃局等被為在候得共、猶又廃合等可被仰付儀、多々可有御座哉、将又服制ノ儀ハ貴賤ノ差

別有之度事ニ御座候、尤服ハ身ノ章ニテ、尊卑ノ別ハナクテ不叶儀ニ御座候間、軍官・治事官ノ服式、貴賤上下ノ等級ヲ分チ、一同分弁仕候様御治定有御座度、右ハ上下ノ等ヲ分チ候ハ勿論、専一無用ノ経費ヲ省キ、倹素ヲ守ラシムルノ根元ニ可有御座候、

本文ノ儀ハ追々被仰渡相成、今更奉申上不及儀ニ御座候得共、此書面ハ去月初方相認置候付、削除不仕、其侭差上申候、

軍事職務ノ人ハ平日モ戎服被仰付、屹ト立、初テノ御目見等被仰付候節、

朝服致候様、尤朝服迚モ当時麻上下ノ制ハ被止、復古ノ制相建度奉存候、且初テノ

御目見モ、以来ハ前髪取ノ上、拾五六才罷成、軍事調練等被仰付候年令相成砌ニ、初テ

御目見被仰付、当日ヨリ海・陸両軍ヘ被召入候様有御座度、兎角兵士ハ、拾七八才以上不罷成テハ御用立兼可申、士分ノ当職相勤リ候年輩相成候節、

御目見被仰付御相当ノ儀ト奉存候、尤即今ノ世、初テノ

御目見等過分ノ入用相掛リ候付、如何様ニモ御変革有御座度奉存候、

一当今之世態ハ

本邦開闢以来、未曽有之混乱ニ可有御座候間、御軍事ハ勿論、律令・格式・宿局ノ設、理財ノ道、或家ノ人々貴賤・大小ニ随ヒ、些少ノ事ニ至迄、時勢ニ則リ一新改革ノ時ト奉存候、尤御政体ノ儀ハ、復古トハ申ナカラ、全ク旧故ニ被復候テハ、御不弁ノ儀モ可有御座候ニ付、和漢古今ノ良法、御大成御取捨可被為在筈ト奉存候、何事モ簡易ニシテ繁雑ナラサル儀、専要ニ可有御座、所謂法ハ三章ニ過スト申儀ニ被為則、事繁カラサルハ人情ノ欲スル処ニ御座候、因テ廃官・廃局・合並等ハ勿論、軽重共取扱振、書面ノ書キ様等ニ至迄、簡弁ニ有之候様、精々諸向ヘモ厚ク御諭相成、取調被仰付候ハ可然哉、尤古天正・慶長比ノ如クニハ出来兼可申候得共、可成丈ケハ繁雑ナラサル様有御座度、混乱ノ時ニハ事ヲ不動、因旧ヲ宜トスルノ論モ御座候得共、是又時勢ニヨリ可申哉、当今ノ如クニ未曽有ノ混雑ナル世ニ当テ、強ニ可泥事ニハ有御座間敷、六百年来鎌倉ノ宿弊ヨリシテ今日至迄、踰等驕奢ノ風勝御座候間、一日モ今形難相済、速ニ御一洗有之、弥以富国

強兵ノ道ヲ被為開度、就テ即今人情決定ノ時ニ御座候間、此機会ヲ不被失、何事モ速ニ御施行有御座度、人情苟安ニ流レ易ク御座候間、関東ノ鎮静ヲ聞候場ニ相成候ハ、随テ人心モ弛緩因循ニ移リ可申欤モ難計、就中今般被仰渡候一所持衆、其他領地ヘ家内引取候儀共ハ、猶又涯々被曳取候様御処置相成度、兎角安逸驕奢ハ、大身ト婦女子ニ出候ニ付、御上ヨリ御誘導ノ筋有之度、是家ノ致富之根本終ニ富国強兵ノ源ニ可相成、且又富国ノ根元ハ勧農ニ御座候間、郡方ノ御規則モ多クハ享保・天明ノ比被相定、或ハ田賦貢税ノ法等、豊臣家ヨリシテ徳川家ニ至リ、格別因跡モ不慎法ニ相聞ヘ、夫ヲモ御取雑旁ニテ、御治定ノ法ト相見得申候、是又速ニ御改正相成度奉存候、

本文モ今更申上ニ不及儀ニ御座候、前条同様其侭差上申候、

一農ハ国ノ本ニテ、古田畠ノ耕耨行届候様ニハ勿論、次ニハ新地開拓モ精々御勧ニ相成度、元来御国ハ米穀・大小豆・綿・絹等乏敷、夏分ニハ一統困苦ニ迫リ候事ハ申ニ不及、如此混雑ノ時ニ当テハ、一粒ナリトモ出来重ミ、輸入ヲ減シ、後ニハ輸出スル様御世話有御座度、被知召候通、真幸表・小林方限等ノ山野、無用ノ荒地ヲ細ニ開拓、或移人ノ道被召付候ハ、大凡五六万石程ハ国定相開可申哉、因テ望ノ人ハ誰ニヨラス御勧ノ法、猶又屹ト被召建度、勿論御物開モ可有御座候間、御用途ハ、楮幣御宛行御座候ハ可然儀ト奉存候、且又諸人ヘモ高曳当等ニテ、利付拝借等被仰付候ハ、開拓モ行届可申哉、尤其地ニ居住イタシ、家来・下人等撫育シ、自ラ労シ候ハ、不年ニ相応ノ出来重ミ相成可申候、今形無用ノ荒地ヲ土人共無訳相惜、他国人等ニ被奪候モ同様ニ相心得、種々故障ヲ拵申拒候習風、蔭ニテハ矢張以前ニ不相替、其弊ヲ押ヘ候ハ、郡奉行・地方検者ノ役職ニ御座候間、開拓望ノモノヘハ、都合致相勧候程ノ心得可罷在旨被仰渡、専一郡方ノ規則、時勢ニ準シ御一変有御座度奉存候、

去ル丑寅年此方、小林(宮崎県)・高原(同上西諸県郡)・高崎(同上北諸県郡)・野尻(同上西諸県郡)等三四ケ郷ニテ、衆中・百姓自力新拓ノ田畠凡五百石程モ可有之、且新古田畠ノ耕耨モ追々行届候付、作得モ年々相重、亥子年比ヨリハ凡七八百石程相重候半ト申事ノ由、僅三四ケ郷ニテ如斯御座候間、御領国中諸郷・私領総計仕候ハ、過分ノ出来重ミ可有御座候、則夫

丈ケ追々輸入モ相減可申、右ハ格別御励シニモ不相成、出来重候訳ニ付、此機会ニ開拓或古新田畠ノ耕耘、別テ御勧相成候ハ、不年ニ相応ノ御国理相見得可申哉ト奉存候、

一郡奉行ノ儀ハ、不違職掌ニ御座候間、御仮級今二三等モ御曳上ケ、役禄モ充分被下置度、見習役モ随テ御引上有之度、右ハ治事官ノ内肝要ノ職掌ニ御座候上、愚昧ノ輩ヲ指揮致ニハ、御役ノ軽重ニ相拘儀別テ有之候、且又可成ハ郷々大小ニ不依、一郷一人ツヽ混ト被遣置、耕耘ノ指揮ハ勿論、産物ノ仕建方等、或百姓撫育取締等、相励候様有之度、締方横目ノ儀モ、四五ケ郷兼帯ニテ、一両人モ被遣、万端地頭・郡奉行申談、宗門取締等迄モ兼務ニテ相済可申哉、其他諸御役場廻勤等、総テ御曳取、地頭・郡奉行ノ計被仰付、決テ不弁不行届ノ儀ハ有御座間敷、当分通諸郷ヘ役場多ク入込候儀ハ、勧農ノ妨ニ可有御座候、

本文締方横目等ノ儀モ、前条同様、今更不申上候テ宜敷候得共、其侭差上申候、

一諸所牧場モ総テ被廃度、就中吉野牧モ被廃、比志島同様究士被召移度、且又御厩役々・諸郷廻勤等是以御曳取ニテ、御用馬見分或ハ馬改等ノ儀ハ、地頭・郡奉行計ニ被仰付可相済哉、牧場被廃候テハ牧馬御払代、又ハ牧地山野開等ノ上納ヲ以、御厩御談相成由御座候得共、右ハ被廃候テモ、矢張上納ハ有之、支配相替迄ニテ、御物ノ御損益ニ相拘義ハ無之、追々田畠等相開候ニ付、御益相重候賦御座候ニ付、別段御続料御宛行相成可然義ト奉存候、

一七嶋並屋久島等ハ、誰人ニヨラス自力開拓致度者ハ、町・浜人ニテモ被相許、永作地等ニ被下置度、今形良地被捨置候ハ残多キ事ニ御座候、

一一所持ノ格式ニテ、現一所ノ地又ハ持切在等モ所持不被致、家来・下人等親敷撫育ノ道モ無之衆不少、右ハ享保以来昇平ノ世ニ、格式迄御所持ノ訳ニテ、名実不相当御座候、就中有功ノ家或旧家モ有之、其分ハ是非ニ現事持物在等、所持被致候様有御座度、就テハ兎角新地開発無之候テハ、可被宛行場所モ有之間敷候間、四五百石・千石位ノ地ハ自力開拓、家来・下人等曳移方被致度、左ナク候テハ、家柄御取持ノ詮無之、残多キ事ニ御座候、且古天正・慶長比ノ御制度ノ如ク、軍役人数ノ多少ハ門閥ニ不拘、タトヘハ、小番ニテモ飯

野(びの市)・大河平ノ如ク、家来等多ク扶助イタシ居候人ハ、才器ニハ可依候得共、成丈自引卒一方ノ鎮衛旁ノ場ニ、出軍被仰付候様御座候ハ、誰レモ栄耀ハ欲スル処ニ御座候間、競テ家来・家ノ子等扶助イタシ、新地開拓等出精可被致、尤寄合以下小番・新番・御小姓組等、右之通等級合並被仰付、人々器量ヲ以、御登庁相成候ハ、人材モ輩出、自然尊大至重ノ臭風一変イタシ、御国力強盛ノ基ニ可罷成哉ト奉存候、

一寄合ノ儀モ、享保ノ前後ヨリ等級被召建候由、或其時分ヨリ近比迄、御役等ニ付家格被仰付候新家モ余多有之由、右ハ先祖代御用立候モノ、或御続柄・家柄等ノ□(マヽ)ニテ、無御拠訳ニハ御座候得共、即今ニ相成莫大ニシテ、家柄ニ誇リ家宅屋敷構等ヲ広大ニイタシ居候テハ、実用不相叶、可用立家来等モ聢々扶助不被致候テハ、名実不相当御座候ノミナラス、大抵ノ人柄迄ハ家格ノ御取訳ヲ以テ高官高席ニ御登庸、更ニ人材御撰挙ノ道ニ無之、不才不識ノ人ニテモ、大禄ヲ座食シ候モ間々可有之哉、ケ様ノ時勢ニ相成、天下国事被為周旋愚力苦戦ノ勲労有之モノモ可有御座、然レハ是迄通禄ヲ世々ニシ、家格旁御曳上御座候テハ、緩々被成様ハ恐ナカラ有之間敷候間、如何様ニカ時世至当ノ御処置、断然有御座度奉存候、

一海・陸両軍ハ、弥以御全整専一ハ勿論ニ御座候、就テハ其御宛行別段御預定無御座候テハ、当分通重出米永世上納被仰付儀モ相叶間敷候付、右御宛行ハ、第一開拓地ノ出□(マヽ)ヲ御差分相成候ハ、相応御補可相成哉、尤則ヨリ開拓方別テ御勧ニ相成候ハ、十年程ノ後ハ過分ノ開ケ高ニ可有御座候、

一近在ノ内田畠地ヲ借地イタシ居住ノ人不少、高頭凡五千石余モ有之由、右ハ名実不相当ノ高ニ御座候間、都テ居住ノ者現屋敷ニ申請被仰付候欤、又ハ高ノ尽現住ノ人ヘ伊地(ママ)御蔵入共、御取揚高等ヲ以繰替申請被仰付、移転ノ節ハ高共譲渡候様有之度、右申請代ヲ以テ施条銃御取入ノ方ニ被向候テモ、相応ノ金高ニ可有御座候、且此節一所持其外、家内領地ヘ住居勝手次第被仰付候ニ付テハ、宅地共只今通広大入用ハ無之筈、勿論取縮方無之候テハ、費耗相減候期ハ有之間敷候間、切坪等ニテ涯々可被売払旨御沙汰有之度、将又現一所持衆或持切在等所持ノ衆、近在・近郷等ニ別荘地・抱地等数多所持ノ方モ不少、是以不相当御座候間、涯々被売払

候様御沙汰有之度、左候ハ自然地面モ相或〔応カ〕田畠ニ開候処モ不少、其他近在・近郷等他人多キ処ハ、屋敷ヲ田畠ニ可開場所モ余多可有之候付、山手或水利不宜所ヘ人家引直、開拓可致旨被仰渡候ハ、近在ノ分ニテモ相応ノ出来重相成可申、御蔵入ハ成丈ケ近在・近郷ニテ、津廻・津下等不締取方御弁利ニ可有御座候、

一諸郷・私領或近在等、村邑毎ニ衆中ハ衆中、百姓ハ百姓中ニテ、義倉・社倉其所々ノ弁利ニ随ヒ被設置候ハ、飢餓救急ノ為可相成哉ト奉存候、

一誰人ニヨラス棉・大小豆ノ作式別テ被相勧度、此三品乏敷御国柄ニ御座候間、諸郷ニテハ本手金等此涯被相渡、是以輸入ヲ減シ候様、精々御励シ有御座度奉存候、

一以来ハ治事・軍事ノ両官被召建、軍官ハ平日調練等ノミニ心力ヲ懸シ、事有ルニ当テハ直ニ出軍致候様、治事官ハ如何様ノ変動有之候テモ、動揺不致治事ヲ勤メ、尤軍官ハ、西洋ノ法ニ基キ座席・給禄等ニ至迄治事ノ上ニ出、治事官ハ卑惶ニシテ、軍官ヲ希望スル様御制度御一変有御座度奉存候、

本文ニ付、此節文武一途ノ御政体ニ可被変トノ趣、被仰渡候付、乍恐本文申上候テハ、如何敷様相聞得候ヘ共、被　仰出候通、軍事職ノ人ヲ被増、治事職務ノ人ヲ被減候儀、実ニ御相当ノ御事ト奉存候、因テ此条モ削除可仕筈御座候得共、前条同断其侭差上申候、右ニ付此度御処置候如ク、追々五拾才以下或四拾五六才以下ノ人ハ海・陸両軍ノ〔ニカ〕被召入哉、然処間ニハ諸局掛ノ御役・小役人・見聞役・筆者等四拾四五才以下ニテ候、依然ト治事職務ニ安シ、軍事ニハ不携モ間々有之由ニテ、論説モ不少由ニ相聞得候ニ付、軽キ御役人・小役人・筆者等ハ、其局ニヲヒテ少々御用立ノ者迄ハ、都テ海・陸両軍ニ被召入、押並筋骨ヲ労シ、御奉公致候様被　仰付度奉存候、四拾五六才迄ハ、大砲打方亦ハ散兵ノ仕建等ニ基キ、如何様ニカ折衷イタシ、簡易ノ法ヲ立、覘打等ノ仕方被相設候ハ、随分御用立可申哉、尤当今ノ世振ハ勿論、此節ノ大機会ニハ各筋骨ヲ労シ、国事ニ可報ハ勿論御座候間、断然ノ御処置被為在度時ト奉存候、此段モ存付候侭申上候、

一大島ヘ御取建相成候白糖器械ノ内、一ト通リハ天草又ハ長嶋等ヘ御取建相成、専ラ天草ノ砂糖ヲ製シ候ハ、彼是御弁利ニ可有之哉、御取建付テハ商社御取仕立、

其社中ノモノ共ヘ被仰付、本手金等御貸渡相成可然哉ト奉存候、

一重論ニ御座候得共、仏人白山ヘ周旋被命候商社御取建ノ儀、世上ノ論評承候ニ、御差支ノ訳有之、御取止ノ様紛紜ノ説御座候得共、倩此世勢ニ勘考仕候ニ、外国交際儀ハ兎角難被為止儀可有之、尤御兵威格別御興張不被為在候テハ、不相済ハ勿論、軍器モ古ト違ヒ費用幾千カ相重候半、実ニ無際限事ニ御座候、就テハ富国ノ道ハ素ヨリ、家々人々致富ノ筋モ相立不申候テハ、外国ヘ対シ難ク、殊ニ西洋各国ハ舟艦・砲器等発明増補無限ニ有之、渠其通ニテハ是モ同様ナラサレハ、国威熾盛スル事能ハサルモノニ可有御座、其費用予メ不被定置候テハ相済間敷、左候ヘハ当分ノ御蔵入又ハ御産物料共ニテハ、内外多端ノ御費用可曳足様ハ有之間敷、因テ早ク其目論見ヲ以、御予備有之度、専一ニ農ヲ励シ、荒地ヲ開発シ、或工商ノ業ヲ盛ニシ、或無用ノ費ヲ省キ、衣食住ヲ簡弁ニシ、或商社御取建等、旁非常ノ御決断無之候テハ被為済マシク、尤国ノ本ハ農耕ニ有之、外国交際ハ産物ヲ増スニ有之、是以初ル処ハ耕耨ニ出候ニ付、農政御一変ノ儀ハ無他事、速ニ御廟議有御座度奉存候、

一今般議定ノ御大任御奉命被為在候付テハ、万機ノ御政体ニ被為預、前代未聞之御事ニテ、誠ニ以難有次第ニ御座候、就テハ御国政ノ儀モ、他封ノ模範ト可相成ハ勿論ニ御座候得共、猶又公明正大、名義豪髪モ不違様有御座度御事ト、乍恐奉祈処ニ御座候、就テ当分御内密ニ新銭鋳造、或新金銀等ノ儀、如何様ニカ名分相建候様御処置有御座度、既往ノ儀ハ論スルニ益ナク御座候間、後来ノ御処置早ク有御座度、万々一他国等ヘ相響キ候カ、或青史ニ相残リ候テハ、恐ナカラ御聖名ニ疵釁ヲ生シ候半モ難計儀ト、窃ニ憂慮仕候、尤当今御軍事等ニ付、御用途一方ナラサル御時節、俄ニ御停止御座候テハ、御差支ハ必定御座候ニ付、新銭ノ儀ハ被止、以前ノ如ク、琉球通寶御製造有之御都合ヲ以テ、

朝廷ヘ御献納被為在候ハ、名分モ相建、且ハ京攝ノ間等ニモ自然通用相開ケ、御弁利ニ可有御座候、右ハ去ル子年其御手当モ有之候処、彼是御混雑ニテ夫形ニ相流、此節柄ニ相成、御相当ノ御時機合カト奉恐察候、金銀ノ儀ハ御封内通用ノ筋ヲ以、御願亦ハ御届等ノ御

取計被為在、公然ト御手ヲ被召付、他封外国等ヘモ取引イタシ、尤品位ヲ撰ビ、価モ時勢公当(至カ)ヲ以テ通用仕候ハ、第一物価平均ノ基ト奉存候、古ヨリ明世ニハ正品ヲ出シ、衰世ニハ必ス悪品ヲ出シ、則正保以来徳川家衰頽ノ兆ハ毎々吹替ノ度毎ニ麁品ヲ出シ、近代ニ至テハ猶更悪品ニ相成候、此節柄復古

王権一途ノ御政道ニテ、万民難有奉存候砌御座候間、京・攝ノ間ニヲヒテ製造局被相開、

朝廷御当職ヨリ御指揮有之、是迄ノ贋品同様ノ幣ハ、速ニ吹替被為命度御事ト奉存候、価ノ高低ハ時勢ノ然ラシムル処ニ御座候間、当時公平ニ被相定可然儀ト奉存候、此段就中踰越ノ至御座候得共、存付候マ、建言仕候、

右ハ甚麁陋愚考ニ御座候得共、当時世難黙止、存慮ノ侭、更ニ文師等不拘、口上ノ覚ニ筆記仕言上仕候、幾重ニモ恐縮ノ至奉存候得共、御海容ノ処奉希上候、

敬白頓首、

明治元年戊辰二月　　市來正右衛門(四郎)

此建言ハ御家老桂右衛門ヘ差出候事、

〔表紙〕

忠義公史料　明治元年三月一

〔扉に、表紙の文字の外に市来四郎編の記載あり〕

目録

一暗殺ノ禁ヲ申令セラル三月朔日
　記　刑法局達
　　藩記
一忠義、御短刀・御文台及ヒ御料硯恩賜ノ御礼ヲ上申ス三月朔日
　記　上申書
　藩記
一奥羽鎮撫使附属ノ隊員ヘ錦ノ袖印ヲ下付セラル三月二日
　記　請書
　　藩記
一御親征行幸期日御延引ヲ令セラル三月二日
　記　御沙汰書
　参照　大久保利通日記
　　同　人　日　記
一英国公使明三日朝参ニ付、御門警固ヲ令セラル三月二日
　記　御沙汰書
　　留守居届書
　参照　大久保利通日記
一英国公使参朝ニ仍リ、明三日衣冠着用参内ヲ令セラル三月二日
　記　達書
　　藩記
一外国人参内ニ仍リ、百官ノ上巳参賀ヲ停メラル三月二日
　記　達書
一佛国公使下坂ノ節途中警衛護送ヲ令セラル三月二日
　記　達書
　　留守居届書

一英国公使参朝忠義参内陪列セラル三月三日

記　天皇勅語並ニ英公使奉答次第書

兵庫開港居留地談判応接書

参照　春嶽私記節録

嵯峨實愛手記節録

前田慶寧家記節録

大久保利通日記

土方久元日記節録

一佛国公使参内ニ仍リ警衛ヲ令セラル三月三日

記　御沙汰書

一佛国公使明四日下坂ノコトヲ上申セリ三月三日

記　留守居上申書

加州外五藩ヘ達書

京極佐渡守外九名ヘ達書

一朝廷慰労トシテ金五百両ヲ賜ハル

記　藩記

藩吏通牒

一来九日、太政官ヘ行幸在ラセラルヽコトヲ達セラル三月四日

記　達書

留守居届書

一行幸供奉官人随員手当金ノ制限ヲ達セラル三月四日

記　会計局達

供連定書（弁事達）

一寺島陶蔵当分制度事務局判事ヲ命セラル三月四日

記　辞令

一銅銭ノ価位ヲ定ム三月二十四日

一藩一門・私領持以下ニ、家風節約奉公ニ勤ムベキコトヲ達ス三月五日

記　藩庁達書

一諸口上覚

一九州鎮撫総督澤宣嘉ニ命シテ、西海道ヲ統轄セシム三月六日

記　内国事務局達

一九州元代官地ヲ調査シ、鎮撫使ニ稟申スベシト令セラル三月六日

記　内国事務局達書

藩吏通牒

一忠義下賜金返上ヲ請フモ、優旨聴ルサレサルコトヲ令セラル三月六日

記　申請書

指令

藩吏通牒二件

一諸藩ニ令シテ士庶ノ逋逃ヲ禁シ、言路ヲ開キ民情ヲ通セシメラル三月七日

記　御沙汰書

一藩老天草島管轄ヲ肥後藩ヘ引渡スベキコトヲ通牒セリ三月七日

記　通牒文

一太政官代行幸警固ノ心得ヲ達セラル三月八日

記　達書

藩記

一忠義行幸ニ付太政官代ヘ参向ヲ命セラル三月八日

記　藩記

一島津廣兼太政官代弁事局等ヨリノ達書ヲ報告ス

記　藩吏通牒（先月晦日以来太政官代弁事局等ヨリ仰セ渡サレタル書付三十八通概括シテ藩庁ヘ移牒シタルモノナリ）三月八日

一太政官代ニ臨御アリ、蝦夷開拓建議ノ可否ヲ諮詢セラル、又宴ヲ百官ニ賜ヒ勤労ヲ賞ス三月九日

記　太政官日誌

勅語

高野保建・清水谷公考建議

藩吏通牒

参照　大久保利通日記

一鷲尾隆聚邸ノ守衛ヲ辞セリ三月九日

記　上申書

藩吏届書

一浪士ノ私ニ貴紳ニ託シテ、其所属兵ト称スルヲ禁ゼラル三月十日

記　御沙汰書

一神武天皇祭使（愛宕通祐）ヲ畝傍陵ニ遣シテ、幣帛ヲ奉セラル三月十一日

記　宣命辞別

神饌並ニ御祭典次第

一在京諸侯ノ官位叙任ノ年月日ヲ録上セシム三月十一日

記　弁事役所達

叙任録上

一忠義先帝御陵参拝ヲ請ヒ之ヲ聴サル三月十二日

記　願書並ニ御附札

藩吏通牒

一藩士中原猶介海軍参謀ヲ命セラル

記　辞令
藩記
一祠官ノ公卿ニ因リテ執奏シ及ヒ其配下タルヲ停メ、之ヲ神祇官ニ属ス三月十三日
記　御沙汰書二通
一別当社僧ノ類悉ク蓄髪セシム三月十三日
記　御沙汰書
一藩蒸気船兵庫港揚碇関東ヘ廻航ヲ令セラル三月十三日
記　御沙汰書
藩記
藩吏通牒
一本藩大坂市中巡邏ヲ命セラル三月十三日
記　達書
藩記

一五六　暗殺ノ禁ヲ申ネテ令ス

暗殺ノ禁ヲ申令セラル三月朔日
一五六ノ一
近来於所々暗殺ノ者有之候、付テハ一同布告ニモ及置候得共、今以相止不申、重畳難相済次第ニ付、弥以厳重取締方被仰付筈ニ候、於諸藩右様心得違ノ者ハ有之間敷候得共、即今何方モ大勢詰込居候儀ニ付、精々糺方行届候様被仰付候事、

三月朔日

但本文取締方ノ儀ハ、裁判所ヘモ被仰付置候ニ付、承合取計可被申候事、

刑法局

一五六ノ二
(記)藩記ヲ載ス、
右辰三月朔日、太政官代ヘ御重臣御留守居ノ内罷出候様、刑法局ヨリ御廻状相達、隈元敬一郎(為栄)被差出候処、右御書付五條少納言(立夫)様ヨリ御渡被成、触下ヘモ致廻達候様、新納嘉藤(広兼)ニヨリ伊勢様宛ニテ首尾書有之略ス、

一五七　島津忠義恩賜ノ御礼ヲ上申ス

明治元年三月一日、忠義御短刀・御文台・御料硯下賜ノ御礼ヲ上申ス、
一五七ノ一
先月二十八日、依　召参　内仕候処、於

御前御短刀一腰・御文台一ツ・御料硯一ツ拝領被　仰付、難有仕合奉存候、御礼以名代申上候、

三月一日　　薩州少将家老　島津伊勢

一五七ノ二(記)

右ハ去ル二十八日、於御前御短刀其外御頂戴之御廉ニ付、御礼御廻勤之御儀、御用掛非蔵人羽倉肥前ヲ以参与様方迄相伺候処、外夷参　朝ニ付、仏人御引受、且御出輦モ御差掛之御事ニ付、以後之御例ニハ不相成候得共、此節限御重役　御名代ニテ御廻礼有之候様、右肥前ヲ以被仰聞候付、拙者　御名代相勤候事、

一五八　奥羽鎮撫使附属ノ隊員ヘ錦ノ袖印ヲ下付セラル

明治元年三月二日、奥羽鎮撫使附属ノ隊員ヘ錦ノ袖印ヲ下付セラル、

一五八ノ一
錦袖印百十

右ハ奥羽鎮撫使ヘ附属之人数ヘ被下渡、拝請仕候、此段申上候、以上、

三月二日　　(島津忠義)薩摩少将

一五八ノ二
一藩記ヲ載ス、
錦袖印百十
但右之袖ヘ相付候様、
右軍防局ヨリ御下渡相成候事、

三月朔日

一五九　親征行幸ノ延引ヲ令セラル

明治元年三月二日、来五日御親征行幸御延引ヲ令セラル、

来五日
御親征
行幸
御出輦御延引、日限追テ被　仰出候事、

三月二日

【参照一】

大久保利通日記

明治元年三月

十一日

一休日ニテ小大夫〔小松帯刀〕・吉井〔友実〕へ鳥渡差越候、八ツ后條公へ参殿、木戸〔孝允〕入来、日暮帰、

行幸御日限之儀、甚六ケ敷御模様ニテ、條公御参　内相成候、

【参照二】

同人日記

明治元年三月

十二日

一太政官へ出席、

行幸御日限之儀、別テ六ケ敷儀有之、岩倉殿へ今晩木戸同道参殿候様トノ事ニテ罷出候、種々御噺有之候、

一六〇　英国公使参朝ニ付御門警固ヲ令セラル

明治元年三月二日、英国公使明三日参朝ニ付、御門警固ヲ令セラル、

一六〇ノ一

薩州

明三日午刻、英国公使参内ニ付、日御門内外警固可致旨御沙汰候事、

三月二日

一六〇ノ二（記）

同日、藝藩ハ月華門外、長藩ハ日華門外ノ警固ヲ命セラレタリ、

三月二日

御書附一通

但

明三日英国公使参　内ニ付、警固之儀、

非蔵人

松室〔重進〕豊後

右ハ、今日太政官代軍局ヨリ御用有之、罷出候処、右豊後ヲ以被相渡候付、可申上旨申述置申候、

右之通私共差支、御留守居附役勤永山〔盛輝〕左内相勤申候間、御書附相添此段申上候、以上、

辰三月二日

新納〔立夫〕嘉藤二

伊勢〔島津広兼〕様

追テ御請書差出候様被相達候付、差出置申候、此段

モ申上候、以上、

(按) 同日、一般ノ取締方ヲ達セラレタリ、

明三日、英国公使参

朝被　仰付候条、此内以来度々被　仰出之旨、更ニ左之件々等篤度相心得、弥以不取締無之様可致、厳重御沙汰候事、

一公使旅宿知恩院新門前通リ、縄手通リ、三條通リ、境町通行之事、

一往来筋、巳之刻ヨリ旅宿ヘ引取迄、諸人通行留之事、

但左右横道木戸〆切之事、

一往来筋住居・町家其外共、家子召仕之外、他人一切滞留被差留候事、

但諸藩士等、兼テ止宿之者ハ格別ニ候得共、万一其者共致暴行候節ハ、其主人之落度ニモ被　仰付候条、於引請精々可致吟味候事、

一同断住居之者、公用ハ勿論私用タリトモ、難差延用向出来、他ヘ往来之節ハ、町役方其他向々ヘ申出、免許ヲ請ケ可致通行事、

但脇方ヨリ、前文居住之者ヘ同断之節ハ、木戸々々守衛之藩々ヘ相達、免許ヲ請ケ同断、尤総テ用弁之事ニ付、多人数通行ハ不相成候事、

右之通宜可相心得候事、

三月

又紀州ニ境町御門内ヨリ日華門迄、宮津(宗秀)本荘伯耆守・豊岡(高厚)京極飛騨守・足守(利恭)木下備中守・(新谷カ)(泰令)加藤出雲守・(徳定)(政礼)池田備中守・若櫻池田相模守ノ五藩ニ境町南詰ヨリ日華門迄、生坂ノ二藩ニ、知恩院新門前通、縄手通角迄ノ警守ヲ命セラレタリ、

【参照】

大久保利通日記三月

二日

一今日同断、明日英人就参　内手当向有之、今日木戸・廣澤同道藝州御邸ヘ参上、今日君公・長州公・細川公(護久・護美)御兄弟御出被成候、

一六一　英国公使参朝ニヨリ衣冠着用ヲ令セラル

明治元年三月二日、明三日英国公使参朝ニ仍リ、衣冠着用参内ヲ令セラル、

一六一ノ一　衣冠・巻纓・差貫・帯剣

右着用之事、

明三日巳刻御参之事、

一六一ノ二
(記)
右三月二日、禁中御仮建ヨリ只今御用有之、永山左内罷出候処、勘解由小路弁様ヨリ非蔵人鴨脚和泉ヲ以、右御書附被相渡、左候テ明日御参　内ニ付テハ、先日佛蘭西公使参内之節之通ニ候旨、被成御達候付、此段モ申上候趣、新納嘉藤二ヨリ伊勢殿へ、首尾書相添届出候事、

一六二　英国公使参朝ニヨリ百官ノ上巳参賀ヲ停ム

明治元年三月二日、公使参朝ニ仍リ、百官ノ参賀ヲ停メラル、

明三日外国人参
内ニ付、不及参　賀候事、
三月

(記)
本日上巳ノ参賀ニ当ルモ、外国公使朝見アルニ仍リ、之ヲ停メラレタリ、

一六三　佛国公使滞留往来ノ警衛ヲ令セラル

明治元年三月二日、佛国公使滞留往来ノ警衛ヲ令セラル、
一六三ノ一
薩州
右、佛国公使警衛向引請被
仰付置候ニ付、下坂之節、中途警衛向ハ勿論、手当相掛候儀、一切取計無不都合様、大坂迄可致護送被
仰付候事、
但
下坂日限追テ可達候事、
三月

一六三ノ二
留守居ノ届書ヲ載ス、
御書付一通
但
佛国公使下坂之節警衛向等之儀ニ付、
弁事
御役所

右以書中御達被成候付、御書付相添此段申上候、以上、

辰三月二日　　新納嘉藤二

伊勢様

一六四　英国公使参朝ノ節忠義参内陪列ス

明治元年三月三日、英国公使参朝、忠義参内　陪列セラル、

一六四ノ一(記)

本日、英国公使スル・ハルリー・エス・パークス(Sir Harry S. Parkes)及ビ書記官ミツトフ(Mitford)ヲルド朝参ス、

勅諭奉対略佛蘭西国公使参内ノ儀ノ如シ、又前日途上ノ変ヲ宣慰セラル、

皇帝陛下自ラ勅スル前ノ如シ、

英公使曰、我本国帝王陛下安全也、

天皇陛下御尋問ノ件々、且御懇親ノ

勅意、余欣然トシテ本国政府ニ可奉通達也、夫外国交際ノ儀ハ、

貴国御政体ノ立ニ随テ、益堅固ナルベキ事ニシテ、此節

貴国ニ於テ全国一般ノ御政体ヲ被為立、万国ノ公法ヲ基根ト被為遊シ故、追々外国交際盛ナルベキ義、必然ト奉存也、

皇帝陛下又勅曰、去ル三十日貴公使参朝途中不慮ノ儀出来、礼式延引遺憾ノ至ニ候、今日改テ参朝満足ニ存候、英公使曰、先日参

内ノ途中暴発ニ出会セシ所、今日

天皇陛下ヨリ難有御綸言ヲ蒙リ、且其場ニ於テハ

天皇陛下臣人ノ助力ヲ受ケ難有奉感佩、尚今日ノ厚キ御待遇ヲ以テ、過日ノ不幸ハ奉忘除候也、

右ノ通ニテ相済退出セリ、

一六四ノ二

同日午半刻(九ツ半時乃チ午后一字)、佛蘭西・和蘭両国公使モ参内アリ、英国公使モ列席シ、兵庫開港後居留地及ヒ兇徒処分ノコトヲ談判セリ、

三條(実美)公・岩倉(具視)公・中山(忠能)公・徳大寺(実則)公・越前(松平慶永)公・東久世(通禧)公・宇和島(伊達宗城)公及小松(清廉)・木戸(孝允)・後藤(象二郎)・五代(友厚)・伊藤(博文)等列席応接如左、

各公使曰、兵庫開港後居留地未ダ成就セサルニヨリ、以後条約済外国人民ヲシテ、兵庫・神戸ノ間何ノ地

ヲ不論シテ、雑居セシムルコトヲ許ス、如何ト問フ、列座中ヨリ答テ曰ク、兵庫・神戸中雑居ノ義ハ難差許、然レ共生田川ト宇治野川トヲ堺トシテ、其間ニ居留スルコトヲ許スベシ、各国公使此ノ事ヲ許諾ス、

【参照一】

春嶽私記節録

英国公使入　朝ノ儀畢リ、佛・蘭ノ公使モ（原記字欠）会シテ、開港等ノ諸件（原記字欠）有之、暮時前相済散　朝、

【参照二】

嵯峨實愛手記節録

総裁・内国・外国掛等、各国公使ト有談判、刑法ノ事ヲ談スル由ナリ、外国事務局筆記ニ、於虎之間各国公使等有談判ト、案スルニ手記所謂刑法ハ、蓋晦日犯人ノ処分ヲ謂フナリ、

【参照三】

前田慶寧家記節録

三日、和蘭公使入朝ス、本藩ノ兵士道途ヲ警衛ス、

【参照四】

大久保利通日記三月

三日

一太政官ヘ出席、十一字頃ヨリ参内、英公使参朝　天顔拝被　仰付候、佛公使・蘭公使モ参　内、是ハ御談判有之候故也今晩相国寺ヘ参ル、

【参照五】

土方久元日記節録三月三日

朝拝如例、五時半頃参殿、九時前引取候事、今日英人致参内、三條様今日ハ推テ御参内被遊候、

一六五　佛国公使参内ニヨリ警衛ヲ令セラル

明治元年三月三日、佛国公使参内ニ仍リ、警衛ヲ令セラル、

今日仏人参

内被　仰出、就テハ途中警衛之儀、厳重可有之旨、御沙汰候事、

三月　　弁事

薩州

重臣中

（記）

英・蘭両国公使ト兵庫居留地談判ノ為メナリ、

一六六　佛国公使下坂ノコトヲ上申ス

明治元年三月三日、佛国公使明四日、下坂ノコトヲ上申セリ、

一六六ノ一　被為召候佛国公使、明四日卯上刻相國寺(京都市上京区)出立、今出川寺町通五條橋ヨリ伏見街道通行、伏見着、直様当朝川下仕度申出候間、此段御届申上候、以上、

三月三日　　薩摩少将内　内田仲之助

(記)

佛国公使滞京、下坂ノ警衛ヲ命セラレタルニ由レリ、

一六六ノ二　同日尚加州始メ五藩ヘモ、警備ヲ命セラレタリ、左ニ其令書ヲ載ス、

各通

(前田斉泰)金澤中納言
(徳川茂承)紀伊中納言
(黒田斉溥)筑前宰相
(浅野長勲)安藝新少将
(伊達宗城)宇和島少将

明四日、卯上刻佛公使下坂ニ付、相國寺門前ヘ刻限無遅引可差出事、

騎馬警衛　五匹

三月三日　　弁事

安藝藩ハ三匹、宇和島藩ハ二匹、薩摩藩ハ五匹、肥後・長門・阿波・久留米四藩ハ各三匹、柳河藩ハ二匹ヲ出セリ、

一六六ノ三　又同日、豊岡藩始メ十藩ニモ、警備ノ兵ヲ出サシム、其令文ヲ載ス、

各通

(朗徹、丸亀藩主)京極佐渡守
(隆備、綾部藩主)九鬼大隅守
(長克、新見藩主)關伊勢守
(直裕、紀伊田辺藩主)安藤飛驒守
(久利、出石藩主)仙石讃岐守
(利恭、足守藩主)木下備中守
(俊滋、三日月藩主)森對馬守
(忠幹、新宮藩主)水野大炊頭

〔安斐、龍野藩主〕
脇坂淡路守
〔長敦、岡田藩主〕
伊東播磨守

明四日、卯上刻佛公使下坂ニ付、相國寺門前ヨリ寺町五條橋伏見街道筋、警衛人数可差出候事、

但場所人数等ハ、別紙之輩ト申合可差出事、

三月三日　　弁事

一六七　朝廷ヨリ慰労トシテ下賜金ヲ賜ハル

明治元年三月三日、朝廷慰労トシテ、金五百両ヲ賜ハル、

（記）

忠義議定ノ職ニ居ル、月俸代慰労トシテ、下賜セラレタリ、

一六七ノ一
藩記ヲ載ス、

一御金五百両

但　太守様へ

右御用掛木村東市正ヨリ、イマダ月給等御取究モ無之、正月以来御骨折之廉ヲ以、不取敢申聞相渡候事、

三月三日

一六七ノ二

御用掛

木村東市正

右ハ今日太政官代会計裁判所江御用有之、罷出候処、右東市正ヨリイマダ月給等御取究モ無之、正月以来御骨折之廉ヲ以、不取敢被下候趣、申聞被相渡ニ付、可申上旨申述置候、

右之通私共差支、御留守居附役勤永山左内相勤申候付、御金相添此段申上候、以上、

辰三月三日　　新納嘉藤二

伊勢様

一六八　二條城太政官代ヘノ行幸ヲ達ス

明治元年三月四日、来九日太政官代ヘ行幸在セラルコトヲ令セラル、

一六八ノ一
来ル九日辰刻、二條城太政官代江行幸被仰出候間、為心得相達候事、

三月

追テ、別紙之藩々江、早々廻達廻リ留ヨリ返上可有之候事、

〔忠義、薩州藩主〕島津修理大夫
〔久利、出石藩主〕仙石讃岐守
〔直諒、高槻藩主〕永井日向守
〔詮、平戸藩主〕松浦肥前守
〔高典、多度津藩主〕京極下総守
〔氏恭、狭山藩主〕北條相摸守
〔明実、水口藩主〕加藤能登守
〔英尚、園部藩主〕小出伊勢守
〔信親、栢原藩主〕織田出雲守
〔親義、飯田藩主〕堀左衛門尉
〔長和、西大路藩主〕市橋下総守
〔徳澄、因州新田藩主〕池田摂津守

一六八ノ二
御書附一通

但

来ル九日辰刻、二條城太政官代江
行幸被
仰出候儀、

右ハ今四日、弁事伝達所江罷出候様切紙到来、御留守居付役遠武橘二罷出候処、御用掛松室甲斐ヲ以、御別紙被相渡、別紙藩々江早々致廻達候様、都テ此跡行幸之通、辻々御警衛被仰付候、尤数刻往来差止候テハ、町人共及難儀候付、御通行少シ前ヨリ往来可差止旨モ相達候間、致承知候旨申述置、罷帰候段申出候間、御書附之儀ハ別紙藩々ヘ廻達仕、写相添此段申上候、以上、

辰三月四日　　新納嘉藤二

伊勢様

一六九　行幸供奉官人随員手当金ノ制限ヲ達ス

明治元年三月四日、行幸供奉官人随員手当金ノ制限ヲ達セラル、

一六九ノ一
行幸ニ付、供奉並前後出立之面々供連御手当金等之儀、別紙之通候事、

会計局

一六九ノ二
供連定

宮大臣　　士分　八人
　　刀指　三人
　　下部　十五人

公卿　士分　六人
刀指　二人
下部　十二人

殿上人　士分　四人
刀指　一人
下部　十人

御役付諸侯　同上

非蔵人　刀指　二人
下部　三人

徴士　同上

上　刀指　二人
下部　二人

官人　中　刀指　一人
下部　二人

下　刀指　一人
下部　一人

但諸局ノ筆生下ノ部ニ属ス、

使番　刀指　一人
下部　一人

但総裁局附官掌此部ニ属ス、

御手当金定

宮大臣　二百両
百両　支度料
月給

士分　十両
三両　同

刀指　七両
二両　同

下部　五両
一両二分　同

公卿　百五十両
八十両　同

士分

刀指　同上

下部

殿上人　百両
五十両

士分　同

刀指　同上

下部

御役付諸侯　同　同

士分

刀指　同上

下部

非蔵人　三十五両
五両二分　同

刀指　七両
二両　同

下部　四両
一両　同

徴士　同　同

刀指　同上

下部

上三十両

官人　中二十五両　二十両　支度料
下十五両
〃
五両　四両二分　四両　三両一分　月給
〃
但諸局ノ筆生二十両ノ部ニ属ス、
刀指　下部　同上
使番　拾七両　三両二分
但総裁局附官掌此部ニ属ス、
刀指　下部　同上
〃
右之通被　仰出候事、

弁事

寺島陶蔵(宗則)
当分制度事務局判事被　仰付候事、
但外国事務局判事如元候事、

職務進退録

一七〇　寺島宗則当分制度事務局判事ヲ命セラル

明治元年三月四日、

一七一　銅銭ノ価位ヲ定ム

明治元年三月日欠(二十四日)
銅銭ノ価位ヲ定ム、
銅銭ノ儀、当時各国相場御斟酌ノ上、自今一文ヲ以テ
鐚銭六文ニ通用被
仰出候事、
右ハ、是迄其位ヒ当ヲ得サルヲ以テ、動モスレハ奸
商共異邦ヘ輸出イタシ候儀モ有之、依之速ニ海内ニ
布告被
仰付候事、

太政官

三月

一七二　御一門・私領持以下ニ家風節約奉公ニ勤
ムヘキコトヲ達ス

明治元年三月五日、藩一門私領持以下ニ、家風節約奉公ニ勤ムベキコトヲ達セリ、

御一門方初至重尊大之風致一新候様トノ趣ハ、先般申渡置通ニテ、ヲノツカラ其心得有之筈ニテ、何分治世久敷打続、積年之習風一時ニ難致変改情合可有之候得共、当世態押移候上ハ、御政体ヲ被立替、海陸軍ヲ以御国家ヲ維持シ、時変ニ応スル外無之、難被差置時世ニ立至候、是迄供連等、家々又ハ御役格式モ有之儀ニ候得共、右等ハ御構無之候ニ付、向後御一門方私領持以下家風向極々取細メ、召仕候男女迄モ極々致減少、朝夕之入費相省キ、変事之御奉公充分相調候様、屹ト可被心掛候、此旨向々へ不洩様可致通達候、

三月五日

〔島津久治〕圖書
〔桂久武〕右衛門
〔川上久齢〕龍衛
〔新納久脩〕刑部
〔町田久憲〕内膳

一七三 諸口上覚

一七三ノ一 口上覚

私事去十二月廿五日、外方御用有之、早天より罷出申候処、途中ニて御屋敷騒動之段承申候付、差急キ罷帰り候処、詰人数丹羽左京大夫〔長国、二本松藩主〕様へ御預り之段及承申候間、彼御方へ差越、辰正月九日迄罷居申候、同十日評定所へ御呼出、御屋敷へ罷居候浪人共、過分成金子野村彦五郎罷居候長屋ニて、浪人并益満休之助取扱いたし候段相聞得、何方より持出候欤、其訳存候ハヽ、可申出旨御糺方御座候得共、何様之訳合一切存不申ト御答申上候、外ニ御糺方無御座、夫より内藤長壽麿〔政養、湯長谷藩主〕様へ御預り相成、同十七日評定所御呼出有之、不正之廉も無之、帰国可申付段被相達候、同日佃島へ差越、寄セ場より蒸気船へ乗船仕、同廿五日鳥羽湊へ着仕候、同日山田上部大夫方へ廿八日迄滞在仕、同廿九日出立仕候間、此段申上候、以上、

御兵具方
肝煎勤
帖佐藤太左衛門

辰三月

御兵具方
足軽

池田喜平二

一七三ノ一
私事旧臘廿五日、外方へ用向有之、差越罷帰掛り申候処、兵器携持御屋敷取囲難罷帰候付、京師方へ参考ニて、御府内諸所相忍居候得共、迚も難忍応候処より、稲郡稲毛領宮内村百姓兼て知人ニ付、彼之方へ相忍居候処、小栗上野介殿(忠順)手勢より被列越、方々揚屋へ被召込置罷在候処、評定所より御呼出相成、御屋敷へ被召置浪士共、野州辺并江戸市中抔乱妨致強盗候儀、存居候哉ト被及尋問候付、右等之趣、全存居不申段申述置候、然処先月十八日外人数一緒ニ幕船より帰国被仰付候段致承知、今日伏見へ着仕、此段御届申上候、以上、

三月五日　　御進物蔵役人　別府五左衛門

一七三ノ三
口上覚

私事江戸手形所書役助相勤居申候処、御減少ニて、去卯十二月廿八日、蒸気船より御国許へ罷下り候様、被仰付罷在候、然処十二月廿五日朝外出、五ツ時分罷帰掛り申候処、芝上御屋敷四方より厳重取囲候て、難立越候処より、田町三丁目御出入之丸屋長吉と申者所へ罷越、聞合方相頼、同人罷越居候内ニ、発砲之声仕、何事欤と致当惑、近所之者共へ尋方仕候処、御屋敷内へ罷居候浪士捕押之由、承り申候付、右所を立退、高輪小林屋ト申所江罷越、厄介相成居申候得共、何分高輪辺触達厳重、正月二日無是非北町奉行所江罷越、自訴申出、同役共同様取計方願出申候処、年齢勤方等被尋候迄ニテ、御構無御座、櫻田御屋敷江罷帰り候様被相達、罷在候処、同十一日別紙達書阿部美作守(正静、棚倉藩主)様御取次、華川金之進江御渡シ相成候付、私ヨリ差上呉候様承り申候付、差上申候、尤私儀行先無御座、右金之進ヲ以阿部様御留守居役江御菩提寺大圓寺江参度旨申述候処、直ニ留守居役ヨリ掛合呉候て、十一日ヨリ二月十六日迄罷在申候、然処十七日幕艦ヨリ差下候様、評定所江呼出之上致承知罷在申候、

一立華直記儀は、砲丸ニモ相当り候哉、相果候旨承り候付、同人悴立華富次郎儀、富永金次郎ト致変名、同道ニて罷下り申候、

一櫻田御屋敷は、当分阿部美作守様江御預ケ相成候、

一田町・高輪両御屋敷は、町方預り之由承り申候、

一私共大圓寺江罷在候付、大圓寺ヨリ之問合壱封差上申候、

一三國屋江積残シ相成候御用物、又は諸人荷物取調書別紙差上申候、此段別紙別封相添右形行御届申上候、以上、

手形所書役助　木原尚右衛門

三月五日

一七三ノ四

私共事、櫻田御屋敷江被召置候処、旧臘廿五日、上御屋敷江徳川家人数ニて、浪人取押方トシテ、相固候段承候付、早速差越候処、幸橋御門は勿論、途中固メ厳敷往来留相成、無余儀御屋敷江引取、取締罷在候得共、為何御達モ無之、然処当正月十一日、稲葉美濃守（正邦）様御達之由ニて、急速御国元江引払候様阿部美作守様ヨリ御達有之、然処何分多人数之家内召列出立難調候付、形行阿部様御家来江申出候処、右之大圓寺江致掛合置候付、同寺江今晩中引取候様致承知候間、銘々引取居申候、然処去月十四日評定所江呼出之上、来ル十七日帰国致シ候様御達有之、同日佃島ヨリ乗船、同廿三日志州鳥羽湊江着船、同所ヨリ藤堂（高猷）和泉守様御家来江引渡相成、今日伏見江着仕候間、此段形行御届申上候、以上、

但御留守居組小頭小野金之助・同足軽大篠笹吉・御兵具方足軽富永岩吉モ櫻田御屋敷へ被召置、私共同様之儀ニ御座候間、此段モ申上候、以上、

辰三月　鈴木善兵衛　成田休庵　石神十郎

一七三ノ五

東郷七之丞　橋本彦一郎
入江駒之丞　禰口才之進
齋藤八郎　新原健之進
臼井猶喜　郡司直助
川崎四郎左衛門　中津納治
堤彦太郎　中島七郎
澁谷龍徳　前田源兵衛
半田源太郎　郡司熨十郎
山本辰次郎　相川惣兵衛
齊藤直次郎　小林万蔵
玉置周司　齊藤利兵衛

桑山甚助　垣谷半兵衛
比野友吉　相川惣蔵
兒玉佐兵衛　赤塚一郎左衛門
宇都武左衛門　前倉武一
内田清吉　八木平左衛門
柳瀬半助　中武次左衛門
比野乙吉　岩本幸兵衛
深瀬幸蔵　田中金次郎
關助之進　同玉次郎
安藤武八　柴山良助
杉田吉次郎　堀勘兵衛
川口源次郎　兒玉彌右衛門
相田三郎吉　伴太郎左衛門
村上織之進　川口源蔵
齊藤八郎　妻子共三人　下女一人　中間拾七人
玉置七太郎　落合惣次郎
落合金蔵　北村俊宅
吉田半蔵　水野吉太
飯島多十郎　中村清之進
南部彌八郎

右ハ、於江戸召捕相成、宇和島屋敷江徳川ヨリ廻達相成候ヲ、黒川覺太郎写取持越候事、

島津忠義家記

一七四　九州鎮撫総督澤宣嘉ニ命シテ西海道ヲ統轄セシム

明治元年三月六日

九州鎮撫総督澤宣嘉ニ命シテ西海道ヲ統轄セシム、因テ薩摩・肥後以下ノ諸藩ニ令シ、旧代官地検査等ノ事之ヲ総督ニ申セシム、

九州一円御委任之義、御願之趣承候、先般従朝廷差向民情為鎮定、最寄之藩々へ、代官地所取締被仰付候得共、実地諸藩之方向御点検之上、夫々御改候テ宜候間、御改可被仰越候、尤九州之義ハ、総テ御委任ニ相成候事、

内国事務局記

案スルニ、内国局記達留中此書ヲ載セテ其名ヲ署セス、蓋シ澤宣嘉ニ令セシニ係ルコト疑ナシ、但書中御願之趣云々ハ別ニ見ル所ナシ、

一七五　九州元代官地ヲ調査シ鎮撫使ニ稟申スヘシト令セラル

明治元年三月六日、元代官地ヲ調査シ、鎮撫使ニ稟申スベシト令セラル、

一七五ノ一

各通

薩摩少将〔島津忠義〕
細川越中守〔慶順、熊本藩主〕
奥平大膳大夫〔昌服、中津藩主〕
黒田甲斐守〔長徳、秋月藩主〕
中川修理大夫〔久昭、岡藩主〕
久留島伊豫守〔通靖、森藩主〕

九州取締之義、鎮撫使へ御委任ニ相成候間、先般御沙汰有之候元代官地所、取調之上鎮撫使へ可申出候、此段為心得申達候事、

一七五ノ二

薩摩少将

九州取締之儀、鎮撫使江御委任相成候間、先般御沙汰有之候元代官地所取調之上、鎮撫使江可申出候、此段為心得申達候事、

御書附一通

但

九州取締之儀、鎮撫使江御委任ニ相成候云々之儀、

右ハ昨五日、内国局ヨリ御呼出ニ付、御留守居付役隈元敬一郎罷出候処、御用掛松尾伯耆〔相保〕ヲ以御別紙被相渡候付、可申上旨申述置候段申出候間、相添此段申上候、以上、

辰三月六日　　新納嘉藤二

伊勢様

一七六　島津忠義ノ下賜金返上ヲ聴許セサルコトヲ達ス

明治元年三月六日、忠義下賜金返上ヲ請フモ、優旨聴許セラレサルコトヲ令セラル、

一七六ノ一

私事議定職被　仰付置候処、月給イマダ御取究モ無之候得共、此節御金五百両被下候旨承知仕、難有奉存候、乍然累代過分之領知ヲモ被下置候付、誠以奉恐入候得共、職務ニ付、被下方之儀ハ御断申上候、此段宜敷御

執
奏奉頼候、以上、
三月六日　　薩摩少将

一七六ノ二
三日、金五百両ヲ下賜セラレタルモ、累代所領モ賜リタルニ由リ、之ヲ辞センコトヲ請ハレタリシニ、即日優旨ヲ以テ、聴許セサレサリシナリ、
出願之儀、神妙之至候得共、金五百両無辞退拝受可致候事、
三月

一七六ノ三
御書付一通　　御付札有
但
御金五百両御返上之儀ニ付、　御直名
御取次
中川大炊

右ハ、今日太政官代弁事御役所へ持参、右大炊江出会、演説之上差出申候処、披露可致旨承リ候付、相扣居候処、御書付ヘ被成御付札、坊城様ヨリ右同人ヲ以御渡被成候付、可申上旨申述置候、
右之通今日私共差支、御留守居附役赤井直之進相勤申候付、御書付相添此段申上候、以上、
辰三月七日　　新納嘉藤二
(関山金生)
糺様

一七六ノ四
御金五百両
右ハ去ル三日、太政官代会計裁判所ヨリ御用有之、御留守居付役勤永山左内罷出候処、御用掛木村東市正ヨリ
太守様御事、イマダ月給等御取究モ無之、正月以来御骨折ノ廉ヲ以、不取敢被下候趣申聞、被相渡候段申出候付、達
貴聞候、右ハ累代過分之領知ヲモ被下置候付、職務ニ付、被下方之儀ハ、御断被仰上候旨、
御別紙之通同七日、太政官代弁事御役所ヘ、御留守居付役赤井直之進持参、御取次中川大炊ヘ差出候処、披露可致旨承リ、相扣居候処、出願之儀神妙之至ニ候得共、金五百両無辞退拝受可致旨、御書附ヘ御付札被成、坊城様ヨリ右大炊ヲ以、御渡被成候段申出、達
貴聞被遊御拝受候御書附等相添、此段申越候条、

中将様可被達
御聴候、以上、
但
帯刀殿・西郷吉之助へ金三百両ツヽ、被下候付、達
貴聞頂戴相成候、此段ハ為御心得候、
辰三月廿六日　　關山　糺
島津圖書殿〔久治〕
桂右衛門殿〔久武〕
川上龍衛殿〔久鮮〕
新納刑部殿〔久篤〕
町田内膳殿〔久憲〕

一七七　諸藩ニ令シテ士庶ノ逋逃ヲ禁シ、言路ヲ開キ民情ヲ通セシメラル

明治元年三月七日〔四日イ〕、諸藩ニ令シテ士庶ノ逋逃ヲ禁シ、言路ヲ開キ民情ヲ通セシメラル、
王政御一新之折柄天下ニ浮浪之者有之候テハ、実ニ不相済儀ニ付、士分之者ハ不及申、農商タリ共一切脱国不致様、厳敷取締被　仰付候、畢竟言路鬱塞、政令之不行届ヨリ、自然脱国之者相生シ候事故、無上下　皇国之御為ハ勿論、主家之為筋等存込、建言致シ候者ハ、大ニ言路ヲ洞開シ、公正之心ヲ以、其旨趣ヲ十分ニ尽サセ、上下隔絶之患無之様可致候、尚其趣ニ寄リ、太政官代ヘモ可申出候様被　仰出候事、
三月七日
内国事務局叢書
春嶽私記

一七八　藩老天草島管轄ヲ肥後藩ヘ引渡スヘキコトヲ達ス

明治元年三月七日、藩老天草島管轄ヲ肥後藩ヘ、引渡スベキコトヲ通牒セリ、
肥後家老沼田勘解由、此節為御使者差越、拙者致面会候付、乍序其表是迄之次第モ細々申入候処、彼方ヨリモ内情之儀共打明シ申出、然処土地支配之儀ハ、已ニ於京都細川侯江為被仰付哉之模様ニ付、弥於其儀ハ、彼方出勢人数ヨリ其方ヘ引合有之様、篤ト致談判置候間、形行申出ニテ可有ニ付承届、此御方ヨリ是迄所置

振之諸件ハ勿論、此以後土民鎮撫方之次第、其方存慮之儀ハ委細申含置候テ、引取候様可致候、此段申越候、已上、

辰三月七日　　桂　右衛門

天草滞在

得能彦左衛門殿

(記)

正月中藩兵ヲ派遣シテ、浪士ノ紛擾ヲ鎮メ、尓後之ヲ管理シ来リシニ、朝廷ニ於テ同島ノ管理ヲ肥後藩ニ命セラレタル旨、藩老ヨリ通シタルナリ、

一七九　太政官代行幸警固ノ心得ヲ達ス

明治元年三月八日、太政官代行幸警固ノ心得ヲ、達セラル、

一七九ノ一

加州
薩州
長州

右明九日

行幸ニ付、列奉行脇路ヨリ通行可致事モ可有之候間、御道筋警衛向江、心得迄ニ可被達置候事、

三月八日

一七九ノ二

(記)藩記ヲ載ス、

右御書附一通、弁事局ヨリ御呼出ニ付、御留守居附役隈元敬一郎罷出候処、御用掛松室甲斐ヲ以被相渡、御書附之儀ハ長州様ヘ致廻達写相添、辰三月八日新納嘉藤二ヨリ糺様宛之首尾書有之候事、

(按)九日太政官代ニ行幸アラセラルヽニ仍リ、途中警固ヲ命セラレタリ、然ルニ列奉行ハ前後指導ノ為メ、警固ヲ犯シ去ルコトアルベキヲ以テ、預メ其通過ヲ便ナラシメラレタルナリ、

一八〇　島津忠義行幸ニ付、太政官代ヘ参向ヲ命セラル

明治元年三月八日、忠義行幸ニ付、太政官代ヘ参向ヲ命セラル、

(記)藩記ヲ載ス、

一明九日太政官代ヘ就

行幸
御衣冠御差貫ニテ、卯半刻御先廻被　仰付候旨、御用
掛松室甲斐ヲ以被仰渡候事、
三月八日

一八一　島津廣兼太政官代弁事局等ヨリノ達書ヲ
報告ス

明治元年三月八日
一去ル三日御参
内御衣冠等之儀、
一先月晦日、佛・英・蘭公使参
内被仰付候儀、
一諸願・伺届等都て太政官代弁事役所江、本紙ニ写書相
副、二通ツヽ差出候様と之儀、
一御親征
行幸去ル五日之旨、更被
仰出候御儀、
一先月廿八日、仏蘭西公使上京ニ付、警衛之儀、
一同廿九日、仏蘭西人上京、相國寺滞留所ニ相成候儀、
一大山格之助、奥羽鎮撫使参謀被仰付候儀、
一佛国公使下坂之節、警衛向等之儀、
一去ル三日英国公使参
内警固之儀、
一分捕金弐万両上納之儀、
一英国公使参
朝掛、於途中乱妨之所業有之、厳重可致守衛等之儀、
一前文同断ニ付、猶亦手厚被糺、不審之者有之候は、召
捕速ニ可申出等之儀、
一前文同断ニ付、別て厳重可致取締等之儀、
一佛国公使入京ニ付、騎馬警衛等被仰付候儀、
一諸侯列之輩、自今立烏帽子裏附等之儀、
一佛国公使先月廿八日、大坂発途之儀、
一右同断ニ付、布告相成候通、取締等之儀、
一太政官日誌七冊但一ヨリ七迄、
一英・佛・蘭公使上京参
内被仰付、警衛取締等之儀、
一近来於所々暗殺之者有之、一同布告ニも相成候得共、
今以不相止等之儀、
一先月晦日、各国公使参

内ニ付、警固之儀、
一奥羽鎮撫使去ル二日、御発途之儀、
一鷲尾様江警衛之儀、
一外国交際之儀、
叡慮之旨被　仰出、各国公使急々参
朝被仰付候儀、
一右ニ付、古来より之次第三職より御達之儀、
一御軍令之儀、
一古金・銀是迄通用令停止候処、
御一新之御場合、御手も不被為届候付、当分地下相場を以、可致通用と之儀、
一高松頼聰(松平、高松藩主)・本庄弾正忠(宗武、宮津藩主)被免入京、頼聰ニは於旅宿慎之儀、
一諸藩上京旅中ニて、大総督・御鎮撫使其外様より、於途中御出会之節心得方等之儀、
一総裁有栖川帥宮様始三職人名等之儀、
一伊地知正治東山道先鋒総督之参謀被仰付候儀、
一今般
御親征ニ付、印鑑を以通路往来被仰付候儀、
一丹波国外ニ三ケ国村名書之儀、
一此度
御親征被　仰出候付ては、心得違無之、生業可励と之儀、
一去ル五日
御親征として被為遊
御出輦等之儀、
一今般
御親征
行幸供奉被　仰出候付て之御儀、
一右御同断ニ付、
御留守中乾御門御警衛之儀、
右三十八(ママ)通之通太政官代弁事局等より、追々被仰渡候付達
貴聞、向々江申渡候、御留守居首尾書等相添、此段申越候条
中将様被達
御聴、其元申渡等之儀、何分も可被取計候、以上、

辰三月八日　　嶋津伊勢

嶋津圖書殿
桂　右衛門殿

川上龍衛殿
新納刑部殿
町田内膳殿

右ニ相付候御書付之儀、銘々日附を以順々写取、前ニ補入候事、

〔慶明雑録二十六にて校訂〕

一八二　太政官代ニ臨ミ蝦夷開拓ヲ諮詢ス

明治元年三月九日、太政官代ニ臨サセラレ、三職ヲ召シテ、高野保建将少・清水谷公考建議ノ蝦夷開拓ノ可否ヲ諮詢ス、群議其利ヲ陳ス、是日又宴ヲ百官ニ賜ヒ其勤労ヲ賞ス、

一八二ノ一　太政官日誌ニ云、三月九日辰刻太政官代ヘ行幸被為在、御座ノ間ヘ
出御、　玉座近ク三職ヲ被為　召、親ク蝦夷地開拓之事件ヲ
御下問有之、一同大ヒニ開拓可然之旨ヲ言上ス、此儀相済テ後、酒肴ヲ賜フ、

一八二ノ二　勅旨曰、
先帝深厚之
叡旨御継述被為遊度、至重之
宸慮被為在、偏ニ寛洪ヲ以御国基ヲ被為立度
思食候処、兵革草卒ニ起リ、不可言之勢ニ至リ、内外
御多難之砌、三職百官之輩奮発勉励之力ニヨリ、即今
粗方向相立チ候段、深ク
御満足候、依之乍聊酒肴ヲ下シ賜候間、各積日之労苦
ヲ可慰候、然リト雖トモ、巣窟未ダ平カス、人心深憂
懼ヲ抱候得ハ、尚此上忠誠ヲ尽シ、志ヲ遠大ニ期シ、
皇威ヲ振起シ、万民ヲ安堵セシメ、宿昔之
叡慮貫徹候様
御沙汰候事、

一八二ノ三　高野保建・清水谷公考建議

蝦夷島周囲二千里中、徳川家小吏之一鎮所而已、無事之時モ懸念御座候処、今般賊徒
御征討被　仰出候ニ付テハ、東山道往来相絶シ、徳川・荘内等之者共、彼地ニ安居仕事ハ難相成、島内民夷ニ制度無之、人心如何当惑仕候儀ニ有之ヘクヤ、不軌之

輩御座候ヘハ、窃ニ賊徒之声援ヲナシ可申モ難計、魯戎元来蚕食之念盛ニ候ヘハ、此虚ニ乗シ、島中ニ横行シ、兼テ垂涎イタシ候北地久春(樺太)古丹等ニ割拠シ、如何様之挙動可有之モ難計候ヘハ、一日モ早ク、以御人撰鎮撫使等御差下ニテ、御多務中モ閑暇被為在候勢ヲ示シ、御外聞ニモ相成候様仕度、且漁魚之利モ夥敷場所ニテ、御軍費之一助ニモ可相成候間、乍不肖臣等ニ於テモ抛身命勉励仕度存候、

皇政復古之折柄、右等之辺モ必定被

仰出候儀トハ奉存候得共、寒暖之違モ有之、内地ニテ二三月之延引ハ、彼地ニテ五六月、又ハ一年之手後ト相成、今年内ニ策略難相立候間、何分早々御採用相成候様仕度奉存候、此段去月以来議論仕居候儀ニ有之、海氷流澌之時節ニ相至候ヘハ、魯人軍艦毎年久春内ヘ罷出候間、当月中ニモ御差下ニ相成候様被遊度積リ、警衛人数ハ有志之者共、兼テ相約候分、箱館諸所散在之者ヲ除テ、現在二百人計軍艦共有之、金穀之類ハ、紀州・江州等ニ於テ、彼地ニ引合御座候町人共、尽力仕度内願ニ及候者多ク御座候テ、内々支度ハ粗調居候間、何卒公論ヲ以、即日御評決被

仰付、今般

行幸被為在候已前ニ

勅許ニ相成候様仕度奉存候、猶巨細之儀、有志之者共別紙差出候間、宜敷御参考之程奉懇願候、誠恐誠惶謹言、

二月二十七日　　保建

公考

一八二ノ四

昨九日、辰刻太政官代臨幸、宮・堂上・諸侯様供奉、

太守様ニハ、御先廻被

仰出、御衣冠ニテ、卯刻御供揃

御先ニ御上リ被遊候、別紙

御趣意ヲ以、

御酒肴

御頂戴被遊候、申半刻

還幸被為

在候付、直ニ

御跡ヨリ御帰

殿被遊候、

但

還幸之上御参

内、
天気御伺ニ不被為及旨御達ニ付、
御参
内不被遊候、
右之通昨日私御供相勤申候間、此段申上候、以上、
辰三月十日　新納嘉藤二
糺様
追テ二月三日
臨幸之節ハ、
中将様御承知之上、参与様方迄以御飛札、
天気御伺被遊候筋ニ、吟味仕申上置候、此節ハ
太守様ニモ御参
内、
天機御伺ニ不被為及旨御達ニ付、
中将様ニモ右ニ被為準、以御飛札
天機御伺ニ不被為及御事ニ可有御座哉ト吟味仕、此
段モ申上候、
島津忠義家記

【参照】
大久保利通日記三月
、
九日
一五半太政官ヘ出席、今日太政官ヘ
親臨被為在　出御、副総裁以下下参与一同出席奉拝
天顔、於　御前蝦夷開拓之議事被　仰出候、且亦
御沙汰之趣、岩倉卿御読上ケ一同奉拝聞候、実以不容
易事ニテ恐入候、御書面左之通
退出後小大夫ヘ参ル、

一八三　薩藩鷲尾隆聚邸ノ守衛ヲ辞ス

明治元年三月九日、鷲尾隆聚ノ邸ヲ守衛セシム、之ヲ辞セリ、
一八三ノ一
鷲尾殿為警衛人数拾人可差出旨御達之趣承知候処、東
海・東山両道、大坂・兵庫並奥羽鎮撫使ヘモ、附属出
兵仕居候ヘハ、繰合兼申候付、無拠御断申上候様申付
候付、此段申上候、以上、
島津修理大夫内
三月九日　内田仲之助
一八三ノ二
書附一通

但

鷲尾殿へ警衛人数御断之儀、内田仲之助名前

非蔵人

松尾豊前

右ハ今日太政官代軍防局江私持参、右豊前へ面会差出候処、正ニ致落手候旨申聞候間、此段申上候、以上、

辰三月九日　　新納嘉藤二

糺様

島津忠義家記

一八四　浪士ノ私ニ貴紳ニ託シテ其附属兵ト称スルヲ禁ス

明治元年三月十日、浪士ノ私ニ貴紳ニ託シテ其附属兵ト称スルヲ禁セラル、

是迄浮浪脱走之者、自然附属之姿ニ相成居候処、以来宮・堂上方附属兵ト唱ヘ、相集候儀堅ク被禁候、若為朝家忠誠ヲ遂ケ度輩ハ、太政官軍防局ヘ願出候ヘハ、何分之御詮議可被　仰付旨、

御沙汰候事、

三月十日

一八五　神武天皇祭使ヲ畝傍陵ニ遣シ幣帛ヲ奉ス

明治元年三月十一日、神武天皇祭、使愛宮通祐ヲ畝傍陵ニ遣シテ、幣帛ヲ奉ス、

一八五ノ一　神武帝山陵使　宣命辞別

天皇我　詔旨止掛畏岐

畝傍山乃東北陵尓恐美恐毛奏賜者久止奏去元治元年与利始

氐限以永代氐毎年常例乃幣帛乎令発遣免従二位行権中

納言源朝臣通祐乎差遣氐令捧持氐奉出賜布此状乎平久

安久聞食氐

天皇朝廷乎宝位無動久常磐堅磐尓夜守日守尓護幸賜

氐四海無事久国家無故久安穏泰平尓恤助賜倍止恐美恐毛

奏賜者久止奏

辞別氐奏久近頃天下乃形勢不穏志氐不慮毛去正月尓干戈

乎動須乃災起志加間毛無久彼凶徒等者罷退奴礼止猶毛人心乃

不安須国家乃不静尓依氐数多乃鎮撫使乎四方尓令差向

氐速尓姦賊乎令絶牟止所念行須彼止云比是止云布内外乃

禍乃屢到礼留考誠尓危急存亡乃時奈利止終食乃間毛　御心

不安須造次尓毛忘礼不賜須深久恐礼重久患比賜布此状乎
平久安久聞食氐
天皇朝廷乎宝位無動久常盤堅盤尓夜守日守尓護助賜
比氐自今以後者天下安穏尓四海静謐尓無事久無故久護幸
賜倍止恐美恐美毛奏賜者久止奏
慶応四年三月八日

一八五ノ二
神饌

神酒　二升　納瓶子二口原註土器二枚土高坏二基添
白餅　五拾　盛二折櫃二合一
甘塩鯛二尾　載二檜掛盤一
時菓　盛二折櫃二合一
時菜　盛二折櫃二合一

幣帛

錦　壱丈
綾　壱丈
五色帛　各壱端
五色絲　各壱両
布　壱端

御祭典次第

当日早旦諸陵寮官、先参二向　御陵一点二検敷設一刻限就二
隍外一一同手水、
次寮頭参二進　陵前一寮官等相従参進、
次寮頭向二　山陵一再拝両段拍手両段、寮官等従二其後一
羅拝拍手一如二寮頭作法一、
次寮頭拝跪謹奏二今日御祭奉仕之由一、訖寮官一拝退下
原註自二下、薦立
次寮官就二弁備所一弁二備御酒饌幣物等一、
次楽官参進着座、
次寮官、率二守戸一　就二　陵前一令レ敷二高案下敷葉薦一
次寮官昇二高案一共進、並二列　陵前葉薦上一退、
次寮頭進二　陵前一、楽官奏レ楽、
次寮官次第相進立、
次自二下薦一転二伝役送打敷供御物等一、寮頭陪膳先敷二打
敷於高案上一、次供二白餅一、次御酒盞土器、次瓶子、次
鯛、次菜、次菓、陪膳訖寮官退下、楽止、
次寮頭拝跪拍手両段、申二御饌祝詞一、訖拍手両段一拝
退、次寮官令二守戸敷一　勅使座一、
次　勅使参向、寮頭出二迎東門一、先導至二隍内一、
次寮官昇二幣物高案一、共進立二供饌之前一、

次寮官一同着座、
次　勅使就二　陵門外一解レ剣下レ裾、従官供二手水一、
次　勅使入二　陵門一徐歩参進、楽官発二鼓笛之音一、
次　勅使参二進　陵前一之間、寮官一員捧二玉串一趨進献二勅使一、
次　勅使執二玉串一着二　陵前座一、
次　勅使作法、
次　勅使読二上　宜命一訖目二寮官一、
次寮官一員進跪二　勅使座下一、
次　勅使賜二　宣命于寮官一、寮官請取副二于笏一、立進二陵前一跪二于折敷之前一、
次寮官一員執二脂燭一進二　宣命之傍一、渡二脂燭一退、
次焼二上　宣命一、訖徐歩退就二　勅使座下一、跪申二焼畢之由一復座、
次　勅使作法退出楽止、先レ是寮頭起レ座佇二立陵門一、先二導勅使一至二立于隍外一、
次　勅使更進有二私拝一、此間寮頭佇二立隍外一、
次　勅使退二出隍外一、寮頭先導奉レ送二東門一、
次寮官起レ座令二守戸撤一二　勅使座一訖出二于隍外一待二寮頭帰参一一同手水、
次寮頭更進二　陵前一拝跪、謹奏二幣物供饌可レ奉レ撤之由一
次寮官二員進昇二幣物案一撤却、
次寮頭又進二　陵前一、楽官又奏二物音一、
次寮頭撤二却御酒饌一、寮官共進転伝送下如二初儀一、
次寮頭再拝両段拍手両段、寮官等共従二寮頭作法一、訖楽止、
次楽官退下、
次寮官一同退下、
明治三年三月十一日

一八六　在京諸侯ノ官位叙任ノ年月日ヲ録上セシム

明治元年三月十一日、在京諸侯ノ官位任叙ノ年月日ヲ録上セシム、
一八六ノ一
官位
宣下之年月日、急御用候間、以書付明十二日辰刻迄ニ、必太政官代へ可差出候事、
書附雛形

何年何月何日
叙某位
任某官
三月十一日　弁事役所
次第不同
〔徳川茂承、紀州藩主〕紀伊中納言殿
〔島津忠義、薩州藩主〕薩摩少将殿
〔伊達宗城、宇和島藩主〕宇和島少将殿
〔道純、丸岡藩主〕有馬遠江守殿

一八六ノ一
安政六年未二月七日
叙従四位下
任少将
薩摩少将

（按）
当時京ニ在ルモノ七十人ナリトス、
四月十三日ニ至リ再ビ此命アリ、

一八七　島津忠義先帝御陵参拝ヲ聴サル

明治元年三月十二日、忠義先帝御陵参拝ヲ請ヒ聴サル、

一八七ノ一
明後十四日
先帝
山陵江参詣仕度候間、此段奉願候、以上、
三月十二日　薩摩少将
御附札
可為勝手、
但衣冠・直垂・狩衣之内、着用可有之事、

一八七ノ二
御書附一通
但
明後十四日
先帝山陵へ御参詣御願之儀、
弁事掛
非蔵人
松尾〔相保〕伯耆
右へ持参、右伯耆へ致面会差出候処、暫時可扣居旨申聞候付、相待居候処、再出会御張紙之通被仰渡候付、申聞相渡候、
右之通私共差支、御留守居附役隈元敬一郎相勤申候間、相添此段申上候、以上、

三月十二日　　新納嘉藤二
伊勢様

一八八　藩士中原猶介海軍参謀ヲ命セラル

明治元年三月十二日、藩士中原猶介海軍参謀ヲ命セラル、
一八八ノ一　　中原猶介へ

海軍参謀被　仰付候条、
御沙汰候事、
三月十二日

一八八ノ一(記)　藩記ヲ載ス、

右御書附一通辰三月十二日、太政官代へ御留守居一人可罷出旨、切紙到来罷出候処、軍防局非蔵人松尾但馬(相永)ヨリ被相渡、附役限元敬一郎相勤候趣、新納嘉藤二ヨリ伊勢様宛之首尾書有之、略ス、

(按)　三月十一日、大原侍従(俊実)海軍先鋒トシテ、京都ヲ発セラル、中原ニ参謀ヲ命セラレタルナリ、

一八九　祠官ノ神祇官ニ属スルコトヲ達ス

明治元年三月十三日、祠官ノ公卿ニ因リテ執奏シ、及ヒ其配下タルヲ停メ、之ヲ神祇官ニ属ス、
一八九ノ一
此度

王政復古、　神武創業ノ始ニ被為基、諸事御一新祭政一致ノ　御制度ニ、御回復被遊候ニ付テハ、先第一神祇官御再興御造立ノ上、追々諸祭奠モ可被為興儀、被　仰出候、依テ此旨五畿七道諸国ニ布告シ、往古ニ立帰リ、諸家執奏配下ノ儀ハ被止、普ク天下ノ諸神社神主・祢宜・祝神部ニ至迄、向後右神祇官附属ニ被　仰渡候間、官位ヲ初諸事万端同官ヘ願立候様、可相心得候事、

但猶追々諸社御取調並諸祭奠ノ儀モ、可被仰出候得共、差向急務ノ義有之候ハヽ可訴出事、

三月

按スルニ、此時神祇官未タ立タス、而シテ其執奏配下ヲ停ム、事実阻格ノ患アルニ似タリ、蓋シ神祇事務局ニ於テ、仮ニ之ヲ管セシナルベシ、

一八九ノ二　神祇事務局布告書

今般諸社執　奏配下被止、以後神祇事務局支配ニ被仰出候ニ付、左之通可相心得候、

一諸国之社家諸願並重キ伺届等、其所之裁判領主　御料所御預之向ヨリ、添書ヲ以テ可申出事、

但有限大社等格合有之神職之向ハ、可為別段候、且是迄支配下之モノ並下社家等ハ、其頭ニテ取扱候上、本文之通相心得可申事、

一神階之儀ハ、厳重取調無之テハ、容易不被仰出候事、

一神職官位願之儀、厳重取調之上可申出事、

一総テ社家継目之儀ハ、上京致サセ取調、差免可申筋ニ候得共、所ニ寄候テハ、裁判領主御料所御預之向ヨリ、取調之段承之候上、差免候儀モ可有之、猶祭服初着用向等是迄之流弊ヲ去リ、簡易之規則相立、追テ可及　沙汰候事、

右之通五畿七道へ、早々布告之事、

三月　　神祇事務局

按スルニ、本条・別本官中日記前条ト共ニ、晦日ニ収ム、而シテ諸書載セザル所ナリ、恐クハ草案ニシテ発布セサルモノニ係ル、姑ク録シテ参考ニ供ス、

一九〇　別当・社僧ノ類蓄髪セシム

三月十七日

別当・社僧ノ類、悉ク蓄髪セシム、

今般

王政復古、旧弊御一洗被為在候ニ付、諸国大小之神社ニ於テ、僧形ニテ別当或ハ社僧抔ト相唱候輩ハ、復飾被　仰出候、若シ復飾之儀、無余儀差支有之分ハ可申出候、仍テ此段可相心得候事、

但別当・社僧之輩、復飾之上ハ是迄之僧位僧官返上、勿論ニ候、官位之儀ハ、追テ御沙汰可被為在候間、当今之処、衣服ハ浄衣ニテ勤仕可致候事、

右之通相心得、復飾致シ候面々ハ、当局ヘ届出可申者也、

辰三月十三日　　神祇事務局

一九一　薩藩蒸気船兵庫港ヨリ関東ヘ廻航ヲ命ス

明治元年三月十三日
一九一ノ一

薩州
蒸気船

右来ル十八日、兵庫港揚碇関東へ可被差廻旨、御沙汰候事、

三月十三日

銃隊人数百人乗組、駿州(静岡県)三島へ着船、江城之模様ヲ窺ヒ、横濱港へ乗廻シ、彼地警衛被仰付候事、

大原侍従殿並参謀両人へ、諸事御委任相成候間、各々差図ヲ受候様可心得候事、

一九一ノ二(記) 藩記ヲ載ス、

右辰三月十三日、被相達候儀有之候間、可罷出旨切紙到来、遠武橘二罷出候処、軍防局掛非蔵人吉田遠江ヲ以、右二通御書付被差渡、明日中御請可致旨申聞候趣、新納嘉藤二ヨリ伊勢殿へ首尾書有之、

一御旗一流
　但菊御紋付紅戸(房カ)方添
一御旗竿一本
一錦袖印百
一御船印大小二ツ
　但菊御紋付

右今日太政官代軍防局ヨリ御呼出ニテ罷出候処、四條前侍従様ヨリ、来ル十八日出帆之蒸気船並銃隊百人へ被成御渡候間、御用済之上返献可仕旨被成御達候付、可申上旨申上置候、

左候テ、只今落手書差出候様、被成御達候間、差上置申候、

右之通今日ヨリ私共差支、御留守居附役勤永山左内相勤申候間、御品相添此段申上候、以上、

辰三月十五日　　新納嘉藤二

糺様

一九一ノ三
御書附二通

内

一通

来ル十八日蒸気船兵庫港揚碇、関東へ被差廻候旨之儀、

一通

銃隊人数百人駿州三島へ云々之儀、

軍防局掛

非蔵人

吉田遠江

右ヨリ被相達候儀有之候間、可罷出旨切紙到来罷出候処、右遠江ヲ以御別紙二通被相渡、左候テ明日中御請可致旨申聞候付、可申上旨申述置候、

右之通御留守居附役遠武橘二相勤申候間、相添此段申上候、以上、

辰三月十三日　　新納嘉藤二

伊勢様

島津忠義家記

一九二　本藩大坂市中巡邏ヲ命セラル

明治元年三月十三日、本藩大坂市中巡邏ヲ命セラル、

一九二ノ一

薩州

大坂市中取締被免、巡邏被仰付候事、

三月

一九二ノ二（記）藩記ヲ載ス、

一御書付二通

内

一通

王政復古　神武創業之始ニ被為基、諸事　御一新云々之儀、

一通

大坂市中取締被免、巡邏被仰付候儀、

一太政官日誌　二冊

但第二・第四

弁事掛非蔵人

松室甲斐

右ヨリ被相達候儀有之候間、可罷出旨切紙到来罷出候処、右甲斐ヲ以被相渡、左候テ王政復古云々御書付ト太政官日誌ハ、触下諸侯ヘモ通達可致旨申聞候、

右之通御留守居附役遠武橘二相勤申候間、相添此段申上候、以上、

三月十三日　　新納嘉藤二

伊勢様

追テ王政復古云々之御書付ハ、写ヲ以廻達仕置、同日誌ハ触下諸侯之数丈被相渡候付、相添差廻置申候、

此段モ申上候、

又本日、藝州・長州モ同シク、市中巡邏ノ命アリ、

〔表紙〕

忠義公史料　明治元年三月　二

〔扉に、表紙の文字の外に市来四郎編の記載あり〕

目録

一天皇紫宸殿ニ御シ、公卿・諸侯ヲ率キテ天神地祇ヲ祭リ、国是五章ヲ約定シ、公卿・諸侯ヲシテ誓約ニ就カシム三月十四日

記　御誓祭次第

御祭文之写

祭場略図

御誓文写

公卿・諸侯就約ノ事

御宸翰写

木戸孝允建議

太政官議事所雑抄

列藩盟約書

公卿・諸侯奉答書

中下大夫奉答書

藩記

参照　土方久元日記節録

一島津忠義誓約ノ趣旨ヲ述ヘ、誠実輔翼スヘキコトヲ諭示ス三月十四日

記　諭達書

藩記

一岩倉副総裁御親征日限治定ヲ、小松・大久保・吉井ヘ通牒セリ三月十四日

記　岩倉具視書翰

一藩船関東回航ノ命ヲ奉承シタルコトヲ上申セリ三月十四日

一英国公使兇徒ノ横虐ニ遭ヒシヲ以テ、法律ヲ設ケ将来ヲ禁戒セント請フ、因テ禁令ヲ示シ且明日ヲ以テ各要地ニ掲示スルヲ報ス三月十四日

記　東久世前少将外二名英公使ヘ贈ル書
英国公使返翰
英国公使代書翰
英国公使代ヘ返翰

一車駕発京ノ期日及ヒ海軍ヲ大坂海ニ閲スルヲ布告シ、且親征ノ旨趣ヲ申諭セラル三月十五日

記　御沙汰書三通
通達書
参照　三條大納言ヨリ小松帯刀ニ送ル書(大政引移シノ件)

一禁令五条ヲ定メテ之ヲ海内ニ頒チ、旧幕府ノ掲榜ヲ撤ス三月十五日

記　布令書及ヒ掲示禁令五札

一藩士税所長蔵大坂裁判所御用ヲ命セラル三月十五日

記　令達
留守居届書
付録

一蓑田傳兵衛ヨリ小松帯刀ヘ贈ル書(中将様御病気云々、堺市土人仏人殺傷ノ結末、御親征ニ付兵気倍層云々、藩政変革云々、岩元一条大赦ノ例ニ照シ取扱云々等ナリ)
(島津忠義以下の本巻の見出しは、稿本によって補正した)

一島津忠義御用ノ廉ヲ以、参内スヘキ旨達セラル三月十六日

一行幸ノ行列及ヒ道筋次第心得方等回達ス三月十六日

一島津忠義親征行幸中、八幡一泊ノ警衛ヲ命セラル三月十七日

一島津忠義親征行幸中、京都守護ノ命ヲ拝ス三月十七日

一島津忠義親征行幸中、石清水一泊ノ警衛ヲ免ゼラル三月十八日

一大総督府参謀西郷隆盛徳川慶喜謝罪ノ条款ヲ奏シ、ソノ大項ヲ許サル三月十九日

一行幸出輦ニ付、在京諸侯ニ参内天機伺ヲ命セラル三月十九日

一野州梁田駅ノ戦功ニ対シ、感状及ヒ賞詞ヲ賜ハル三月十九日

一封土拾万石ノ返献ニ及ハサル旨ノ指令ヲ受ク三月二十日

一車駕京師ヲ発ス三月二十一日

一西郷隆盛書ヲ大久保利通ニ贈リテ、出兵ヲ促ス三月二十一日

一車駕守口駅ニ次ス三月二十二日

一本藩姫路城ノ監守ヲ命セラレ、姫路藩臣ヨリ誓書及ヒ歎願書ヲ差出ス三月二十二日

一副総裁岩倉具視自書ヲ以諸局ノ督輔以下ヲ督励ス三月二十二日

一車駕大坂ニ至リ本願寺ヲ行在所ト為シ、柵門ヲ警衛セシム三月二十三日

一申ネテ大赦ノ節目ヲ勅諭ス三月二十三日

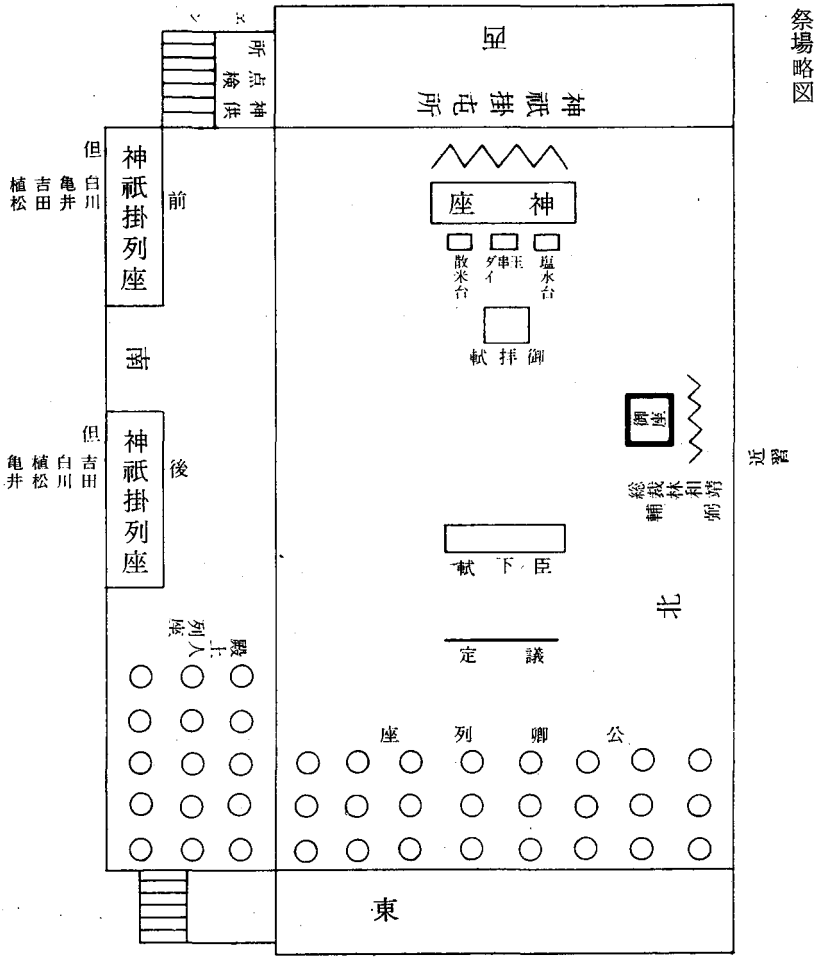
一竹田街道東洞院近辺ノ巡邏ヲ、高松藩ニ命ス三月二十三日
一島津忠義夫人戦亡者ヲ弔慰ス三月二十三日
一議定・参与及ヒ親王・公卿・諸侯行在所ニ朝ス三月二十四日
一海軍天覧ノ為天保山ヘ行幸ノ旨ヲ達ス三月二十四日
一島津忠義病ニヨリ蝦夷開拓諮問ノ参内ヲ辞ス三月二十四日
一島津忠義参内ノ時ノ下馬所ノ指令ヲ伺ハシム三月二十四日
一内田政風ヲシテ、警衛区域内外出火ノ際、心得方ノ指令ヲ受ケシム三月二十四日
一参与顧問小松清廉・後藤元燁ヲシテ、外国事務局判事ヲ兼ネシム三月二十四日
一東国ノ形勢ニヨリテハ鸞輿東征セントス三月二十五日
一副総裁岩倉具視議定参与ヲ会シテ、再ヒ蝦夷地開拓ノ事宜三条ヲ策問ス三月二十五日

一九三 天皇紫宸殿ニ御シ、天神地祇ヲ祭リ、国是五章ヲ約定シ、公卿・諸侯ニ誓約セシム

明治元年三月十四日、天皇紫宸殿ニ御シ、公卿・諸侯ヲ卒ヒテ天神地祇ヲ祭リ、国是五章ヲ約定シ、公卿・諸侯ヲシテ誓約ニ就カシム、其ノ御誓祭就約之次第左ノ如シ、

一九三ノ一
一午ノ刻群臣着座、
公卿・諸侯母屋、殿上人南廂、徴士東廂、
一塩水行事、
神祇輔勤之吉田三位侍従、
一散米行事、
神祇権判事勤之植松少将、
一神祇督着座白川三位、
一神於呂志神歌、
神祇督勤之、
一献供、
神祇督・同輔・同権判事等立列拝送、同輔津和野侍従点検、
一天皇出御、
御祭文読上、
総裁職勤之三条大納言、
一天皇御神拝、
親ク幣帛ノ玉串ヲ奉献シタマフ、
一御誓書読上、
総裁職勤之、

明治元年(1868)



島津忠義家記

一公卿・諸侯就約、
　但一人宛中央ニ進ミ、先ツ
　神位ヲ拝シ、
　御座ヲ拝シ、而後執筆加名、
一天皇入御、
一撤供、
　拝送如初、
一神阿計神歌、
　神祇督勤之、
一群臣退出、

一九三ノ二　御祭文之御写

懸久毛恐支
天神地神乃大前尓今年三月十四日乎生日乃足日登撰定天祢宜申左久今与利天津神乃御言寄乃随仁天下乃大政遠執行波止之天親王卿臣国々諸侯百寮官人遠引居連天此神床乃大前仁誓津良久波近起頃保比邪者乃是所彼所仁荒備武比天天下佐夜芸仁佐夜芸人乃心毛平穏奈良受故是以天下乃諸人等乃力袁合世心袁一津仁之天皇我政袁輔翼奉利令仕奉給閉止請祈申礼代波横山乃如置高成弖奉留形袁聞食弖天下乃万民袁治給比育給比谷蟆乃狭渡留極白雲乃堕居向伏限逆敵対者波令在給波受遠祖尊乃恩頼袁蒙利天無窮仁仕奉礼留人共乃今日乃誓約尓違波無者波天神地祇乃倹忽仁刑罰給波無物曽止皇神等乃前尓誓乃吉詞申給波久止申

一九三ノ三　御誓文之御写

一広ク会議ヲ興シ、万機公論ニ決スヘシ、
一上下心ヲ一ニシテ、盛ニ経綸ヲ行フヘシ、
一官武一途庶民ニ至ル迄、各其志ヲ遂ゲ、人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス、
一旧来ノ陋習ヲ破リ、天地ノ公道ニ基クヘシ、
一智識ヲ世界ニ求メ、大ニ
　皇基ヲ振起スヘシ、
我国未曽有ノ変革ヲ為ントシ、
朕躬ヲ以テ衆ニ先ンシ、天地神明ニ誓ヒ、大ニ斯国是ヲ定メ、万民保全ノ道ヲ立ントス、衆亦此旨趣ニ基キ、協心努力セヨ、

年号月日　御諱

一九三ノ四　公卿・諸侯就約ノ事

勅意宏遠、誠ニ以テ感銘ニ不堪、今日ノ急務、永世ノ基礎、此他ニ出ヘカラス、臣等謹テ　叡旨ヲ奉戴シ、死ヲ誓ヒ、黽勉従事、冀クハ以テ宸襟ヲ安シ奉ラン、

慶應四年戊辰三月

総裁　名印
公卿
諸侯　各名印

一九三ノ五　御宸翰之御写

朕幼弱を以て猝に大統を紹き、尓来何を以て万国に対立し、
列祖に事へ奉らんやと、朝夕恐懼に堪さる也、窃に考るに中葉
朝政衰てより武家権を専にし、表は
朝廷を推尊して、実は敬して是を遠け、億兆の父母として絶て赤子の情を知ること能さるやふ計りなし、遂に億兆の君たるも唯名のみに成り果、其が為に今日
朝廷の尊重ハ、古へに倍せしが如くにて、
朝威ハ倍衰へ、上下相離るゝこと霄壌の如し、かゝる形勢にて、何を以て天下ニ君臨せんや、今般、
朝政一新の時に膺り、天下億兆一人も其処を得ざる時は、皆
朕が罪なれば、今日の事
朕自身骨を労し、心志を苦め、艱難の先に立、古
列祖の尽させ給ひし蹤を履み、治蹟を勤めてこそ、始て
天職を奉じて、億兆の君たる所に背かざるべし、往昔
列祖万機を親らし、不臣のものあれば、自ら将として
これを征し玉ひ、
朝廷の政総て簡易にして、如此尊重ならざるゆへ、君臣相親しみて、上下相愛し、徳沢天下に洽く、国威海外に輝きしなり、然るに近来宇内大ニ開け、各国四方に相雄飛するの時に当り、独我国のみ世界の形勢にうとく、旧習を固守し、一新の効をはからず、
朕徒らに九重中に安居し、一日の安きを偷み、百年の憂を忘るゝときは、遂に各国の凌侮を受け、上ハ

列聖を辱しめ奉り、下ハ億兆を苦しめん事を恐る、故に
朕こゝに百官諸侯と広く相誓ひ、
列祖の御偉業を継述し、一身の艱難辛苦を問ず、親ら
四方を経営し、汝億兆を安撫し、遂には万里の波濤を
拓開し、国威を四方に宣布し、天下を富岳の安きに置
んことを欲す、汝億兆旧来の陋習に慣れ、尊重のミを、
朝廷の事となし、
神州の危急をしらず、
朕一たび足を挙れば非常に驚き、種々の疑惑を生じ、
万口紛紜として、
朕が志をなさゞらしむる時ハ、是
朕をして君たる道を失はしむるのみならず、従て
列祖の天下を失はしむる也、汝億兆能々
朕が志を体認し、相率て私見を去り、公義を採り、
朕が業を助て、
神州を保全し、
列聖の神霊を慰し奉らしめは、生前の幸甚ならん、
右
御宸翰之通、広く天下億兆蒼生を
思食させ給ふ深き
御仁恵の　御趣意ニ付、末々之者に至る迄敬承し奉
り、心得違無之、
国家の為に精々其分を尽すべき事、

総裁
輔弼
〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

三月

（按）
五ケ条御誓文ヲ約セサセラレ、公卿・諸侯・中下大夫
ヲシテ、誓約ニ就カシメラレタル所因ハ、参与木戸準
一郎孝允ノ国是一定ノ奏議ヲ採用アリ、顧問・参与数人
ハ下命アリテ、各々建言スル所アリ、其中ヨリ採択シ
テ、五事ノ誓文ヲ定メラレ、国是一定ヲ海内ニ示サレ
タルモノナリ、

一九三ノ六　木戸孝允建議

謹て奉建言候、旧主毛利敬親父子、甲子以来蒙譴責、
臣亦敬親父子之左右に在り、久敷防・長に伏在、四境
閉塞不奉窺
朝旨之所在、然処先般辱クモ臣蒙　命、列朝班倩已往
之跡を奉恐察候に、

先帝既に　叡旨ありて各国江被相達候趣も有之、開鎖之国是不問シテ自ら判然たり、仍て維新抑其条理を被為遂、已に去月晦日各国公使も奉拝
天顔候次第に有之候処、維新之日尤浅く、　御主意未普く通徹不致、諸藩尚方向を異にし、随て草莽輩も擲身命、却て国家之禍害を醸成し、屢誤方向候者も現に不少、国家之不幸不容易、且於彼等も憫然之至候、仰き願クハ前途之大方向を被為定、
至尊親敷く、公卿・諸侯及百官を率ひ、
神明に被為誓、明に国是之確定ある所をして、速に天下之衆庶に被為示度不堪至願候、誠恐誠惶頓首再拝、

戊辰三月　　木戸準一郎敬白

雑抄 一九三ノ七

太政官議事所

一議事所上・下二ツニ分ツ、

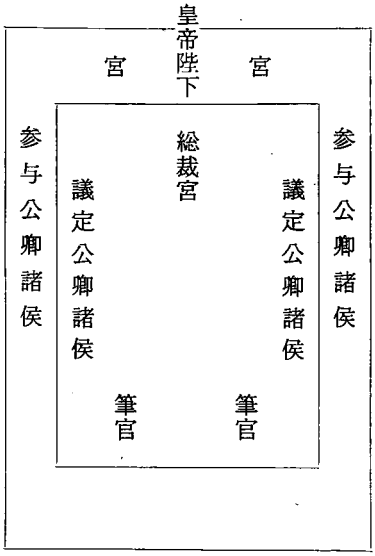
上ノ議事所

皇帝陛下　宮　公卿　諸侯会議ノ所、

宮・総裁・議定ヲ分ツ、

但公卿中参与ノ者亦此ニ会ス、

公卿中参与ノ者ヲ、上ノ参与ト謂、



総裁一員中ニ座ス、議定(公卿諸侯)各四員両側ニ分座、参与ノ公卿四員議定ノ後、諸侯ノ上ニ分座、公卿・諸侯建議ノ時、其人総裁ノ前ニ進ミ、議定ノ中ニ出ツ、

下ノ議事所

諸藩徴士・貢士及都鄙有才ノ者、会議ノ所官裁判(議定職公卿・諸侯各一員此任ニ充ツ)参与ヲ分ツ(徴士中参与ノ者ヲ下ノ参与ト謂)

裁判二員中ニ座ス、参与(公卿二員徴士四員)両側ニ分座、徴士・貢士建議ノ時、其人裁判ノ前ニ進ミ、参与ノ中ニ出ツ、

皇帝陛下臨時出御、三職(総裁・議定・参与)及徴士・貢士常参、

但五日一休一・六ヲ休日トス

一毎日巳刻会集、午刻会議、未刻退散、

一議事ノ次第前日上ノ議事所ヨリ事ヲ懸ケ、題ヲ設ケ、翌日下ノ議事所ニテ、徵士・貢士建議、裁判聞之、筆官書之、討論セス、言ヲ尽スノミ書面申上亦許ス、且題外建白ノ筋ハ許ヲ乞テ後申之

一決議ノ次第上ノ議事所ニ於テ、衆建議ヲ執リ、議定職衆議総裁其宜キニ従テ断之、筆官書之、

三職分課

一総裁職宮、副総裁公卿・諸侯

掌一切ノ事務ヲ惣判ス、

一議定職宮・公卿・諸侯

掌事務各課ヲ分督シ、議事ヲ定決ス、

裁判公卿諸侯一員

下ノ議事所ニ於テ衆議ヲ聴判ス、

神祇事務総督

神祇・祭祀・祝部・神戸・寺社・僧尼ノ事ヲ督ス、

内国事務総督

京畿庶務及諸国水陸・運輸・駅路・関市・都城・港口・鎮台・市尹ノ事ヲ督ス、

海陸軍務総督

海軍・陸軍・練兵・守衛・緩急軍務ノ事ヲ督ス、

会計事務総督

戸口・賦役・金穀・用度・貢献・営繕・秩禄・倉庫ノ事ヲ督ス、

刑法事務総督

監察・弾糺・捕亡・断獄・諸刑律ノ事ヲ督ス、

制度寮総督

官職制度・名分儀制・選叙・考課・諸規則ノ事ヲ督ス、

一参与職公卿・徵士

掌事務ヲ参議シ、各課ヲ分務ス、

伝奏

上命ヲ伝達シ、下言ヲ聴納ス、

神祇事務掛
内国事務掛
外国事務掛
海陸事務掛
会計事務掛
刑法事務掛
制度寮掛

一三職月給

総裁職　月金千　円
議定職　仝　八百円
参与職　仝　五百円
但宮・公卿・諸侯・徴士差別ナシ、職ニ従テ給之、

一諸侯・議定職ノ者在職四年（議定職受命ノ月ヨリ算シ、五年目其月ニ至ルヲ限リトス）ニシテ退ク、或ハ延ヘテ八年トス、亦公議ニ執ルヘシ、
但其国政在ルヲ以テ、不得已退ヲ乞フ者ハ、在職年限内ト雖許之、

一諸侯・議定職・常参ト雖或ハ有病、則代ルヘキ重臣ヲ出シ事務ニ与ルヲ許ス、

一徴士・参与分課ノ者自撰ヲ以テ、手代ヲ置クヲ許ス（参与一人ニテ手代三人トス、手代月金二十円ヲ給ス）

徴士貢士

一徴士無定員
諸藩士及都鄙有才ノ者、撰挙擢抜参与職ニ任ス、下ノ議事所ニ在リ、則議事官タリ、又分課ニ因テ其課ノ掛トナル者、其事ヲ専務ス、
撰挙ノ法公議ニ執リ、抜擢セラル、則徴士ト命ス（秩禄其藩主ノ所為ニ任ス、別ニ月金ヲ以テ政府ヨリ給之）、在職四年（徴士受命ノ月ヨリ算シ、五年目其月ニ至ルヲ限リトス）ニシテ退ク、広ク賢才ニ譲ルヲ要トス、若其人当器尚退クベカラサル者ハ、又四年ヲ延ヘテ在職八年トス、
衆議ニ執ルベシ、

一貢士（大藩四十万石以上三員、中藩十万石以上三十九万石ニ至ル二員、小藩一万石以上九万石ニ至ル一員）諸藩士其主ノ撰ニ任セ、下ノ議事所ヘ差出ス者ヲ貢士トス、則議事ニ与リ、輿論公議ヲ執ルヲ旨トス、貢士定員アッテ年限ナシ、其主ノ進退スル所ニ任セ、又其人ノ才能ニ因テ、徴士ニ選挙スベシ、

一九三ノ八
会盟式

一上ノ議事所ニ於
皇帝陛下臨御、列侯会同、三職出座（衣冠礼ノ如ク座配議事式ノ如クス、但下参与ノ者末席ニ列座スベシ、総裁職盟約書ヲ捧ケ読之、（御璽並総裁名印既ニ存ス）列侯拝聴就約、

一総裁職盟約書ヲ読ミ終リ、議定諸侯一人允〔宛カ〕中央ニ進ミ、名印ヲ記ス本氏ヲ可書、次ニ列侯同之、

一盟約式終リ列侯退ク、次日約書ノ写ヲ以テ、天下ニ布告ス、

会盟

一列藩会議ヲ興シ、万機公論ニ決スヘシ、

一官武一途庶民ニ至ル迄、各其志ヲ遂ケ、人心ヲシテ倦マザラシムルヲ欲ス、

一上下心ヲ一ツニシテ、盛ニ経綸ヲ行フベシ、

一智識ヲ世界ニ求メ、大ニ皇基ヲ振起スヘシ、

一徴士期限ヲ以テ賢才ニ譲ルヘシ、

右ノ条々公平簡易ニ基キ朕列侯庶民協心同力、唯我日本ヲ保全スルヲ要トシ盟ヲ立ル事如斯背ク所アル勿レ、

年号月日　　御諱

総裁名印

議定諸侯名印

一九三ノ九　公卿・諸侯奉答書四通

勅意宏遠誠ニ以テ感銘ニ不堪、今日ノ急務永世ノ基礎此他ニ出ヘカラス、臣等謹テ叡旨ヲ奉戴シ、死ヲ誓ヒ、黽勉従事、冀クハ以テ宸襟ヲ安シ奉ラン、

慶應四年三月十四日

有栖川大宰〔熾仁親王〕帥
三條大納言實美
岩倉右兵衛督具視
中山前大納言忠能
正親町三條前大納言實愛
有栖川中務卿幟仁
山階治部卿晃
仁和寺二品嘉彰
聖護院二品嘉言
華頂宮二品博経
近衛新前左大臣忠房
鷹司前右大臣輔熙

徳大寺大納言實則
中御門大納言経之
萬里小路中納言博房
長谷宰相信篤
松平宰相慶永
白川神祇伯資訓
蜂須賀少将茂韶〔阿州藩主〕
山内前少将豊信、前土州藩主〕容堂
伊達少将宗城〔前宇和島藩主〕
鍋島前中将直正〔前佐賀藩主〕
島津少将忠義〔長州藩世子〕
毛利少将廣封〔津和野藩主〕
亀井侍従茲監〔佐賀藩主〕
鍋島侍従直大〔芸州藩世子〕
淺野新少将茂勲〔熊本藩世子〕
細川侍従護久
正親町大納言實德
醍醐大納言〔忠順〕
中院大納言通富
橋本大納言實麗

久我大納言通久
三條西中納言季知
大原宰相重德
西園寺三位中将公望
堤右京大夫哲長
吉田侍従三位良義
東園中将基敬
正親町中将公董
東久世前少将〔通禧〕
植松少将雅言
橋本少将〔実榮〕
五條少納言為榮
壬生前修理権大夫基修
四條前侍従隆謌
鷲尾侍従隆聚
長谷美濃権介信成
平松甲斐権介時厚
石山右兵衛権佐基正
烏丸侍従光德
岩倉侍従具綱

萬里小路右少弁通房
坊城侍従俊章
澤前主水正〔宣嘉〕
愛宕大夫通旭
五辻大夫安仲
秋月右京亮種樹
戸田大和守忠至〔高徳藩主〕
長岡左京亮護美
伏見式部卿邦家
九條左大臣〔道孝〕
大炊御門右大臣家信
近衛前左大臣忠熙
徳大寺前右大臣〔公純〕
一條前右大臣〔実良〕
廣幡内大臣忠禮
久我前内大臣〔建通〕
綾小路按察使有長
難波大納言宗弘
庭田大納言重胤
日野前大納言資宗

飛鳥井前大納言雅典
柳原前大納言光愛
廣橋前大納言胤保
今城前大納言〔定章〕
裏松前大納言〔恭光〕
葉室前大納言長順
冷泉中納言〔為理〕
愛宕中納言通祐
山科右衛門督言成
前田中納言齊泰
清水谷中納言公正
松平中納言茂承
清閑寺中納言豊房
六條前中納言有容
野宮前中納言定功
八條前中納言隆祐
三室戸宰相陳光
西洞院宰相信堅
阿野宰相中将公誠
今城宰相中将定國

梅溪宰相中将通善
四辻宰相中将公賀
町尻前宰相量輔
竹屋前宰相光有
久世前宰相通熙
七條前宰相(信元)
藤波二位教忠
藤井二位(行学)
五辻二位高仲
萩原二位員光
梅園前右兵衛督(実好)
六角三位(能通)
豊岡前大蔵卿随資
倉橋大蔵卿泰聡
吉田三位(良熙)
清岡式部権大輔長熙
石井左衛門督(行光)
岩倉三位具慶
三室戸三位雄光
澤三位(為量)

西四辻三位(公恪)
慈光寺三位(家仲)
伏原三位(宣諭)
平松三位(時言)
石野三位基安
唐橋式部大輔(在光)
堀川三位親賀
山井三位氏暉
高松三位保實
池尻宮内卿胤房
土御門民部卿晴雄
錦織刑部卿久隆
藤井三位行道
北小路左京権大夫随光
交野左京大夫時萬
慈光寺大宰大弐有仲
舟橋侍従三位康賢
梅園三位實紀
堀川新三位康隆
清岡三位長説

高野三位保美
穂波三位〔経度〕
高倉三位〔永祐〕
樋口三位静康
倉橋三位泰顯
山科内蔵頭言縄
飛鳥井侍従三位雅望
甘露寺頭弁勝長
油小路中将隆晃
櫛笥中将隆部
中山前中将忠愛
滋野井中将實在
松木中将宗有
押小路遠江権介
武者小路少将公香
西大路少将〔隆意〕
三條西少将公允
石山中将基文
千種前少将有文
小倉中将輔季

難波中将宗禮
愛宕中将通致
町尻少将量衡
高丘兵部太輔紀季
高野少将保建
大炊御門少将師前
六角大蔵大輔博通
醍醐少将〔忠敬〕
石野治部大輔基佑
園中将基祥
裏辻前中将公愛
園池少将公静
高辻少納言修長
中園左馬権頭〔実知〕
清水谷侍従公考
滋野井侍従公壽
小倉侍従長季
庭田侍従重正
山本少将實政
六條少将有義

水無瀬少将(経家)
坊城頭弁俊政
松平中将慶倫(津山藩主)
大原前侍従俊實(重実)
富小路前中将大輔敬直
七條備中権介信祖
山井勘解由次官氏胤
梅溪侍従通治
竹内右馬頭惟賢(治則)
千種侍従有任
慈光寺大膳権大夫右仲
外山宮内大輔光輔
油小路侍従隆董
綾小路少将有良
唐橋大内記在綱
三室戸左兵衛佐和光
豊岡中務権大輔健資
松平少将定安(松江藩主)
伏原少納言宣足
有馬中将慶頼(久留米藩主)

風早大和権介公紀
中園近江権介實受
萩原右衛門佐員種
冷泉侍従為紀
東坊城大学頭任長
錦織中務大輔教久
堤右兵衛佐功長
押小路弾正少弼公亮
松木侍従宗順
藤波伊勢権守言忠
黒田少将長知(筑前藩世子)
藤堂少将高潔(津藩世子)
有馬遠江守道純(丸岡藩主)
青山左京大夫忠敏(篠山藩主)
勘解由小路権右中弁資生
勧修寺右衛門権佐經理
葉室左少弁長邦
竹屋左衛門佐光昭
西大路大夫隆脩
梅園大夫實静

四條大夫〔隆謂〕
西洞院大夫信愛
藪大夫實方
冷泉大夫為柔
清閑寺侍從盛房
廣橋侍從胤光
柳原侍從〔前光〕
勘解由小路出雲権介光尚
花園大夫實延
東園大夫基愛
梅小路讃岐権守定明
藤谷越前権介為遂
澤主水正宣種
大原左馬頭重朝
甘露寺大夫義長
中御門大夫經明
阿野侍從實允
植松右京権大夫雅徳
石井民部大夫行知
河鰭大夫〔実文〕
難波大夫宗明
清岡大膳大夫長延
裏松中務権少輔良光
桑原大夫輔長
武者小路大夫實世
橋本大夫實陳
岡崎修理権大夫〔国有〕
三室戸大夫治光
石野大夫基將
慈光寺大和権守和中
八條近江権守隆吉
岩倉大夫具定
植松大夫雅平
東久世大夫
唐橋大夫在正
日野西越後権介光善
松浦肥前守〔平戸藩主〕詮
京極佐渡守朗徹〔丸亀藩主〕
九鬼大隅守隆備〔綾部藩主〕
北條相摸守氏恭〔狭山藩主〕
櫛笥大夫隆義

錦小路丹波権介頼言
倉橋因幡権介泰清
毛利伊勢守高謙〔佐伯藩主〕
安藤飛騨守直裕〔紀伊田辺藩主〕
仙石讃岐守久利〔出石藩主〕
中川修理大夫久昭〔岡藩主〕
市橋下総守長和〔西大路藩主〕
牧野豊前守〔駿府、丹後田辺藩主〕
木下備中守利恭〔足守藩主〕
京極飛騨守高厚〔豊岡藩主〕
森對馬守俊滋〔三日月藩主〕
池田信濃守政詮〔岡山新田藩主〕
水野大炊頭忠幹〔新宮藩主〕
能見但馬守親貴〔松平、杵築藩主〕
京極下総守高典〔多度津藩主〕
松平佐渡守直巳〔広瀬藩主〕
伊東播磨守長辭〔岡田藩主〕
松平主計頭直哉〔母里藩主〕
朽木近江守為綱〔福知山藩主〕
池田相摸守徳定〔因州新田藩主〕

小出伊勢守英尚〔園部藩主〕
藤堂佐渡守高邦〔久居藩主〕
加藤遠江守泰秋〔大洲藩主〕
加藤能登守明實〔永口藩主〕
織田出雲守信親〔柏原藩主〕
土井淡路守利教〔刈屋藩主〕
松平圖書頭信正〔丹波亀山藩主〕
池田播津守徳澄〔因州新田藩主〕
北小路極臈大江俊昌
細川差次蔵人源常典
壬生禰蔵人小槻明麗
藤島新蔵人藤原助順
徳川元千代徳成〔尾州藩主〕
織田富久之助信敏〔天童藩主〕
森帯刀忠儀〔赤穂藩主〕
土方鉾千代雄永〔狭野藩主〕
青木源五郎重義〔麻田藩主〕
一柳弦次郎頼明〔小松藩主〕
堀三之丞親廣〔敦田藩主〕
井上河内守正直〔武松藩主〕

本庄宮内少輔道美（高富藩主）
相良遠江守頼基（人吉藩主）
板倉攝津守勝弘（庭瀬藩主）
一柳對馬守末徳（小野藩主）
本多平八郎忠直（岡崎藩主）
植村釗次郎家壷（高取藩主）
松平讃岐守頼聡（高松藩主）
松平大和守直克（前橋藩主）
前田飛驒守利鬯（大聖寺藩主）
松平左京大夫頼英（佐土原藩主）
島津淡路守忠寛（西条藩主）
稲葉美濃守正邦（淀藩主）
本多主膳正康禮（膳所藩主）
柳澤甲斐守保申（郡山藩主）
宗對馬守義達（対馬府中藩主）
土井能登守利恒（大野藩主）
稲葉右京亮久通（臼杵藩主）
遠山信濃守友禄（苗木藩主）
増山對馬守正修（長島藩主）
渡邊丹後守章綱（伯太藩主）

三宅備後守康保（田原藩主）
小笠原左衛門佐長守（越前勝山藩主）
久松大蔵少輔勝行（多古藩主）
高木主水正正坦（丹南藩主）
久松壹岐守定法（今治藩主）
毛利讃岐守元純（清末藩主）
細川玄蕃頭興貫（谷田部藩主）
丹羽長門守氏中（三草藩主）
稲垣若狭守太清（山上藩主）
大岡越前守忠敬（西大平藩主）
堀右京亮之美（横谷藩主）
岩城左京大夫隆邦（亀田藩主）
細川豊前守行真（宇土藩主）
松平主殿頭忠和（島原藩主）
土岐隼人正頼知（沼田藩主）
松平日向守直静（糸魚川藩主）
大河内右京亮輝照（高崎藩主）
酒井左京亮忠経（小浜藩主）
堀田出羽守正養（宮川藩主）
森川内膳正俊方（生実藩主）

明治元年(1868)

西尾隠岐守忠篤(横須賀藩主)
三浦玄蕃頭顯次(美作山藩主)
井伊右京亮直安(与板藩主)
瀧脇丹後守信敏(小島藩主)
土井大炊頭利與(古河藩主)
間部下総守詮道(鯖江藩主)
青山大膳亮幸宜(郡上藩主)
小笠原幸松丸貞孚(安志藩主)
酒井鉄次郎忠美(安房勝山藩主)
竹腰龍若正舊(今尾藩主)
安藤理三郎信勇(磐城平藩主)
井上宮内正順(高岡藩主)
松平太刀若康倫(津山藩主)
京極右近高陳(峰山藩主)
松平薫次郎直致(明石藩主)
柳澤伊織光邦(黒川藩主)
伊東彦松祐歸(鮫肥藩主)
土屋餘七麿擧直(土浦藩主)
松前敦千代隆廣(松前家分家)
吉川芳之助経健(岩国藩主)

鳥居右近忠文(壬生藩主)
織田修理信及(柳本藩主)
黒田甲斐守長徳(秋月藩主)
櫻井遠江守忠興(尼崎藩主)
永井日向守直介(高槻藩主)
四辻大夫公康
野宮大夫定穀
水野和泉守忠精(前山形藩主)
水野真次郎忠弘(山形藩主)
諏訪鋥次郎忠禮(高島藩主)
奥平美作守昌邁(中津藩主)
柳川少将鑑寛(立花、柳河藩主)
加納嘉元次郎久宜(一宮藩主)
永井肥前守尚服(加納藩主)
堀田相摸守正倫(佐倉藩主)
酒井右京大夫忠禄(後の若松藩主)
内藤備後守政擧(延岡藩主)
大給左衛門尉近説(府内藩主)
大給縫殿頭乗謨(竜岡藩主)
松平周防守康英(松井、川越藩主)

稲葉備後守正善（館山藩主）
小笠原佐渡守長國（唐津藩主）
立花出雲守種泰（下手渡藩主）
京極主膳正（峯山藩主）
稲垣平右衛門（長行、鳥羽藩主）
長門宰相敬親（長州藩主）
保科弾正忠正益（飯野藩主）
本庄弾正忠宗武（宮津藩主）
石川日向守成之（伊勢亀山藩主）
前田丹後守利豁（七日市藩主）
毛利淡路守元蕃（徳山藩主）
伊達若狭守（宗孝、伊予吉田藩主）
喜連川左馬頭（縄氏、喜連川藩主）
酒井直之助忠邦（姫路藩主）
彦根中将直憲（井伊、彦根藩主）
因幡中将（池田慶徳、因州藩主）
松山少将勝成（伊予松山藩主）
伊達侍従宗徳（宇和島藩主）
備前侍従章政（池田、備前藩主）
戸田丹波守光則（松本藩主）

秋元刑部大輔志朝（館林藩主）
秋月長門守種殷（高鍋藩主）
五島飛驒守盛徳（五島藩主）
本多河内守忠貫（神戸藩主）
九鬼長門守隆義（三田藩主）
松平能登守乗命（大給、岩村藩主）
太田備中守資美（掛川藩主）
建部内匠頭政世（林田藩主）
前田多慶若利嗣（加賀藩世子）
阿部元次郎正桓（福山藩主）
毛利宗五郎元懋（長府藩主）
伊達錦之助宗敬（伊予吉田藩世子）
内藤金一郎文成（挙母藩主）
山名主水助義濟（村岡藩主）
池田久米之助（徳潤、福本藩主）
平野内蔵助長裕（田原本藩主）
西四辻少将公業
岩倉勘解由長官具経

（按）誓約ニ就クノ法ハ、首ニ奉答文ヲ掲ケ、次ニ姓氏・称号ヲ註記シ、誓約ノ際本人其実名ヲ手記スルナリ、

当時京ニ在ラス、若クハ疾病事故アルモノ、及ヒ後ニ入勤セシモノハ、漸次誓ニ就カシメタリ、前項列名中実名ヲ欠クハ、蓋前記ノ事故ニ因スルモノナルヘシ、

勅意宏遠誠以テ感銘ニ不堪、今日ノ急務永世之基礎此他ニ出可ラス、臣等謹テ

叡旨ヲ奉戴シ、死ヲ誓ヒ黽勉従事、冀クハ以テ宸襟ヲ安シ奉ラン、

明治元年戊辰九月十三日

〔池田〕因幡中将慶徳

〔高遠藩主〕内藤若狭守頼直

明治元年戊辰九月十九日

山内中納言豊信〔前土州藩主〕

田沼玄蕃頭意尊〔相良藩主〕

内藤志摩守正誠〔岩村田藩主〕

岡部彌次郎長職〔岸和田藩主〕

山内薫豊誠〔土州新田藩主〕

本多修理忠鵬〔西端藩主〕

池田久米之助喜延〔徳潤、福本藩主〕

大澤右京大夫基壽〔堀江藩主〕

明治二年己巳正月廿五日

松平少将茂昭〔福井藩主〕

山内少将豊範〔土州藩主〕

大河内刑部大輔信古〔参河吉田藩主〕

關伊勢守長克〔新見藩主〕

牧野豊前守誠成〔丹後田辺藩主〕

戸田淡路守氏良〔大垣新田藩主〕

谷大膳亮衛滋〔山家藩主〕

本多肥前守忠明〔山崎藩主〕

脇坂淡路守安斐〔龍野藩主〕

織田攝津守長易〔芝村藩主〕

柳生但馬守俊益〔柳生藩主〕

片桐主膳正貞篤〔小泉藩主〕

淺野近江守長厚〔安芸吉田藩主〕

蒔田相摸守廣孝〔浅尾藩主〕

永井信濃守直哉〔櫛羅藩主〕

眞田信濃守幸民〔松代藩主〕

戸田采女正氏共〔大垣藩主〕

稲垣對馬守長敬〔鳥羽藩主〕

木下鐵次郎俊愿〔日出藩主〕

山崎壽丸治祗（成羽藩主）
鍋島欽八郎直虎（小城藩主）
松浦豊太郎近（マ）

二月十九日

前田宰相中将慶寧（加州藩主）
成瀬隼人正正肥（犬山藩主）
加藤出雲守泰令（新谷藩主）
小笠原近江守貞正（小倉新田藩主）

二月二十二日

橋本中将實梁

二月二十三日

澤右衛門権佐宣嘉

勅意宏遠誠以テ感銘ニ不堪、今日ノ急務永世之基礎此他ニ出可ラス、臣等謹テ叡旨ヲ奉戴シ、死ヲ誓ヒ黽勉従事、冀クハ以テ宸襟ヲ安シ奉ラン、

明治元年戊辰十一月朔日

一橋大納言茂榮
田安中納言慶頼
秋元但馬守禮朝（館林藩主）
水野出羽守忠敬（沼津藩主）
本多紀伊守正訥（田中藩主）
鳥居丹波守忠實（壬生藩主）
黒田筑後守直養（久留里藩主）
中山備中守信徴（松岡藩主）
大岡主膳正忠貫（岩槻藩主）
石川若狭守總管（下館藩主）
松平攝津守忠恕（小幡藩主）
大河内豊前守正質（大多喜藩主）
阿部駿河守正恒（佐貫藩主）
堀田攝津守正頌（佐野藩主）
水野肥前守忠順（鶴牧藩主）
大久保中務少輔教義（萩野山中藩主）
遠藤但馬守胤城（三上藩主）
米倉丹後守昌言（金沢藩主）
戸田長門守忠行（足利藩主）
米津伊勢守政敏（長瀞藩主）
新庄下野守直敬（麻生藩主）
内田主殿頭正學（小見川藩主）

有馬兵庫頭氏弘（吹上藩主）
本堂式部丞親久（志筑藩主）
松平雅楽頭頼策（常陸府中藩世子）
牧野金丸貞邦（笠間藩主）
大久保三九郎忠順（烏山藩主）
板倉百助勝敬（マ）
酒井知三忠彰（伊勢崎藩主）
大關泰次郎増勤（黒羽藩主）
堀恭之進直登（須坂藩主）
大田原鉞丸勝清（大田原藩主）
山口長次郎弘達（牛久藩主）
吉井鐵丸信謹（矢田藩主）
井上辰若丸正巳（下妻藩主）

同月五日

松平確堂齊民（前津山藩主）
松平二十二麿頼之（守山藩世子）
相馬因幡守季胤（中村藩主）

同月十九日

徳川三位中将家達（駿河府中藩主）
戸田土佐守忠友（宇都宮藩主）

松平主税頭頼位（宍戸藩主）
溝口誠之進直正（新発田藩主）
大久保岩丸忠良（小田原藩主）
秋田萬之助映季（三春藩主）
柳澤彰太郎徳忠（三日市藩主）

同年十二月五日

細川中将韶邦（熊本藩主）
徳川民部大輔昭武（水戸藩主）
松平伊賀守忠禮（上田藩主）
六郷兵庫頭政鑑（本庄藩主）
上杉駿河守勝道（米沢新田藩主）
生駒讃岐守親敬（矢島藩主）

勅意宏遠誠以テ感銘ニ不堪、今日ノ急務永世之基礎此他ニ出可ラス、臣等謹テ叡旨ヲ奉戴シ、死ヲ誓ヒ黽勉従事、冀クハ以テ宸襟ヲ安シ奉ラン、

明治二年己巳六月二十七日

榊原侍従政敬（高田藩知事）
戸澤中務大輔正實（羽前新庄藩知事）

前田侍従利同（富山藩知事）
上杉侍従茂憲（米沢藩知事）
鍋島甲斐守直紀（蓮池藩知事）
大村丹後守純熙（大村藩知事）
松平和泉守（乗秩、西尾藩知事）
細川若狭守（利永、肥後高瀬藩知事）
鍋島備中守直彬（鹿島藩知事）
安部攝津守信發（岡部藩知事）
久留島伊豫守通靖（森藩知事）
牧野伊勢守忠泰（三根山藩知事）
池田丹波守政禮（前岡山新田藩主）
佐竹壹岐守義理（前秋田新田藩主）
足利左馬頭聰氏（喜連川藩知事）
久世順吉廣業（関宿藩知事）
酒井徳之助忠禄（磐城平藩知事）
阿部基之助正功（棚倉藩知事）
酒井信三郎忠匡（松嶺藩知事）
丹羽五郎左衛門長裕（二本松藩知事）
南部彦太郎利恭（白石藩知事）
板倉敬之助勝達（重原藩知事）

同年七月十七日
本多兵庫助忠伸（泉藩知事）
松平豊熊信安（上ノ山藩知事）
牧野鋭橘忠毅（長岡藩知事）
田村鎮丸崇顯（二関藩知事）
南部雄麿信方（七戸藩知事）
内藤三郎信美（村上藩知事）
内藤英之助政憲（湯長谷藩知事）
水野禊之助勝寛（前飯山藩主）
本多竹僊助實（結城藩知事）
南部璟之丞榮信（信順子、後の八戸藩知事）
分部掃部助光謙（後の大溝藩知事）
堀貞次郎直弘（村松藩知事）

同月廿二日
弘前藩知事承昭（津軽）
津輕従五位承叙（後の黒石藩知事）

同年八月十三日
西尾藩知事乗佚（松平）

同年十月二日
久保田藩知事義堯（佐竹）

同年十一月十四日

高須藩〔松平〕知事義生
桑名藩〔松平〕知事定教

同年十二月十二日

高梁藩〔板倉〕知事勝弼
小諸藩〔牧野〕知事康濟

三年庚午八月十七日

豊津藩〔小笠原〕知事忠忱

四年辛未五月四日

忍藩〔松平〕知事忠敬

一九三ノ一〇

中下大夫奉答書三通

勅意宏遠誠以テ感銘ニ不堪、今日ノ急務永世之基礎此他ニ出可ラス、臣等謹テ叡旨ヲ奉戴シ、死ヲ誓ヒ黽勉従事、冀クハ以テ宸襟ヲ安シ奉ラン、

慶應四年戊辰三月

武田侍従崇信
足利木久麿
戸田中務氏貞
吉良源六郎義方
大友式部義敬
大澤采女助
有馬次郎廣泰
松平豊三郎康敏
溝口隼人助直景
近藤兵庫助用虎
今大路中務大輔正経
秋元一學國朝
服部中保固
戸田三郎四郎氏益
五井弘之助忠庸
溝口越前直壹
松平式部忠盈
米津小大夫田之
山口内匠直英
近藤力之助用諫
近藤登助利用
杉浦越前正尹
曽我千代松助尚

鍋島潁之助直影
大河内鋼之助信矼
坪内飛驒定益
秋山虎之助正永
久松榮之助忠武
花房外記正綏
西郷新太郎
近藤隼人國用
巨勢大隅利光
松平欽二郎忠厚
戸田熊之丞氏寛
本田日向助真
本田寛司忠陣
久永岩吉郎
西尾錦三郎教穀
高木義太郎正義
井上厚之助正義
大草三吉高朗
皆川鏈之進庸德
大河内監物正州

仁賀保孫九郎誠成
大久保式部教愛
柴田岩五郎勝誠
石川槙之助総銓
太田運八郎資道
新庄鋼五郎直與
岡野雄之丞
阿部志津摩正順
島津又吉久純
松平甲次郎
平岡隼人頼之
岡部加賀長直
内藤彭吉正從
仙石播磨政相
戸田松三郎忠篤
太田彦十郎
村瀬真次郎重義
水野春四郎忠善
間部内膳
宮城福之助千國

竹本左門正誠
仙石鐵次郎久寧
小笠原外記長則
大島雲四郎義行
馬場大助
戸田彦次郎氏氐
川勝睍之助廣成
落合鏞太郎道義
大久保彦太郎
堀順三郎直意
千本彌八郎
岡部鉦次郎忠利
山本小膳正直
松平圖書乗武
宮崎太郎泰道
遠藤新六郎常懐
諏訪左源太頼威
山口新五郎直昭
三好時之助長貞
渡邊鐘次郎保

同年十一月十四日

蒔田留十郎廣生
岡田六次郎善直
稲垣藤九郎長庚
奥山主税良匡
齊藤次郎左衛門利愛
清水次郎
稲垣左衛門通徳
別所孫四郎矩方
鈴本萬次郎重備
内藤備中忠一
永井吉之丞直尹
筧帯刀正行
坪内鉉次郎利昌
足利木久麿基永
大澤基治 彧
土岐峯次郎頼功
太田彦次郎資智
石川三平総参
遠山益之助景福

久永岩吉郎章武
岡野延五郎知則
間部篤志郎詮功
仁賀保佐五郎誠愨
堀　助次郎親序
清水次郎義方

勅意宏遠誠以テ感銘ニ不堪、今日ノ急務永世之基礎此他ニ出可ラス、臣等謹テ
叡旨ヲ奉戴シ、死ヲ誓ヒ黽勉従事、冀クハ以テ宸襟ヲ安シ奉ラン、
明治元年戊辰十一月十九日

今川侍従國廣
菅沼左近将監定長
宮原侍従義路
前田侍従長猷
上杉源四郎義順
織田織之助信真
長澤内記資寧
品川第二郎氏次
蘆野雄之助資愛
福原内匠資生
大田原帯刀清明
那須與一資興
新田満次郎俊純
戸田太郎光武
久世三四郎廣崇
酒井采女忠篤
大久保與七郎忠告
大久保兵庫教興
内藤駒次郎信重
藤堂秉之丞良連
水野式部忠和
本多駒之助正國
菅谷主税介政勝
松平采女信懿
石川又四郎正敬
松下加兵衛重光
有馬鐵三郎則忠
杉浦桂之進政芳

徳永主税昌大
日向小傳太正直
織田主水正治
井戸金平弘光
加藤彌次郎明吉
加藤右近明昭
諏訪萬吉郎頼超
安藤左京高美
永田勝左衛門直知
本多吉彌忠宏
三井萬三郎良忠
大久保銑三郎教孝
進佐渡守成孝
玉虫八左衛門維矩
諏訪甲斐守頼匡

同年十二月五日

生駒甸之助俊徳
渡邊虎之助濟
多賀靱負高智
河野庄左衛門通知

勅意宏遠誠以テ感銘ニ不堪、今日ノ急務永世之基礎此他ニ出可ラス、臣等謹テ叡旨ヲ奉戴シ、死ヲ誓ヒ黽勉従事、冀クハ以テ宸襟ヲ安シ奉ラン、

慶應四年六月

大澤侍従基壽
京極侍従高福
畠山侍従義勇
榊原越中守照求
最上駿河守義連
日野大學資訓
中條兵庫信汎
織田主計信任
山名主水助義濟
松平與次郎敬信
平野内蔵助長裕
戸川主馬助達敏
朽木主計助之綱
金森左京近明

五島銑之助盛明
伊東鑒之助祐敦
知久左衛門五郎頼謙
小笠原兵庫助長裕
朽木和泉守綱美
水野但馬守忠昌
高木伊勢守守庸
小笠原加賀守長穀
松井信濃守康功
能勢日向守頼富
一色丹後守直記
池田右近将監頼誠
小出大和守秀實
小出播磨守秀道
牧　相摸守義道
松平上総介忠敏
板倉小次郎勝運
内藤甚郎正義
横田権之助榮松
三枝政三郎守道

石川靱負総範
水野國之助貞尚
永井左門直剛
酒井富之助
花房助兵衛職居
上田鐐次郎義命
大給求馬乗恵
舟越柳之助
柴田七九郎
青山内記幸勧
武田兵庫信敬
一柳信次郎直明
小出主水有常
巨勢鑛之助利國
近藤利三郎政敏
青木九十郎直永
仙石右近久徴
甲斐庄帯刀正光
石河蔵人貞昭
堀田主計一儀

明治元年(1868)

藤懸左京永武
瀧川斧太郎利勇
蒔田鐵太郎廣徳
水谷主水勝昌
淺野友三郎長熙
根來榮三郎盛富
片桐鋲三郎貞明
大河内孫三郎
本多邦之輔成功
長谷川都五郎勝龍
木下辰太郎秀舜
淺野隼人長發
朽木勇太郎為綱
秋月幾三郎種事
松平主税勝寛
菅沼直七郎定基
酒井鐵三郎忠誠
池田鎗三郎
伊東常二郎
酒井織部忠尚

庄田八十之助安興
久留島修理通孝
市橋傳七郎長賢
森宗兵衛政徳
竹中万壽蔵重任
京極要之助高驥
小出織部秀粲
内藤甚十郎忠良
青木寅之助義権
松井伊織康功
永井大之丞直穀
谷蔵人衛久
桑山舎人元吉
曽我勝太郎純祐
土方兼三郎雄道
大島鐵太郎義和
多羅尾織之助光弼
松浦左京恒
谷鐐蔵衛通
島田新三郎直行

安部政太郎信德
戸川右近達利
本多岩次郎忠保
今井彦二郎好近
織田熊三郎信一
村越三十郎顯民
桑山修理正範
安部主殿信清
土方靱負久巳
丹羽小左衛門正親
渡邊鎮之丞厚
武島顓之助直方
片桐内蔵助信成
櫻井鏗之助忠正
安部關次郎信喜
小堀権十郎政安
小出助四郎秀庸
桑山録太郎重信
角南哲三郎忠愛
渡邊嘉一郎　鏡

明治元年戊辰九月十三日

中島與五郎隆成
松平太郎左衛門信汎
菊地主膳則忠
齊藤宮内三義
船越柳之助景略
戸川隼人安宅
青山三之助幸待
内藤弾正忠寛
關　左近盛令
八木十三郎補政
佐野房之助率行
松井主馬康弘
設樂帯刀貞鑑

明治元年戊辰九月十九日

横瀬筑前守貞固
新田信濃守貞時
六角主税
名代雄太郎廣宣
前田愿十郎長禮

岡田鋟之助善長
勝田鋼吉

(按)旧幕府旗下帰順之輩、本領安堵朝臣ニ被列、中大夫・下大夫被仰タル面々左ノ如シ、

加藤右近
間部内膳
藤堂秉之丞
有馬鐵三郎
兒島孫七郎
三井万三郎
加藤彌三郎
本多駒之助
進佐渡守
長崎熊之丞
松平采女
織田主水
本多吉彌
大久保銑三郎
井手鐵次郎
大久保兵庫

酒井采女
菅沼左近将監
座光寺盈太郎
勝田鋼吉
大久保與七郎
堀内嘉兵衛
岡田監之助
新田満次郎
今川侍従
品川侍従
前田侍従
六角侍従
品川愿十郎
横瀬侍従
長澤内記
大澤采女助
上杉源四郎
那須與一
戸田中務
織田織之助

大友式部
有馬次郎
由良侍従
武田侍従
吉良源太郎
松下嘉兵衛
原田熊太郎
戸田市之進
河野庄左衛門
諏訪万吉郎
井戸金平
安藤傳蔵
内藤駒次郎
曽我主水
玉虫八左衛門
水野式部
久良相摸守
布施十兵衛
安藤左京
菅谷主税之助

山崎主税助
池田弾正
畠山飛驒守
米良主膳
島津若狭
中井主水
大久保與七郎
福岡内匠

一九三ノ二（記）藩記ヲ載ス、

今十四日巳刻、依
召御衣冠・御巻纓・御差貫
御帯剣ニて
御出、
御仮立より
御上り、御扣席江御通被遊候、左候て別紙之通　御誓
祭式等被為済、且亦
御宸翰之御写並誓文等、徳大寺大納言（実則）様より越前宰相（松平慶永）
様江御渡被成、御同人様より諸侯様江、右御書付一通
ツヽ、御配渡相成、此御方様ニも　御直ニ御受納被遊候、

申半刻　御出口之通被遊
御帰殿候、
右之通今日私相勤申候間、此段申上候、以上、
辰三月十六日　新納嘉藤二
糺様

〔慶明雑録二十六にて校訂〕

【参照】

土方久元日記

三月十四日頗好天気
朝拝如例、五時半頃参殿之所、既ニ御参殿後ニ付、否引取候、昨夜モ夜半過ニ御帰館ニテ、今朝ハ又早々ヨリ御参ニ相成候由ナリ、今日ハ公卿方・諸大名共不残参殿ニテ、　主上モ御誓詞被為在、右一統ヘ拝見被仰付、一統ヲ誓詞御受申上、連名ニテ誓詞紙面被差上候事、

一九四　島津忠義誓約ノ趣旨ヲ述ヘ、誠実輔翼スヘキコトヲ諭示ス

明治元年三月十四日、忠義誓約ノ趣旨ヲ述ヘ、誠実輔翼スヘキコトヲ諭示ス、

一九四ノ一
今般以
宸翰、
御別紙之通不容易
御趣意被
仰出、忝モ
主上
神霊ニ被為誓、不肖之我等迄モ於　御前致誓約、無二
念
聖旨遵奉之赤誠ヲ表シ、御受奉申上候、熟惟ルニ
皇国之隆替由テ分ル、御新政之時ニ当リ、未曽有之御盛典被為挙、殊ニ天下億兆一人モ其処ヲ得サレハ、罪ヲ
聖体ニ
御反躬被為遊、艱難之先ニ立セ賜ヒ、
天職ヲ不被為奉、且又旧来之陋習ニ慣レ、尊重ノミヲ朝廷之事トナシ云々之
御趣意ヲ奉翫味候ニ、誠ニ貫千古候玉音ニテ、実ニ
御盛業可被為遂
御骨髄ト感銘至極奉存候、従来我等不肖之身ヲ以、
〔久光〕
中将公御鞅掌之

御志業ヲ奉戴シ、聊犬馬之労ヲ尽シ、如此大事之場ニ遭遇致シ候儀、固ヨリ其任ニアラス、昼夜忘寝食令苦慮候、

此上如何之分ヲ以、臣子之大義ヲ尽シ、前条之御趣意ニ可奉対答候哉、奉比較モ恐入候得共、我等朝廷ニ所以奉尽之道、即チ各我等ニ尽ス所以ト一轍之理ト存候間、一身一家之上ニ於テハ申迄モ無之、断然弊習ヲ脱シ、当世之事務ニ通達シ、朝廷非常之御盛典ニ基キ奉リ、上下戮力シテ奉安宸襟候様、一層其職掌ヲ奮励シ、補助之任ヲ尽度所存候間、各心得候儀ハ不差置極諫シ、今般大事御受之詮ヲ立シメ、家名ヲ不失様貫徹致シ呉度頼存候、此旨末々迄モ可申聞置候事、

右之通被　仰出候付、添書ヲ以御屋敷中一統江拝見被　仰付候、御国元江モ申越候事、

一九四ノニ（記）藩記ヲ載ス、

今般以宸翰、御別紙之通不容易御趣意被仰出、主上神霊ニ被為誓、於御前太守様被遊御誓約候付、尚此上一層御職掌被為尽、今般大事御請之詮被為立、〔ママ〕御家名不被為失様、〔島津広兼〕伊勢御前江被召御別紙之通御筆を以被仰出、殊ニ御出輦後、御留守中京師守護之儀、被為蒙勅命候ニ付ては、別て御大任之御事ニて此末一涯取締向等行届候様、左候て我々共初一統心附候儀は、不差置可奉言上旨、御直ニ承知仕、誠ニ以何共恐入難有次

第之御事ニ候、依之去ル廿日詰御役々并諸士迄拝見被仰付候、

御筆并別紙添書等相添、此段申越候条、

中将様被達

御聴、其元

拝見被仰付候儀共、何分も可被取計候、以上、

辰三月廿六日　　關山　糺

嶋津伊勢

嶋津圖書殿

桂　右衛門殿

川上龍衛殿

新納刑部殿

町田内膳殿

〔島津忠義家記・慶明雑録にて校訂〕

一九五　岩倉副総裁御親征日限ヲ小松帯刀外二名ヘ通牒ス

明治元年三月十四日、岩倉副総裁御親征日限治定ヲ、小松・大久保・吉井へ通牒セリ、

来廿一日卯ノ刻　御親征御発途石清水社

御参詣、同日八幡カ淀カ是ヨリ御取調御一泊、翌廿二日守口〔大阪府〕御一泊、廿三日大坂着御、廿四日・廿五日之中海軍叡覧、

右之通御治定明日被　仰出候テ、夫々御布告相成候得共、先為心得申入候、誠ニ過日来ハ彼是苦心千万察入候、草々不乙、

三月十四日　　具視

小松帯刀殿

大久保一蔵殿

吉井幸助殿

追テ太政官代御随従無之事、並遷都云々浮説断然疑惑ヲ解候様、

御沙汰書同時可被仰出候間、是又心得迄申入候、尚又右等ニ付、小子ニハ於〔太政官代〕禁中御用有之、官代ヘハ不参候間、乍序申入置候事、

鳥丸中立賣元施薬院拝借、転住致候、乍序申入候、

一九六　藩船関東回航ノ命ヲ奉承シタルコトヲ上申ス

明治元年三月十四日、藩船関東回航ノ命ヲ奉承シタルコトヲ申稟セリ、

蒸気船

右来ル十八日、兵庫港揚碇関東ヘ可差廻旨、且銃隊百人乗組駿州三島ヘ着船、江城之模様ヲ窺ヒ、横濱港ヘ乗廻シ、彼地警衛被仰付、左候テ大原侍従〔重徳〕殿等之差図ヲ受候様、御達之趣奉畏候、此段御請申上候、以上、

三月十四日　　島津少将〔忠義〕内　　新納嘉藤二

一九七　英国公使兇徒出現ノ禁戒ヲ請ヒ、禁令ヲ要地ニ掲示ス

明治元年三月十四日、初メ英国公使兇徒ノ横虐ニ遭ヒシヤ、法律ヲ設ケテ将来ヲ禁戒セント請フ、因テ禁令ヲ草シテ之ヲ示ス、是ニ至リ、公使其公布ヲ促ス、乃チ明日ヲ以テ之ヲ要地ニ掲示スルヲ報ス、

一九七ノ一　過日御約束相成居候外国人ヘ対シ、及乱妨候節所置振等之義、国中布告ハ勿論、辻札ヘ掛ケ、普ク我人民ニ知ラシメ候為、相認候別紙草稿、拙者共ヨリ差上候様、総裁ヨリ承候間、御請取可被成候、此段如斯御座候、以上、

辰三月四日

東久世前少将〔通禧〕
宇和島〔伊達宗城〕少将
肥前〔鍋島直大〕侍従

英国公使
サー・ハルリー・パークス・ケ・シ・ビ〔Sir Harry Parkes K. C. B.〕
閣下

外務省記

一九七ノ二　明治元年三月

英国公使返翰

千八百六十八年三月廿九日

去ル廿七日、貴書昨日落手セリ、其中ニ京都ニテ諸閣下ト余ト同意セシ如ク、外国人ヲ攻撃スルノ刑罰ニ付テ、御門政府ヨリ之達シ書之写シモ共ニ封入セリ、右達シ書之文面ヲ、兵庫・大坂ニテ公布スヘキヲ、其掛リ之役人ニ命シ給ラハ、余ニオイテ満足スヘシ、就テハ其港及市中ニテ、孰レノ地ニ右達シ書ヲ高札ニ公布セラレシヤヲ、コンシユル又ハ副コンシユルニ示シ給

フヘシ、且又長崎ニオイテモ同様ニ公布アラン事ヲ希フ、此書ニ謹テ余カ誠意ヲ陳ス、

英国公使
ハルリー・パークス

東久世前少将
宇和島少将
肥前侍従
閣下

外務省記

一九七ノ三
明治元年三月

英国公使代書翰

以書翰致啓上候、然ハ先般於京都、政府ヨリ私国公使ヘ御定約ニ相成候ニハ、以来外国人ヘ対シ、殺害並乱行等ニ可及ト存候モノヽタメ、早速新御法度御立被成候趣之処、既ニ十日余ニ相成候得共、此儀如何御座候哉ト、各国公使共日々相待候ニ付、尚英国公使為心得、右御法度之趣、何日頃御張出シニ相成候哉、右之段御尊簡ニテ私ヘ御通達被下候様、奉願候、以上、

三月十二日　　英国公使代　　ミツトホルト

伊達少将
東久世前少将
閣下

外務省記

一九七ノ四
明治元年三月

英国公使代ヘ返翰

昨日御書翰被下致披閲候、然ハ先般於京都、政府ヨリ貴国公使ヘ御定約ニ相成候ニハ、以来外国人ヘ対シ、殺害並乱行等ニ可及者之タメ、早々新法度被相立候趣之処、既ニ十日余ニモ相成候得共、此儀如何哉、各国公使為御心得、右法度何日頃張出ニ相成候哉、書翰ニテ御通達申候様、御紙面之趣致承知候、則五代才助(友厚)ヲ以及御答候間、御聞取可被下候、並昨日御返翰(蓋シ五日ニ認セシ)第一号ノ書ヲ指ス之趣モ致承知、三枝蓊(大和浄瑠寺の僧)罪状之義、早速長崎・神戸ヘモ張出シ之都合ニ取計申候、此段御報如是御座候、以上、

三月十三日　　伊達少将
東久世前少将

英国公使代
ミツトホルト
足下

外務省記

一九八　車駕発京ノ期日及ヒ海軍ヲ大坂海ニ閲スルヲ布告シ、親征ノ旨趣ヲ申諭ス

明治元年三月十五日、車駕発京ノ期及ヒ海軍ヲ大坂海ニ閲スルヲ布告シ、且親征ノ旨趣ヲ申諭セラル、
一九八ノ一　御親征日限御延引之処、来廿一日
御発途、石清水社
御参詣、同所　御一泊、廿二日守口　御一泊、廿三日
御着坂、其後海軍整備
叡覧可被為　在之旨、被
仰出候事、
三月十五日
但シ太政官代被移候儀ハ、先被止候事、
一九八ノ二　今般
王政御一新、万機従
朝廷被　仰出候ニ付ては、
皇国内遠邇とナク蒼生安堵致シ候様、日夜
御憂慮被為　在、断然
御親征　行幸被
仰出、尚海軍整備
天覧被　遊、関東平定之上は速ニ
還御被為　在、大ニ
列聖之　神霊ヲ被為奉安度、深重之
思食ニ付、上下心得違無之様、銘々可尽其分
御沙汰候事、
三月十五日
但シ億兆之君タル
天職ヲ被為　尽、
御親征
行幸被
仰出候処、委キ
御趣意ヲ不弁モノ共、只々
朝廷之御上ヲ奉按候故カ、或は一家之盛衰目前之
栄利ヲ相考候故カ、全体ノ御危急ヲシラス、種々

之浮説申唱江、彼是疑惑ヲ生シ候儀モ有之哉ニ相聞江、甚以如何之事ニ候条、末々ニ至迄急度安堵致シ、生業ヲ可営候事、

一九八ノ三 東山道官軍先鋒既ニ戦争ニ及ヒ、賊軍敗走ノ旨ニハ候得共、東海道亦如何共難計趣言上有之、旁以海車出帆被差急、

御出輦被遊候条、各其分相心得、出格勉励可有之旨御沙汰候事、

三月十五日

一九八ノ四 御親征

行幸、来廿一日被仰出候、仍早々申入候也、

三月十五日

【参照】

三條大納言ヨリ小松帯刀ニ送ル書

行在中太政官ヲ被移候義、中山正(忠能)三位卿ヘ談合候処、同論ニ有之、弥急々引移ニ決定候、就テハ彼是同局トモ面談仕度次第有之候間、明晩ヨリ騎馬ニテ上京致度候間、此段内々申入候、仍早々如此候、不備、

三月廿八日　三條大納言(実美)

小松帯刀殿

一九九　禁令五条ヲ海内ニ頒チ、旧幕府ノ掲榜ヲ撤ス

明治元年三月十五日、禁令五条ヲ定メテ、之ヲ海内ニ頒チ、旧幕府ノ掲榜ヲ撤ス、

諸国之高札是迄之分一切取除ケいたし、別紙之条々改て掲示被　仰付候、自然風雨之ため字章等塗滅候節は、速に調替可申事、

但定三札ハ永年掲示被　仰付候、覚札之儀ハ時々之御布令ニ付、追て取除ケ之

御沙汰可有之、尚御布令之儀有之候節ハ、覚札を以掲示可被　仰付候ニ付、速ニ相掲ケ、偏境ニ至るまて、

朝廷御沙汰筋之儀、拝承候様可被相心得候事、追て

王政御一新後掲示ニ相成候分は、定三札之後江当

分掲示致置可申事、

三月

第一札

定

一人たるもの五倫之道を正しくすへき事、

一鰥寡孤独廃疾のものを憫むべき事、

一人を殺し家を焼き財を盗む等之悪業あるまじく事、

慶應四年三月　　太政官

第二札

定

何事によらすよろしからさる事に大勢申合候を、とととうとなへ、ととうしてしいてねがひ事くわだつるをごうそといひ、あるひハ申合、居町・居村をたちのき候を、てうさんと申す、堅く御法度たり、若右類之儀これあらば、早々其筋の役所へ申出べし、御ほふび下さるべく事、

慶應四年三月　　太政官

第三札

定

きりしたん邪宗門之儀ハ、堅く御制禁たり、若不審なるもの有之ハ、其筋の役所へ申出べし、御ほふひ下さるべく事、

慶應四年三月　　太政官

第四札

覚

今般

王政御一新ニ付、

朝廷之御条理ヲ追ヒ、外国御交際之儀被

仰出、諸事於

朝廷直チニ御取扱被為成、万国之公法ヲ以、条約御履行

被為　在候ニ付テハ、全国之人民

叡旨ヲ奉戴シ、心得違無之様被

仰付候、自今以後猥リニ外国人ヲ殺害シ、或ハ不心得

之所業等イタシ候モノハ、

朝命ニ悖リ、御国難ヲ醸成シ候而已ナラス、一旦御交際

被

仰出候各国ニ対シ、

皇国之御威信モ不相立次第、甚以不届至極之儀ニ付、其

罪之軽重ニ随ヒ、士列之モノト雖モ、削士籍至当之典

刑ニ被処候条、銘々奉

朝命、猥リニ暴行之所業無之様被
仰出候事、
三月　　太政官

第五札
覚

王政御一新ニ付テハ、速ニ天下御平定、万民安堵ニ至リ、
諸民其所ヲ得候様
御煩慮被為　在候ニ付、此折柄天下浮浪之者有之候様ニ
テハ、不相済候、自然今日之形勢ヲ窺ヒ、猥リニ士民ト
モ本国ヲ脱走イタシ候儀堅ク被差留候、万一脱国之者
有之不埒之所業イタシ候節ハ、主宰之者落度タルヘク
候、尤此御時節ニ付、無上下
皇国之御為、又ハ主家之為筋等存込建言イタシ候者ハ、
言路ヲ開キ公正之心ヲ以其旨趣ヲ尽サセ、依願太政官
代ヘモ可申出被　仰出候事、
但今後総テ士奉公人ハ不及申、農商奉公人ニ至ルマ
テ相抱候節ハ、出処篤ト相糺シ可申、自然脱走之
者相抱ヘ、不埒出来御厄害ニ立至リ候節ハ、其主
人之落度タルヘク候事、
三月　　太政官

二〇〇　藩士税所長蔵大坂裁判所御用ヲ命セラル

明治元年三月十五日、藩士税所長蔵大坂裁判所御用ヲ命セラル、

薩州
税所長蔵(篤)

大坂裁判所御用被
仰付候間、早々下坂可致候事、
留守居届書ヲ載ス、
御書付一通
但税所長蔵大坂裁判所御用被仰付候儀、
御用掛
谷森内舎人(善臣)

右ハ今日太政官代内国局ヨリ、御用有之罷出候処、右
内舎人ヲ以被相達候付、当分大坂ヘ罷居候段申述候処、
大坂ニテ相達候様承知候間、可申上旨申述置候、
右之通今日私共差支、御留守居付役勤永山左内(盛輝)相勤申
候間、御書付相添此段申上候、以上、
辰三月十五日　　新納嘉藤二(立夫)
(関山金生)
糺様

二〇一　蓑田傳兵衛ヨリ小松帯刀ヘ書翰

一筆拝啓仕候、於両御地　御両御殿様益御機嫌克被遊御座、恐悦如何モ（奉存候カ）　中将様御事モ御病気日ニ増御快方ニテ、此節便御医師共ヨリ申上通リ御座候、最早御快気ニテ、少々ツヽ被遊御歩行、夫故御気力モ御増相成候御根体ニ、私共ニモ奉伺、実以難有事共難尽筆紙奉存候、不日ニ御湯治共被遊候ハ、猶更御宜鋪、速ニ被遊御全快候半ト奉恐察申候、　尊公様ニモ遠海無御滞、御機嫌克御着京ノ由、公慶至極奉存候、御着則参与被為蒙候所、外国方御掛御繁務ニテ、土藩異人暴挙一条（堺市仏人殺傷事件）御応接ノ儀モ、不容易大事件ニテ、既ニ　皇国ノ乱階ヲ生候機会立到様ノ御難題御弁理ノ由、終ニ結局ニ罷成、無事御鎮撫ノ由、誠以御忠誠ノ御所置、乍恐奉感佩候、本田杢兵衛儀モ到着、則桂家（桂右衛門）ヘ罷出、夫ヨリ二丸ノ様参殿、委細事件承届候間、早々御前ヘ奉申上候処、別テ被遊御安堵候御事ニ御座候、定テ種々御繁務奉深察候、　御親征ニモ被仰出、太守様御事モ浪華迄御随従被遊候由承知仕、無比類官軍ノ兵気倍層仕候半ト奉存候、爰許当分ハ御静謐、新納家・伊地知ニモ下着御変革一条モ被仰出、実以今度ノ機会不御過時節御同慶奉存候、冗官悉御省相成、色々府下俗論紛擾ノ由御座候得共、不足取事ニテ断然御所置可観望事共御賢察被遊可被下候、

一先便被仰付候岩元一条ハ、成行ヲ以奉伺候処、ヲノツカラ此節従　朝廷被　仰出候大赦、一統ヘ可被仰付候付、其節一緒ニ御取扱被成可然、其段桂君モ御達申候様、御沙汰承知仕申候、一通執計置申候、左様思食可被下候、右旁先ハ御用向、且御着京ノ御祝儀旁為可申上、奉呈愚書候、猶奉得後鴻候、誠惶謹言、

三月十五日　　蓑田傳兵衛

帯刀様

拝呈高閣下

再陳、先便ヨリ尊書被成下、難有奉存候、御礼申上候、

〔稿本表紙〕

明治元年
三　月　忠義公史料　三

〔稿本の三月十六日からの分で補正〕

二〇二　島津忠義御用ノ廉ヲ以、参内スヘキ旨達セラル

十六日、忠義御用ノ廉ヲ以テ、明十七日午刻参内スヘキ旨達セラル、ソノ達左ノ如シ、

出格御用之儀有之、明十七日午刻無遅滞御参可被成候也、

三月十六日　林和清間御当番
正親町大納言(実徳)殿ヨリ
島津少将殿
追テ前田中納言(斉泰)・蜂須賀少将(茂韶)同様被仰出候間、為心得申入候也、

二〇三　行幸ノ行列及ヒ道筋次第心得方等回達ス

コノ日、来ル廿一日行幸ノ御行列及ヒ御道筋次第心得方等ヲ回達セラル、ソノ条款左ノ如シ、

二〇三ノ一　回達

以書取奉伺候条々

一法螺之次第

一声　御催
二声　供奉揃
三声　御出輦

御道中

一声　御止
三声　御進

右之通夫々御達被置候様仕度候事、

一宮・堂上方当暁御参内之節、御供廻り之内、御一方ニ両人ツヽ、程御便宜之所ニ被差置、其余は直様御馬とも

後院前御馬繋ニ、御称号札張置申候間、其辺ニ屯之積、
但右被残置候御供両人程は、二声法螺御合図次第建
禮門外へ被相廻候様、御銘々様より屹度御申付御
座候様仕度候事、
一諸侯御供廻り前同断、
但前同断銃隊之儀は、先陣堺町御門外、後陣日御門
前ニ屯、其辺より御主人御随従之積、
一建禮門内御独歩之積、
但雨儀之節、御傘持一人御随従之積、
一後院前御馬繋之辺にて、宮方御始都て御乗馬之事、
但馬沓は元より為打被置候積、
一内侍所御列堂上方並ニ諸司共御仮殿拾帖之間辺、其外
御間内御便宜之所、諸侯並供廻り共伶人楽屋駕輿丁常
勤番所、堂上方並諸司供方等日華門南廻廊ニ屯之積、
一総て地下之輩・僮僕、堺町御門内より院参町辺ニ屯之
積、其辺迄独歩之積、
一当暁先列諸司承明門東西廻廊、後列諸司月華門廻廊等
江参集、尤供廻り共二声合図次第、供廻リハ何レも堺
町御門内より院参町辺江繰出之事、
一雑色堺町御門外より御列ニ差加へ、御泊並大坂着御等、
便宜之方ニて、進退為仕候積、
一六門（六門番ヲ云）建禮門外より御列ニ差加へ、御泊並大坂着御
等便宜之方ニて、進退為仕候積、
一雑具は御遠路之儀ニ付、御銘々御跡ニ被付候様仕度候
事、
一御小休・御中食等之節、御列其侭被立置、御主人様御
支度済次第、御加列御合図之法螺三声吹立候ハヽ、御
進之事、
但御従者之向は、都て列立候侭支度之事、
一御泊之節、御本陣以前ニて御下馬小人数被残置、其余
御馬雑具ニ至迄、御旅宿江直様被引取候様仕度、無左
候ては、御本陣前御混雑と奉存候、
但御銘々御旅宿之儀は、御泊り宿々ニて、夫々宿役
人之者出張御案内可致候積、
一御泊より　御出輦之節は、
御所　御出輦之通御合図之法螺一声御催、二声御列立、
三声御進ニ相成候様仕度候事、
但御本陣御用被為在候御方は、御同所御便宜之所ニ
御出方ニ僮僕一両人程被差置、御用済次第御加列
之事、

一翌日御小休・御中食等前日之通、
一大坂　着御之節、淀城　着御之節之通、
一御列奉行差図違背無之様、夫々御下知置可被下候様仕度候事、
　但鞭ニ白木錦・藍御紋付ノ印シ相付、並提燈ニは紅白石畳之印シ相携へ申候、
一御道筋之外、御用通行之砌、御固所無滞通行之儀、夫々江御達置可被下候様仕度候事、
　但書同断、
　右之通奉伺候、以上、

御列奉行
修理職

辰三月

二〇三ノ二
一御道筋本街道之事、
一廿一日御昼休、城南宮八幡御参詣、同所御一泊、翌日御昼休枚方、守口御一泊、廿三日御着坂ノ事、
一銘々人数書、烏丸家へ可差出事、
一御道筋宿駕輿等取候儀、一切不相成候事、
一同上継立人足申付候儀、是又不相成候事、
一小幡背旗為持候事不相成候様申入候得共、誠之為目印為持不苦之旨、更御沙汰候事、
　寸法
　絹一幅長一尺五寸
　竿長四尺五寸程
　別紙二通入見参候、早々御廻覧可返給候也、
　三月十六日　（右大弁、坊城）俊政

二〇四　島津忠義親征行幸中、八幡一泊ノ警衛ヲ命セラル

十七日、御親征行幸中、来ル廿一日八幡御一泊ニ付、近辺ノ警衛ヲ命セラル、ソノ達書左ノ如シ、
（島津忠義）薩摩少将江
来廿一日御親征行幸八幡御一泊ニ付、近辺御警衛可致旨御沙汰候事、
　三月十七日
　但場所之儀ハ、奉行坊城頭弁江可伺出候事、
右辰三月十七日、軍防局掛非蔵人吉田遠江ヨリ、右御書附被相渡、左候テ是迄被仰渡置候御警衛人数之内ニテ宜敷、別ニ人数被差出ニ不及トノ趣、遠武橘二承知

之段、新納嘉藤二ヨリ伊勢様宛之首尾書有之、

二〇五　島津忠義親征行幸中京都守護ノ命ヲ拝ス

コノ日、忠義衣冠ニテ、重臣随従ノ上参内シ、加賀中納言・阿波少将ト共ニ、御親征中京都守護ノ命ヲ拝ス、次イテ准后御殿ニ伺候シ、コノ旨ヲ啓シテ退出ス、尚京師守護ハ極メテ重要ノ件ニ付、重ネテ家老伊勢ニモ加賀・阿波ノ重役ト共ニ同様ノ旨ヲ拝シ、又藩庁ニモ報知セリ、ソノ状情左ノ如シ、

二〇五ノ一　嶋津少将

今般

御親征、来ル廿一日

御発輦被

仰出候処、京師ハ

列聖山陵之所在、殊ニ桂宮准后御方ニも被為　在、御

大節之御義ハ勿論候、然ルニ

御親征ニ付ては、種々浮説を唱え人情不穏趣、自然不良之賊党等其虚ニ乗し、良民を悩し候様之事有之候ては、実以不容易次第、彼是深被為有

宸憂、御留主中京師守護之義、其藩并前田〔斉泰〕中納言・蜂須賀〔茂韶〕少将等三藩江御委任被遊候間、屹度取締諸民安堵可致候、殊其父子儀は積年之忠勤、別て深頼

思召、留守之任をも被命候義ニ付、

叡慮之御旨厚相心得、精々尽力可有之旨

御沙汰候事、

三月

二〇五ノ二　御沙汰書一通

但御親征

御留守中御取締被為蒙

仰候御儀、

右は昨十七日午刻、御重役

御召連　御参

内被　仰出、　御衣冠ニて

御上り、加賀中納言様・阿波少将様ニも御同様御扣之

処、　御学問所江被為

召、　御直ニ御承知被遊候、同所御廊下末於御扣席、

御菓子　御頂戴、岩倉前中将様御取合御別紙之趣ニて、

御留守中御依頼被為　在候様被仰達相済、御扣席江

御帰座、夫より加州様・阿州様御同道
准后御殿江　御上り、御執次近藤右兵衛尉江御面会、
御留守中御警衛被為蒙
仰候段被　仰置、
御帰殿被遊候、　御頂戴之御菓子は、非蔵人松室伊賀
より引渡申候間、差上申候、
一御手前様ニは、加州様・阿州様重役御一緒ニ被召、岩
倉前中将様外ニ御両卿御揃、
御留守中御警衛之儀、
太守様江被仰達置候得共、重役之儀も　御別紙之趣厚
奉汲受、御警衛猶亦行届候様可仕、加州様上ノ京、
此御方中ノ京、阿州様下ノ京請持ニ可相心得、就ては
人情不穏浮説等も有之折柄ニ候間、三藩申談、無懈怠
鎮定方可取計旨、　御別紙之御趣意を以、細々被仰達
候旨承知仕候、
右之通昨日私御供仕候間、　御別紙相添此段申上候、
以上、
辰三月十八日　　内田仲之助
伊勢様
追て御本文通被為蒙
仰候ニ付ては、
中将様御承知被遊候上、弁事参与職東園中将様(基敬)・坊
城侍従様(俊政)迄御飛札を以、御礼被仰上方ニも可有御座
哉、御使番江も吟味被仰付度、且又方限之儀、二條
通北側より上を上ノ京、同所南側より松原通北側迄
を中ノ京、同所南側より下を下ノ京と相唱候由ニ御
座候、御請持場巡邏御取締之儀は、おのつから本宮
役所江吟味可被御渡儀と奉存候、加州様・阿州様御
留守居申談、裁判所江は御案内且市中達方等之儀、
掛合仕置候間、此段も旁申上候、以上、
二〇五ノ三
太守様御事、去ル十七日午刻、重役御召連　御参
内被　仰出候ニ付、　御衣冠ニて伊勢被召列御上り、
加賀中納言様・阿波少将様ニも御同様御扣之処、　御
学問所江被為
召、　御直ニ御別紙之通被遊御承知候、左候て同所御
廊下末於御扣席御菓子　御頂戴、岩倉前中将様御取合
御別紙之趣ニて、
御留守中御依頼被為
在候様被仰達、相済御扣席江

御帰座、夫より加州様・阿州様御同道、
准后御殿江　御上り、御執次近藤右兵衛尉江　御面会、
御留守中御警衛被為蒙
仰候段被　仰置、
御帰殿被遊候、
一伊勢儀、加州様・阿州様重役一緒ニ被召、岩倉前中将
様外ニ御両卿御揃、
御留守中御警衛之儀、
太守様江被　仰達置候得共、重臣之儀も御別紙之趣厚
奉汲受、御警衛猶亦行届候様可仕、加州様上ノ京、
此御方中ノ京、阿州様下ノ京請持ニ可相心得、就ては
人情不穏浮説等も有之折柄ニ候間、三藩申談、無懈怠
鎮定方可取計旨、御別紙之通御趣意を以、細々被仰達
候、
一右之趣
中将様被遊　御承知候上、弁事参与職東園中将様・坊
城侍従様迄御飛札を以、御礼可被　仰上哉之旨、御留
守居申出候付、御右筆頭等江被致吟味、其通之御飛札
被差越度、左候ハヽ日積之上被差出候様取扱可致候、
右申越候条
中将様被達　御聴、　大奥其外様江被申上、其許申渡
之儀は、何分も可被取計候、　御沙汰書并御留守居首
尾書相添差越候、以上、
辰三月廿六日

嶋津主殿〔久籌〕
嶋津伊勢〔広兼〕

嶋津圖書〔久治〕殿
桂右衛門〔久武〕殿
川上龍衛〔久能〕殿
新納刑部〔久脩〕殿
町田内膳〔久憲〕殿

〔慶明雑録二十六にて校訂〕

二〇六　島津忠義親征行幸中、石清水一泊ノ警衛ヲ免セラル

十八日、御親征行幸中、石清水御一泊ノ警衛ヲ免ゼラル、
ソノ文左ノ如シ、

薩摩少将

御親征
行幸、石清水御一泊警衛被

免候事、

三月十八日

右辰三月十九日、太政官代江罷出候様切紙到来、永山左内(盛輝)罷出候処、非蔵人鴨脚下総を以、被成御渡候段、内田仲之助より伊勢殿江首尾書有之、

二〇七　大総督府参謀西郷隆盛徳川慶喜謝罪ノ条款ヲ奏シ、ソノ大項ヲ許サル

十九日、大総督府参謀西郷隆盛京都ニ抵リ、徳川慶喜謝罪ノ条款ヲ奏ス、朝議慶喜ノ死一等ヲ減シ、条款ノ大項ヲ許可スルニ決ス、

二〇七ノ一　西四辻公業私記ニ云、十七日勝・大久保ヨリ呈上ノ箇条書、昨夜西郷吉之助持参ニテ上京、大御評議相願、御決議相伺可申事、

二〇七ノ二　嵯峨實愛手記ニ云、二十日西郷吉之助上京、慶喜並會・桑等生活候間之事、右議論先活路ヲ被与候事決候、

二〇七ノ三　春嶽私記ニ云、一昨廿日、西郷吉之助関東ヨリ上京之旨趣、御承知モ可被為在哉ト、土老侯ヘ御内調之処、秘中之秘故御対面御物語被成度、関東ニ於テ薩兵暴発ハ決テ無之候間、此儀ハ御安心被成候様御返簡有之、私云、此秘中秘説トハ、西郷吉之助於江戸表、大久保・勝両氏ト応接有之、両氏ヨリ御謹慎之実跡ハ函嶺以東ヘ入兵有之候テモ、毫モ抗拒之景況無之、又数隻之軍艦アレトモ、一所ニ碇泊シテ動カサル等之事ヲ説得シテ、恰好之談ニ相成、上京之処、於此表ハ何処迄モ押詰候様トノ指揮ニテ、西郷モ困窮不平之意味有之由也、小諸侯帰邑之儀ヲ、弁事神山ヨリ徳大寺殿ヘ申達候処、卿被申候ハ、今暫ニテ関東之御所置モ可及落着候ヘハ、夫迄之処ハ見合セ候様、大久保・勝外ニ何山トカ申人格別之尽力ニテ、謹慎之実行顕ハレタレハ、無程結局ニ可相成ト、軽易ニ物語有之由、

二〇七ノ四　又云、四月十二日夕、容堂君御来話ニテ、公ヘノ御密話如左、

去月十日、木戸準一郎(孝允)於圓山今谷、長・薩二侯並阿侯・肥之長岡左京父子ト、各藩ノ有志トヲ会合シテ、盛宴ヲ張タルハ、其深意アリシ事ナリ、畢竟薩論徳川公ヲ

忌憚スル事甚敷、大逆無道ニ座シテ、罪死ニ抵ラン事ヲ庶幾セリ、準一郎其不当ナルヲ患苦シ、救済之一策ヲ施サント、先ツ諸侯有志ヲ会シテ、和親ヲ結ヒ、再会ニ及ンテ此一件ヲ議セントノ心算ナリシニ、何ソ図ラン、西郷去月十九日、俄ニ上京シテ、東都之御処分ヲ謀ルニ逢フ、三條・岩倉並顧問之輩参朝シテ其議ニ及フ、此時吉之助徳川公大逆トイヘ共、死一等ヲ宥ムヘキ欤之語気アル故、準一郎其機ニ投シ大議論ヲ発シ、寛典ヲ弁明シ十分之尽力ニテ、ケ条書等モ出来セリ、徳川公免死之幸福ハ、準一之功(郎脱カ)多ニ居ルトソ、

二〇七ノ五 橋本實梁手記ニ云、二十七日早朝西郷吉之助来陣、勝安房以下三人ヨリ歎願ノ儀ニ付、先日大総督ヨリ京師ヘ被相伺候処、御沙汰ノ箇条書持参、右ニ付東城進入ノ儀、大総督余ヘ被命、就テハ副督甲府出張中ニ付、早々彼地進発、余出先ヘ会合ノ儀、被仰遣候、先鎌倉ヘ着陣、会合ノ上江城進入ノ事可然吉之助申述、精一郎神奈川・横濱ノ内ニ可居候間、猶其趣可申聞申付、

二〇七ノ六 輒誌ニ云、二十七日、参謀西郷吉之助帰参、朝議御一決、別紙(条目書ヲ指ス)ノ通被仰出候、為勅使進入橋本少将ヘ被命候ニ付、余早々於何地モ会合可及談合、尤橋本ヘハ余参着マテ、為勅使進入是非可見合、従大総督府被命置候旨ナリ、

二〇七ノ七 附録春嶽私記ニ云、西郷吉之助、曽テ英国公使ニ会セシニ、公使徳川公之所置ヲ問フ故、西郷答ルニ大逆無道罪死ニ当ルヲ以テス、公使云、万国之公法ニヨレハ、一国之政柄ヲ執リタル者ハ、罪スルニ死ヲ以テセス、況ヤ徳川公是マテ天下之政権ヲ執リタル而已ナラス、神祖以来数百年太平ヲ致ス之旧業アリ、徳川公ヲシテ死ニ抵ラシムルハ公法ニアラス、新政ニ此挙アラハ、英・佛合同徳川氏ヲ援ケテ新政府ヲ伐ツヘシト、西郷大ニ驚愕シテ宥死ノ念ヲ起セシトソ、

二〇八　行幸出輦ニ付、在京諸侯ニ参内天機伺ヲ命セラル

コノ日、在京諸侯ニ、明後廿一日行幸出輦ニ付、明日参内天機伺候ノ旨ヲ達セラル、ソノ文左ノ如シ、

在京
諸侯

明後廿一日、行幸御出輦ニ付、為可奉伺天機、明廿日参朝被仰付候事、
但名代上京之向ハ、禁中於仮建可伺事、

二〇九　野州梁田駅ノ戦功ニ対シ感状及ヒ賞詞ヲ賜ワル

コノ日、去ル九日、野州梁田駅ノ戦官軍ノ勝利ニ対シ、現地ノ情実ヲ聞召サレ、満足ニ思召ス旨ノ感状ヲ下賜セラレタリ、尚東山道先鋒総督参謀ヨリモ、亦同様ノ賞詞アリタリ、ソノ感状及賞詞左ノ如シ、

二〇九ノ一

薩州

右野州梁田駅ニヲヒテ賊徒屯集、砲銃ヲ以テ要地ニ拠リ官軍ヲ相抗シ候処、遂勇戦忽及掃撃、殊ニ初戦之儀、三軍之気鋒ヲモ興シ、現地之情実達叡聞、　御満足ニ被思召候、猶此上擢精忠、速ニ賊巣令平定、可奉安宸襟旨被　仰出候段、戦士江可相達候様　御沙汰候事、

三月十九日

二〇九ノ二

斥候隊
薩州藩
川村與十郎（純義）
其他兵士面々

去ル三月九日、於野州梁田駅一戦、賊徒及敗走候趣、征東初度之戦、官軍御勝利ト相成候事、諸士尽力之所致、　御感被　思召候、尚此上精々可励忠勤旨御沙汰候条、一同可被相心得候事、

東山道先鋒総督
参謀（慶応出軍戦状にて校訂）

三月十五日

二一〇　封土拾万石ノ返献ニ及ハサル旨ノ指令ヲ受ク

二十日、去月十二日、封土拾万石ヲ献シテ、軍政ヲ宏張センコトヲ請ヒタルニ対シ、藩ノ軍費モ多端ノ時ナルニヨリ、返献ニ及ハサル旨指令アリタリ、ソノ文左ノ如シ、

指令

今般　　薩摩少将
王政御一新未曽有之御時節ニ就ては、将来其功屹度相立候様、逮及遠見之献言尤ニ
思食候、将即今御創業之折柄、理財之道被為立兼候儀奉思察、領地之内十万石為御用返献致度趣、神妙之至深々御満足ニ被
思食候、併当今於其藩も軍費多端之折柄、先不及返献候、追て
御沙汰可相待候事、

三月

右御書付辰三月廿日、内国事務御掛より
禁中御仮建江罷出候様と之切紙、御留守居江到来、
附役赤井直之進罷出候処、亀之杉戸際ニて徳大寺大納言様より、被成御渡候旨、新納嘉藤二より紙様江之首尾書相添略す、

二一一　車駕京師ヲ発ス

二十一日、車駕京師ヲ発ス、副総裁三條實美、輔弼中山忠能、議定細川護久・淺野茂勲・毛利廣封・池田章政等コレニ従ヒ、副総裁岩倉具視・輔弼正親町三條實愛・議定島津忠義・蜂須賀茂韶・前田齊泰等京師ヲ留守ス、忠義奉命ノ次第ハ、載セテ十七日ニ在リ、

〔番号二〇四・二〇五に掲載あり、省略カ〕

二一二　西郷隆盛書ヲ大久保利通ニ贈リテ、出兵ヲ促ス

コノ日、西郷隆盛書ヲ大久保利通ニ贈リテ、出兵ヲ促セリ、其ノ書状左ノ如シ、

先刻難有頂戴仕候、御厚礼申上候、陳ハ木戸より之書面、得と拝誦仕候処、至極尤之論ニて、御入城ニ相成候上、會津追討ニ引分ニ候て、人数を増し候義、当然之事なから、只今戦陣中ニ早ク其節之用意ニ、軍勢を繰出され候御手筈出来候ハヽ、無此上上策欤と奉存候、第一賊胆を挫き候而已ならす、
朝廷之確乎たる処之御居り相立候廉相顕れ、御油断不被為在、次第〳〵ニ勢ひ相増候処有之、大ニ力強ク相成候半と奉存候間、何卒先之機会を御待なく、御繰出

し相成候様御座候ハヽ、大総督辺之御力を被増候而已ならす、官軍大ニ勢ひを得候半と奉存候間、宜敷御尽力可被下候、此旨乍忽卒御報迄、荒々如此御座候、頓首、

三月廿一日

大久保一蔵様　　西郷吉之助

要詞

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

二二三　車駕守口駅ニ次ス

二十二日、車駕守口駅ニ次ス、

行在所日誌ニ云、廿二日卯ノ半刻　御発輦、戌ノ半刻守口ヘ　着御、東本願寺掛所　第一泊、

〔復古記にて補正〕

二二四　本藩姫路城ノ監守ヲ命セラレ、姫路藩臣ヨリ誓書及ヒ歎願書ヲ差出ス

コノ日、兵庫裁判所総督東久世通禧姫路ヲ巡按シ、本藩ノ軍監中村源吾ヲシテ、牙城ヲ監守セシメ、諸藩ノ守兵ヲ撤セリ、是ヨリ先、通禧ハ姫路ノ兼知ヲ命セラレ、備前藩ノ管守ヲ解カレシヲ以テ、コノ行アリシナリ、時ニ姫路藩ノ臣笹沼織部等、誓書及歎願書ヲ岩下方平（按スルニ方平此時通禧ニ随行セリ）ニ出ス、其ノ文左ノ如シ、

二二四ノ一　誓書

東久世前少将様、当所御取締被為蒙仰候ニ付テハ、益朝命遵奉仕、万事　少将様之　御差図相受、聊違背不仕候心得ニ御座候、此段宜御執達被成下候様奉願候、誠恐謹言、

慶應四戊辰三月廿二日

笹沼織衛印
兒島源太郎印
荒木瀬兵衛印
荘野慈父左衛門印
長澤小大夫印
本城監物印
籠谷主水印
柴田大之丞印
折井彌五右衛門印
本多驛之助印
松井孫三郎印

久松數馬印
大河内帯刀印
高須隼人印

岩下佐次右衛門殿

二一四ノ二
歎願書

謹慎中別テ奉恐入候得共、心事難黙止伏テ奉歎願候、当正月大坂表変動之節主人忠惇義、実ニ不得已之場合トハ乍申、反逆党与ノ筋ニ相運、遂ニ蒙天譴、御討伐ノ師御差向ニ相成候処、家中ノ者共元ヨリ奉拒王師候所存ハ毛頭無御座、且主人ヨリ兼テ之申付モ有之、旁以速ニ開城降伏、砲器不残御預申上、一統田野ヘ引退相慎罷在候処、四條御総督様御下向ニ付、情実奉歎願候処、御垂憐之上御聞届被成下、一統城内ヘ令帰宿、一涯奮励練磨、為天朝於抽忠勤顕実効ハ、可被処寛典旨御沙汰ニ付、何レモ深奉感佩、弥謹慎罷在候義ニ御座候、此後如何様蒙厳譴候共、無是非次第ニハ御座候得共、何卒闔藩ノ情実御仁察被成下、天威御一霽家名取続領民安堵被成下、尚主人忠惇身上御仁慈ヲ以御寛典之御処置被成下置度、泣血奉懇願候、誠惶謹言、

慶應四戊辰年三月廿二日

重臣連名前ニ同ジ

岩下佐次右衛門殿

【参照】

岡山藩記、姫路征討始末ニ云、三月廿二日、当藩総轄之者御本陣ヘ出頭可致御達ニ付、罷出候処、左之件々御口達、

一本城、薩藩中村源吾ヘ可引渡事、
一倉庫並総テ締所、兵庫裁判所ノ封印ニ相成候間、同人ヘ相渡可申事、
一本城門・櫻門・繪圖門ハ薩藩兵隊ヘ相渡、其余総テ姫路藩ヘ引渡可申事、
一人数勝手次第引揚可申事、
並附属小藩等ヘハ、夫々御達相成候事、
同廿四日、東久世殿姫路御発途被成候、
同日、薩藩中村源吾ヘ、諸城門・倉庫並大小砲附属器械ニ至迄、夫々引渡申候、
同廿五日、兵隊引揚申候、
同日、高砂之廩米引渡申候、
同廿六日、一同引揚申候、

通禧書翰

第一

一昨廿四日寅刻、従姫路表帰坂致候、謝罪・御請書等別紙弐通指出候、

第二

一備前家老両人固場所巡見ノ上、総テ引払、姫路人数ヲ以相固メサセ候、

附属小藩各引払、龍野別段引払候様相達候事、

第三

一本城為固、薩州人数十五人、軍監中村源吾残居候事、

第四

一姫路隠居閑亭御召上之処、依所労同苗直之助上京、大津迄到着致候事、

第五

一謝罪被聞召候上ハ、入京御免相成度候事、

第六

一為勤王出兵歎願、未御沙汰無之候得共、通禧以取計、兵庫表迄別紙之通人数差出候間、入京御免相応之御用被仰付度事、

一為御用窺、兵庫表へ別紙之人数指出為置候事、

一備前家老取調候国中寺社勤王之請書、並朱印地取調指上候事、

一領分百姓、町人歎願書弐通指上候事、

一倉庫目六切封改置候事、

一大小銃帳面弐冊指上候事、

右箇条四・五・六等御返答相窺度、兵庫裁判所判事岩下佐次右衛門へ御沙汰被成下度、近々出帆横濱へ出張仕候間、早々御取調相願存候事、

三月廿五日　　通禧

内国事務

全権御中

二一五　副総裁岩倉具視自書ヲ以諸局ノ督輔以下ヲ督励ス

コノ日、副総裁岩倉具視自書ヲ以テ、諸局ノ督輔以下ヲ督励ス、ソノ書左ノ如シ、

臣不肖之身ヲ以テ、妄ニ大任ヲ辱シメ、敢テ其任ニ当リ候儀ニハ無之候得共、何分当今内外御多難、加之朝敵未タ亡ヒス、殊ニ御親征之盛挙ニ被為及候事、実ニ

至重至大之事件何共恐懼之次第、素ヨリ鞠躬尽力一死ヲ以テ、御奉公之外無之候、然ルニ総裁宮ハ御東下、三條・中山両卿等モ亦供奉ニ候上ハ、太政官之責ハ不可免之場合ニ立至リ、只管苦心ニ不堪候段、出願ニ及候処、正親町三條・徳大寺両卿総裁局ヘ出仕、万機示談候様被仰出、先以畏存候、抑今般親シク天地ニ被為誓、公卿列藩ヘモ御沙汰之通リ、屹度御一新之御実蹟相立不申候ハテハ不被為済御儀、尤臣子之分ニ於テハ、断然奉戴シ尽ササルコトヲ不得、旁以諸局ノ督輔ハ勿論、判事・権官ニ至迄益励精諸事被申出度候、仮令局外之事タリ共、御為筋之儀ハ御存分ニ御討論可有之ハ勿論之事ニ候間、偏ニ公義ヲ御勘弁、聊無御隔意申承リ度存候、仍テ此段申入候也、

三月二十二日　　具視

二一六　車駕大坂ニ至リ本願寺ヲ行在所ト為シ、柵門ヲ警衛セシム

二十三日、車駕大坂ニ至リ、本願寺ヲ以テ行在所ト為シ、興福寺ヲシテ、ソノ柵門ヲ警衛セシム、翌日ニ至リ巽ノ柵門ハ、我カ藩之ヲ引受ケタリ、ソノ記録左ノ如シ、

行在所日誌

廿三日辰ノ刻御発輦、午刻御着坂、八軒屋ヨリ再ヒ葱華輦ニ召替サセラレ、未ノ刻西本願寺行在所ヘ万事御都合能御着輦被為在、衆庶万才ヲ唱フ、

興福寺記

三月廿二日夜、大坂府鎮台醍醐大納言(忠順)殿ヨリ至急御招ニテ、御守衛ノ諸藩未タ到着無之ニ付、行在所八ケ所ノ柵門・興福寺警衛被仰付之旨御達有之、微力之義御断申上候処、諸藩到着次第為引替候間、夫迄之処相勤候様御達シニ付、御請申上守衛相詰候事、

一廿四日、巽ノ柵門ハ薩藩ヘ、乾之柵門ハ肥後藩ヘ引渡シ候事、

一廿七日、六ケ所之柵門、久留米藩ヘ引渡シ候事、

一行在中御唐櫃非常守衛被仰付、人数不残大坂表ニ詰切候事、

二一七　申ネテ大赦ノ節目ヲ勅諭ス

コノ日、申ネテ大赦ノ節目ヲ勅諭シ、且嘉永六年癸丑以来

邦憲ニ触レ、刑辟ニ陥リシモ、其情忠憤ニ出デシ者ハ、子孫ヲ収録シ、幽閉セラレ、若クハ落魄セル者ニハ恩貸ノ典ヲ挙行セシム、

今般朝敵ヲ除ノ外、一切大赦ト被仰出候ハ、大綱領ニテ節目ニ亘候テハ、逆罪且人ヲ殺シ、其情罪難被差免者ハ別段ノ事ニテ、其余罪ノ軽重ヲ不分、免科ノ所置可致候、且又癸丑以来時体ニ係リ、皇国御為ト相考、謬テ矯激ノ所行ニ及、邦憲ニ触枉死不祭ノ鬼ト相成候者モ不少哉ニ相聞、右ノ内実々忠奮ニ出、可憐情状有之者ハ、跡式再興等ノ儀、其程ニ応シ取扱、寃魂ヲ慰候様可致、将又当時存生ニテ、禁錮又ハ落魄致シ居候者モ有之候ハヽ、是又前文ノ趣ヲ以、寛宥ノ可及措置御沙汰候事、

二一八　竹田街道東洞院近辺ノ巡邏ヲ高松藩ニ命ス

コノ日、大坂行幸中竹田街道東洞院近辺ノ巡邏ヲ、高松藩ニ命スル旨ヲ達セラル、ソノ令達及留守居ノ届書左ノ如シ、

薩州へ

大坂行幸御留守中、竹田街道東洞院近辺巡邏之儀、高松(松平、高松藩主)頼聡家来へ被仰付候間、其旨相心得候様被仰出候事、

三月廿三日

御書附一通

但行幸御留守中、高松家来へ巡邏被仰付候儀ニ付、

非蔵人

松尾豊前

右ハ、今日軍防局ヨリ御用之儀有之候間、太政官代へ罷出候趣、切紙到来罷出候処、右豊前ヲ以被成御渡候ニ付、可申上旨申述置候、

右之通、今日私共差支、御留守居附役赤井直之進相勤申候間、御書付相添此段申上候、以上、

辰三月廿三日　　新納嘉藤二

糺様

二一九　島津忠義夫人戦亡者ヲ弔慰ス

コノ日、忠義夫人(暐姫)藩内士民ニ、太守報国尽瘁ノ意中、諸士奉公ノ誠意ヲ察シ、自ラ進ンテ勤倹省略ニ従ヒ、又厚

ク戦亡者ヲ弔慰スヘキノ意ヲ諭示ス、ソノ文左ノ如シ、

二二九ノ一

一此度京都御一条御伺被遊、恐入被思召上、太守様之御心中モ御察シ上被遊、イカヤウニモ御力ヲ御添被遊度思召候得共、御女子様ノ御事ニテ、左様之御儀モ御出来兼被遊処カラ、セメテノ御事御身ノ廻リ其外万事、至極御ソマツニ被遊、被召遣候者モ御ケン少可被遊御沙汰ニ候、

一此度諸士一同御両殿様思召ノサマヲ汲受、伏見表騒動之節、皆々身命ヲワスレ御奉公致候処ヨリ、御センカウ御スミヤカニ被為立候御事、難有被思召上候、右付テハ戦死ヲ致候人々、フカクフヒンニ被思召、セメテハ御水御茶ニテモ御手向被下度被思召、姓名ヲ相認差上候様、御沙汰被為在候事、

三月　　華岡

　　島岡

〔朱〕「右之通暐姫様御沙汰被為　在、奉恐入御事候条、一統可被奉承知候、左候テ戦死人数姓名書差上置候付、思召之程謹テ難有可奉承知旨、父子兄弟等江申渡、地頭・領主ニモ可申渡候、

三月　　右衛門

三月廿三日

御本文之通御役人中江致通達、左候テ地頭・領主ニモ申渡候、

取次　　細瀧権八」

二二九ノ二　御側役江

此度京都表変動之次第、暐姫様被遊御承知、太守様御心中之程御恐察、如何様ニモ御力ヲ御添被遊度思召候得共、御女子様之御事ニモ被為在候付、御身辺之儀、万事至極御麁末ニ被遊、御召仕之女中御減少、且諸士一統御両殿様思召ヲ奉汲請、致戦亡候面々、深不便ニ被思召上候、厚御沙汰之趣、私儀御前江被召出、御別紙之通被仰出、御家老中江可申達旨細々承知仕候事、

三月　　御取次　伊木七郎右衛門

島津忠義家記

二二〇　議定・参与及ヒ親王・公卿・諸侯行在所ニ朝ス

二十四日、大坂御着輦ニ付、天機伺ヲ為スヘキヲ達セラレ、扈従ノ議定・参与及ヒ親王・公卿・諸侯ハ、行在所ニ朝ス、天皇延見シテ之ヲ慰労セラル、又在京ノ人々ハ廿七日禁中仮建ニ伺候シ、大宮御所ヘモ同様御機嫌伺ヲナサシム、ソノ関係文書左ノ如シ、

一昨廿三日未刻、大坂表ヘ御機嫌能着御被為在候段申来候、兼テ御布告之通可奉伺天機候得共、未天気伺不相済者ハ、来ル廿七日於禁中仮建可申上、大宮御所ヘハ同様御機嫌伺可申上候事、

但在国之面々ハ為名代、重臣ヲ以同日可伺天機事、

三月

行在所日誌

三月廿四日議定・参与其外供奉ノ宮・公卿・諸侯、為伺天機参上ス、玉座近ク被為召、一同大儀ニ被思食候旨、親ク綸言アリ、

二二一　海軍天覧ノ為天保山ヘ行幸ノ旨ヲ達ス

コノ日、来ル廿六日、海軍閲覧ノ為、天保山(大阪市港区)ニ行幸ノ旨ヲ達セラル、ソノ文左ノ如シ、

来ル廿六日、海軍為　天覧、天保山ヘ　行幸可被為在旨被　仰出候事、

但雨天ノ節ハ御順延ノ事、

二二二　島津忠義病ニヨリ蝦夷開拓諮問ノ参内ヲ辞ス

コノ日、明廿五日蝦夷開拓ノ諮問アルニ仍リ、参内スヘキヲ達セラル、忠義病アリテ辞ス、ソノ文左ノ如シ、

一明二十五日午ノ刻、蝦夷開拓之義ニ付、議事有之候間、巳ノ半刻太政官代ヘ御参可有之候也、

三月廿四日　弁事

島津少将殿

二二三　島津忠義参内ノ時ノ下馬所ノ指令ヲ伺ハシム

コノ日、忠義乗輿代騎馬ニテ参内ノ時、下馬所ノ指令ヲ

伺ハシム、ソノ伺及ヒ指令左ノ如シ、

一修理大夫参内之節、乗輿ノ代騎馬ニテ罷出候儀モ可有御座候間、唐御門外毎下乗之場所ニテ、不苦儀ニ御座候哉、此段奉伺候、以上、

島津修理大夫内

三月廿四日　新納嘉藤二

此節非常ニ付、九門内乗込、唐御門外ニテ下馬ノ事、

但尋常之節ハ、九門外ニテ下馬可致候事、

指令

其儀ニ不及候事、

一同断ニ付、方限外之節ハ、参朝御機嫌伺ニ及不申候哉、

指令

雖為方限外、遠近且火勢ノ時宜ニヨルヘク候事、

右ハ今般就御親征、御留守中上方限御警衛奉蒙仰候付テハ、心得罷在度御座候間、御差図被成下候様可申上旨申付候間、此段奉伺候、以上、

島津修理大夫内

三月　内田仲之助

二二四　内田政風ヲシテ、警衛区域内外出火ノ際心得方ノ指令ヲ受ケシム

コノ日、又内田政風ヲシテ、警衛区域内外出火ノ際、心得方ノ指令ヲ受ケシム、ソノ伺及ヒ指令左ノ如シ、

一兼テ被仰渡置候方限内出火等ノ節、修理大夫参朝御警衛、且大宮御所ヘモ罷上、御機嫌伺可申上哉、

指令

御定所出火之節ハ伺天気、大宮御所ヘモ伺御機嫌可申上候事、

一同断ニ付、早速鎮火等罷成候ハヽ、其儀ニ及不申候哉、

二二五　参与顧問小松清廉・後藤元燁ヲシテ、外国事務局判事ヲ兼ネシム

コノ日、参与顧問小松清廉・後藤元燁ヲシテ、外国事務局判事ヲ兼ネシム、

各通

小松帯刀

後藤象二郎

外国事務局判事兼勤被仰付候事、

慶應四年辰三月

総裁朱印

二三六　東国ノ形勢ニヨリテハ鸞輿東征セントス

二十五日、東国ノ形勢ニヨリテハ、鸞輿東征セントス、因リテ令シテ諸軍ヲ勦メシム、ソノ文左ノ如シ、

今般已ニ　御親征御出輦被遊、海軍　御覧ノ上、関東時機ニヨリ、直様　輦輿ヲ東海道ヘ可被為向　思召候、右ハ先般於所々賊徒官軍ニ抗シ、尽ク撃破ニ及フト雖、未余党彼是屯在致シ居候哉ニモ相聞候ニ付、偏ニ万民艱苦ノ程被歎思召候条、大総督指揮ノ上ハ、速ニ遂忠戦、四海平定奉安　宸襟候様　御沙汰候事、

二三七　副総裁岩倉具視議定・参与ヲ会シテ再ヒ蝦夷地開拓ノ事宜三条ヲ策問ス

コノ日、副総裁岩倉具視、議定・参与ヲ会シテ、再ヒ蝦夷地開拓ノ事宜三条ヲ策問ス、忠義病ノ為ニ参会セズ、井上石見ノ建言書左ノ如シ、

二三七ノ一　策問

第一条　箱館裁判所被取建候事、

第二条　同所総督・副総督・参謀人撰之事、

第三条　蝦夷名目被改、南北二道被立置テハ如何、

二三七ノ二　〔井上長秋答論〕

万事本源ニ不着眼ハ、其末起ルコトカタシ、国家富強ノ本ハ、四民各職業ヲ尽スニアリ、就中農ハ国ノ本ナルユエニ、其本業ヲ尽サシムルノ道立サレハ、国土ノ疲弊補ヒカタシ、農ヲ起スノ本ハ、地ヲ拓キ人民ヲ増殖スルニアリ、人民ヲ増殖スルノ本ハ、事ヲ簡易ニシテ、夫役ヲ省略シ、器械ヲ以テ民力ヲ扶クルニアリ、西洋諸国モ蒸気器械ヲ発明シ、民力国中ニ余リ有カ故ニ、自然拓地育民ノ業ヲ起シ、或ハ万里ノ外ニ数千人ヲ出シ、開港交易ノ大利ヲ計ルニ至ル、我国近年内外多事、昼夜東西ノ夫役、幾千万ト云コトヲ知ラス、是等ノ民力ヲ補フノ道立サルトキハ、田野ノ荒廃ニ及フハ又自然ノ理也、蝦夷開拓ノコトハ北陸ノ大事、勿論不可忽ノ要務ナレバ、其手ヲ下スノ道サマ〳〵緩急ノ術アルベケレドモ、畢竟又内地ノ民ヲ移サヾレハ、成

功遂ケ難キ事ナレハ、第一内国旧地ノ荒廃セサル様、夫役ヲ省略シ、器械ヲ製造シテ人民ヲ生スルノ策、今日ノ急務ト奉存候事、

井上石見（長秋、藤井良節弟）

二三七ノ三

井上石見建言一通

蝦夷開拓ノ事ニ付、器械ヲ製造シテ人力ヲ省略スルノ策、急務ト奉存候旨言上仕候処、其策如何ト更ニ御下問ヲ蒙リ、不顧愚計兼テ書取ノ侭奉呈上候、

蒸気器械ハ、俄ニ製シ難ケレハ、先ツ水車ノ一事ヲ以テ考フルニ、中等ノ車ニテモ六十臼ヲ舂ク、故ニ一臼一人ノ労ニ代レハ、六十人ニ当ルノ理ナリ、我国民ノ大数凡四千万人トスルトキハ、一日二十万石ヲ食ス（一人白米五合ノ割）、一人ニテ五斗ツヽ舂クニシテ、一日四十万人ニ及フ、試ニ右ノ四十万人ニ雇銭ヲ与フルト見ルトキハ、幾多ノ失費ナルヤ、其外酒造等ニ用ユル処ノ米穀ヲ加フルトキハ、弥莫大ノ事ナルヘシ、国財ノ本ヲ計ルニハ遠ク、爰ニ眼ヲ着サレハ、天下ノ富強ハ為シ得サルコトハ必然ナリ、仮令ハ井中ニ梯子ヲ下シ、水ヲ汲シムル家アラン、誰カ是ヲ見テ愚トシ、何故ニ井戸車ヲ用ヒサルヤト怪ミ問ハサルコトヲ得ンヤ、世人カヽル一家ノ小費ハ悟リ易ク、顕然タル国土ノ洪費ヲ厭ハサルハ、歎カハシキコトナレハ、人皆一家ノ雇夫ヲ見ル如ク、一国ノ人民ヲ愛惜シ、追々器械ヲ以テ成シ得ル限リヲ極メ、無益ニ人力ヲ費サヽル様、遠大ニ思慮ヲ尽サハ、国家富強ヲナスコト、又何ソ難カランヤ、

右愚意ノ概略ニ御座候、然ル処、是迄一家生業ノ為ニ、水車ヲ営ンコトナト願フ者有之候テモ、地所等ノ故障ニ事寄セ、賄賂ヲ得サレハ許サヽル者有之哉ニ承リ候、右等ノ者ハ、天下ノ大益茲ニ出ルコトヲ知ラサルハ勿論ニ候得共、以来右ニ不限、願意ノ筋ハ、公私軽重御勘弁ノ上、国家有益ノ事ハ速ニ御差許ニ相成度、尤下ノ願ヲ不被為待、官府ノ御計ニテ十分御手ヲ被着候ハヽ、此上モナキ御事ト奉存候、

謹上敬白、

井上石見

二三七ノ四

右建言ノ如ク、人工ヲ省キ国財ヲ殖スルノ策、於　朝廷速ニ御採用可被為在候間、是ノミニ不限、総テ　皇基ヲ固クスル経綸ノ策ハ、　御施行可被遊　思食ニ候

条、上下一同深ク相心得、願意ノ筋有之者ハ、無懸念
可申上様被　仰出候事、
四月

〔表紙〕

忠義公史料　明治元年三月　五

〔扉に、表紙の文字の外に市来四郎編の記載あり〕

目録

一車駕天保山ニ幸シテ海軍ヲ閲ス三月二十六日
　記　御発輦御行列次第
　　御出輦相図之次第
　　揃場順次
　　達書七通・軍防局回達一章
　　坊城頭弁雑掌回達一章
　　弁事局回達一章
　　島津淡路守ヨリ毛利讃岐守ヘ達書
一忠義五ケ条御誓文ノ誓約ニ対シ奉答シ、戮力輔翼スヘキコトヲ訓示ス三月二十六日
　記　別紙訓諭書
　　藩老副書
一藩老御親征行幸ノ件ヲ藩地ニ報ス三月二十六日
　記　報告書
一藩老近日来下附ノ公布諸件ヲ藩地ニ報ス三月二十六日
　記　報知書七件
　　報知書十件
一忠義大坂着御御伺トシテ参内セラル三月二十七日
　記　藩記
一天草島警備藩兵糧食処分ノ件ヲ稟申ス三月二十七日
　記　伺書
一在京諸侯ニ令シテ鹵簿ノ数ヲ録上セシム三月二十八日
　記　弁事役所達書
一諸標記等禁裏ノ字ヲ冒シ、及ヒ菊章ヲ濫用スルヲ禁ス三月二十八日
　記　達書
一貢士ハ藩主・朝官奉職スルモノハ勝手タルヘキヲ令ス

三月廿九日

記　御沙汰書

一本藩兵山陰道鎮撫使警衛ヲ免セラル三月二十九日

記　御沙汰書

留守居届書

一本藩鹵簿ノ数ヲ録上ス三月晦日

記　上申書

参照　加賀藩上申書

仙臺藩上申書

○附録日附未詳ノ分姑ク此ニ収ム

一元徳川領肥前松浦郡内ノ炭礦支配ヲ、本藩ニ命セラレタキコトヲ稟申ス三月

一松平ノ苗字ヲ止メ、島津ト復称スル旨ヲ藩内ニ達ス三月

一藩庁封土十万石返献願稟申ノ旨ヲ藩内ニ達ス三月

一藩庁人別調書式改定ヲ達ス三月

一藩不急ノ役場ヲ廃シ、繁用ヲ省キ先例古格ニ不泥簡易誠実ニ取扱方ヲ達ス三月

一藩内御借地譲受渡願・大奥女中宿下リ・諸郷役進退等ノ手続ヲ達ス

一藩地ニ諸人惣髪乱髪勝手タルベキ記事三月

一土方久元日記

一大久保利通日記

一強盗ノ類ニ付キ上之京町年寄中ヘ達

一土方久元日記

一大坂行幸供奉衣体ニ付キ回達

一土方久元日記

一大久保利通日記

一土方久元日記

一大坂行幸供奉ニ付キ達

一土方久元日記

一大久保利通日記

一土方久元日記

一英国公使襲撃ノ兇徒ヲ処刑ス

一平田宗高日記

一土方久元日記

一外国事務局書翰

一英国公使襲撃事件ニ関スル中外新聞記事

一横濱新聞抄訳堺事件

一開港延引ノ報告

一横濱新聞紙ヘラルドノ訳

二三八　車駕天保山ニ幸シテ海軍ヲ閲ス

明治元年三月二十六日、車駕天保山ニ幸シテ、海軍ヲ閲ス、

（記）二三八ノ一
三月二十六日、天保山ニ於テ海軍為叡覧、卯ノ半刻御発輦、御行列ノ次第ハ左之通、

先陣
加藤遠江守　兵隊
池田侍従　兵隊
柳澤甲斐守　兵隊
細川右京大夫　兵隊

先陣一番
不参加藤遠江守
若王子
聖護院宮
庭田大納言　松本隠岐
不参池田侍従

先陣二番
勘ケ由小路弁
勧修寺権佐　松尾因幡

先陣三番
柳澤甲斐守
四辻宰相中将
櫛笥中将
細川右京大夫　細川三河

薩州兵隊　百人

中軍
備前兵隊　百人

中軍左
中山大納言馬
富小路中務大輔
壬生修理権大夫
坊城侍従

御板輿
輿丁　十人
雨皮　二人
脚立　二人

中軍右
中山前中将
大原左馬頭
裏松中務権少輔
三條大納言馬

御医三人
松室丹波
土山淡路守
御児両人御先廻り

御膳番一人
御茶弁当　二人
御水桶　二人
雨皮　二人
御台　二人

御厨子所　上下四人
同御用長持　二棹　夫四人

肥後兵隊　百人
長州兵隊　百人

中務卿宮　石山三位
正親町大納言　千種前少将
後陣　石野大夫
一番　坊城頭弁　後陣　長門少将　後陣　北小路極薦　後陣　不参藤堂　安藝
二番　森對馬守　三番　不参藤堂大學頭　兵隊　津和野兵隊
津和野侍従　羽倉播磨　松室下総　長門
松室右見　森

御道筋ハ御本門ヨリ心齋橋通リ、四軒町、大豆葉町、七郎右衛門町、西國橋、玉水町、常安橋通リ、玉江橋ヨリ堂島濱筋、塩津橋ヨリ安治川筋、安治川橋通御ニテ、富島二丁目濱ヨリ御乗船被為　遊、兵隊ノ前軍・中軍ハ左ノ川岸、後軍ハ右ノ川岸ヨリ隊列ヲ整ヘ、正々堂々、

御座船ノ左右ニ随従行進シ、以テ護衛セリ、午ノ刻天保山ヘ

御着船也、

○兼テ用意アリシ各藩ノ軍艦・佛国軍艦、天保山ヨリ距離一里ニシテ碇泊セリ、

叡覧所ヨリ青旗ヲ振リ、

着御ヲ合図ス、是ニ応シテ海軍総督聖護院宮、同輔翼若王子、同参謀庭田大納言(重胤)乗込レシ肥前軍艦電流丸ヨリ祝砲ヲ発ス、佛国軍艦ヨリモ亦発砲シ、

皇帝陛下ヲ祝シ奉ル、右相済ミ、電流丸ヨリ答礼ノ応砲ヲ発シ、諸艦ヲ誘導シ、兵庫ノ方ヘ向テ航スルコト三十分時ニシテ転回シ、天保山ヘ帰艦碇泊ス、八ツ時過

御乗船、御道筋御行列初ノ如シ、七ツ時

還御在セラル、

○此日供奉諸侯ノ供連ハ、侍二人、口附二人、下部一人ナリ、尤船中ハ従僕一人ナリ、残リ供ハ陸行、御行列ノ後ニ従ヘリ、

○前・中・後ノ兵隊人数ハ、中藩以上百人、小藩ハ一小隊ナリ、

○御行列ヲ拝セントテ、市中近在ノ衆庶群集スルコト夥シ、

二三八ノ二
御出輦相図之次第

一番貝ニテ又供之者、各其揃場ニ屯集可致事、

但

草履取一人御門内御玄関前へ集候事、

二番貝ニテ又供整列可致事、

但

柵門締切、供奉之面々タリトモ通行被差止、整列之後ハ、猥ニ列ヲ離候事ヲ被禁候間、其旨厚相心得、其主人々々ヨリ固可申付候事、

三番貝ニテ前軍ヨリ順次ヲ以行進之事、

但

於天保山ハ一番貝整列、二番貝ニテ行進之事、

二三八ノ三
揃場順次

前軍兵隊

右御本門前、安土町四丁目之事、

前軍公卿・諸侯

右御堂筋柵門之内、御本門ヨリ右側之事、

中軍先鋒兵隊

右升屋町・安土町通ヨリ南之事、

中軍公卿

右御堂筋柵門之内、御本門ヨリ左側之事、

中軍押兵隊

右安土町・升屋町ヨリ東之事、

後軍公卿・諸侯

右柵門之内、本町五丁目之事、

後軍兵隊

右柵門之内、備後町五丁目之事、

二三八ノ四
明治元年三月二十五日

附録
三月二十五日達書三通

一明二十六日、天保山

行幸御道筋心齋橋通リ、四軒町、豆葉町(ママ)、七郎右衛門(ママ)町、西國橋、玉水町、常安橋通リ、玉江橋ヨリ堂島濱筋、塩津橋ヨリ安治川筋、同橋通リ御通ニテ、富島二丁目濱ヨリ

御乗船、天保山へ着御之事、

一供奉宮・公卿・諸侯乗馬之事、

但

中軍之輩可為歩行之事、
総裁・輔弼両人先後騎馬供奉之事、
一衣体鎧直垂之事、
但
花麗之品成丈無用之事、
一公武共従僕侍二人、下部一人、口付二人之事、
但
侍衣体羽織袴之事、陣羽織無用之事、
一主従一同腰兵粮之事、
但
自分用意之事、
但例朝飯受取候、昼之分モ受取、腰兵粮ニ可致、
夕飯ハ於先方小堀ヨリ可廻候事、
両度之分ハ竹皮包ニ候事、
一船中従僕可為一人事、
但
御座船乗込ノ面々ハ、従僕可為無用、尤別船ニテ
御列外可差出事、
一兵隊ノ儀ハ、中藩已上百人、小藩之儀ハ可為一小隊事、
一御乗船之後、前軍・中軍兵隊各以順席左之川岸、後軍
同断右之川岸ヨリ　御座船ニ随従シ、行進御守衛可致
事、
一御用物其外又供之儀ハ、左之川岸通行之事、
一入夜之節、提燈自分腰指、其外小丸一ツ・馬提燈一ツ
可為事、
但
提燈・雨具船ヲ以運送之事、

非蔵人日記

明治元年三月廿五日（二八〇五）

二十五日達書七通

聖護院宮

右寅下刻出馬ニテ、
御出輦ニ先立テ、安治川橋下富島二丁目濱ヨリ乗船、
天保山ニテ川船乗替、直様肥前蒸気船電流丸へ乗込候
様、
御沙汰候事、

三月廿五日

聖護院宮家記

明治元年三月二十五日　　肥前へ

明二十六日、其藩蒸気船へ聖護院宮・庭田大納言・若王子・加藤〔泰秋、大洲藩主〕遠江守・松本隠岐乗船可為致旨、

御沙汰候事、

但

天保山

着御前ニ、為迎士官一人同処迄可差出候事、

鍋島直大家記

明治元年三月二十五日　　肥前へ

海軍

天覧之節、其藩軍艦可致祝砲旨、

御沙汰候事、

鍋島直大家記

明治元年三月二十五日　　肥前へ

祝砲時刻合図ノ儀ハ、

着御之後、天保山砲台上ニテ青色長サ五尺之旗ヲ振ヲ以、相図ト可致事、発放数之儀ハ、二十一発可為事、

鍋島直大家記

明治元年三月二十五日　　肥前へ

碇泊之佛船ヨリ祝砲之節、応砲致シ候ハヽ、早速佛之記号ヲ揚、答礼可致事、

鍋島直大家記

明治元年三月二十五日　　肥前へ

別紙之通、各船へ

御沙汰相成候間、其藩軍艦電流丸之儀ハ、祝砲相済次第、佛郎私船応砲答礼之後、直様諸藩誘導シ、航スル事三十分時ニシテ転回、天保山へ帰艦碇泊可致事、

鍋島直大家記

別紙ハ下条長門藩ノ達書ヲ指ス、但シ長門藩ノ外見ル処ナシ、

明治元年三月二十五日

長州へ

明廿六日、海軍
天覧ノ節、祝砲之儀ハ肥前へ被
仰付候間、各藩之船ニ於テハ不及砲発候事、肥前蒸気
船電流丸ヲ嚮導トシテ祝砲之後、彼船一同兵庫ノ方へ
航スル事三十分時ニシテ、再ヒ天保山へ帰艦碇泊之事、

毛利元徳家記

二三八ノ六
明治元年三月二十五日

附録 軍防局回達

別紙之通被
仰出候処、急速之御用ニ付、廻達ヲ以申達候也、

三月二十四日　軍防局

備前
藝州
紀州
宇和島
久留米
柳川
大洲
留守居中

別紙

天保山
行幸ニ就、川舟之御用有之候間、各藩所持ノ川舟、安
治川橋下へ明廿五日中ニ可差出旨、
御沙汰候事、
但
各藩一艘宛之事、

池田章政家記
浅野長勲家記

二三八ノ七

三月二十五日回達二通

一今般　御親征行幸被　仰出候ニ付、先達テ
御趣意ハ兼テ被　仰出有之候事ニ候得共、猶又御道筋
並ニ御滞坂中、御家来下々ニ至迄、御趣意之通リ厚ク
相心得、不法之儀聊無之様、且諸侯並藩士等入京之儀、
混雑之上無礼之輩有之候共、猥リニ手ヲ下シ、麁忽ノ
振舞有之間敷、万一其侭難差置儀ニモ候節ハ、本人並
主人名前・所書留、追テ可及沙汰旨申入置、家司之可

此間脱字差図候事、

一御滞坂中互ニ礼譲ヲ尽シ、無礼ノ振舞無之様致シ、就中同勤ノ者ハ相互ニ扶合、睦間敷勤仕可有之候事、

一往返道中　御滞坂中、博奕ハ勿論、加勢ノ諸勝負、其外人集或ハ喧嘩口論等堅停止之事、

一御滞坂中市中店先ヘ罷越、無銭ニテ品物取来、不法ノ振舞抔相聞候節ハ、即刻暇可被指出段モ可被仰付置、且勤仕中禁酒同様可相心得候事、

但シ御滞坂中夜具、御家来之向ハ、下々迄彼地ニ被設置候事、

右之趣、御家来下々至迄、厳重ニ可被仰付置候、自然不心得之儀有之ニ於テハ、急度可被及御沙汰候間、此段各様方迄テ兼テ可申入置旨被申付候、御順覧後早々当家ヘ御返却可被成候、以上、

坊城頭弁殿

雑掌

有栖川宮家記

三月

供人数並荷物ノ事、過日以一紙申入候得共、為念左之通、

宮大臣

下部十五人ノ内ニテ、両掛三荷或二荷、雨具・提灯用意ノ事、

公卿

十二人ノ内ニテ、同上両掛二荷或一荷、

殿上人六位

十人ノ内ニテ同上、但箱提灯無用、

右各高張並袖摺、傘籠、籠長持ノ類無之事、

右之通御治定候、堅可被相守候事、

壬生基修家記

二三八ノ八

三月二十五日回達

行幸行在中、非蔵人並地下之輩衣体可為羽織袴事、

陣羽織・火事羽織等着用禁止ノ事、

但医師拝診ノ節ハ、直垂着用ノ事、

弁事局記

二三八ノ九

三月

各通

御親征
行幸供奉ノ列ニ被加候旨、被
仰出候事、
三月

島津淡路守(忠寛、佐土原藩主)
毛利讃岐守(元純、清末藩主)

島津忠寛家記
毛利元純家記

二三九　島津忠義五ケ条誓文ノ誓約ニ奉答シ、戮力輔翼スヘキコトヲ訓示ス

明治元年三月二十六日、忠義五ケ条誓文ノ誓約ニ対シ奉答シ、戮力輔翼スベキコトヲ訓示ス、二三九ノ今般以

宸翰、　御別紙之通不容易
御趣意被　仰出、
主上
神霊ニ被為誓、於
御前
(島津忠義)太守様被遊　御誓約候付、尚此上一層　御職掌被為尽、
今般大事御受之詮被為立、
御家名不被為失様、伊勢
御前江被　召、　御別紙之通
御筆を以被　仰出、殊ニ
御出輦後、御留守中京師守護之儀、被為蒙
勅命候ニ付ては、別て御大任之御事ニて、此末一涯取
締向等行届候様、左候て我々共初一統心附候儀は、不
差置可奉言上旨、　御直ニ承知仕、誠ニ以何共恐入難
有次第之御事ニ候、依之去ル廿日詰御役々并諸士迄拝
見被仰付候、
御筆并別紙添書等相添、此段申越候条、
中将様被達
御聴、其元拝見被仰付候儀共、何分も可被取計候、以
上、

辰三月廿六日　　關山(金生)糺
　　嶋津伊勢(広義)

嶋津圖書(久治)殿
桂右衛門(久武)殿
川上龍衛(久齢)殿

新納刑部殿（久脩）
町田内膳殿（久憲）

二三九ノ二　御筆仰出写

今般以
宸翰、　御別紙之通不容易
御趣意被
仰出、忝も
主上
神霊ニ被為誓、不肖之我等迄も於
御前致誓約、無二念
聖旨遵奉之赤誠を表し、御受奉申上候、熟惟るに
皇国之隆替由て分るゝ（本ノマヽ）
御新政之時ニ当り、未曽有之
御盛典を被為挙、殊ニ天下億兆一人も其処を得されハ、
罪を
聖体ニ御反躬被為遊、艱難之先ニ立せ賜ひ、
天職を不被為奉、且又旧来之陋習ニ慣れ、尊重のミを
朝廷之事となし云々之
御趣意を奉翫味候ニ、誠ニ貫千古候
玉音ニて、実ニ
御盛業可被為遂
御骨髄と、
感銘至極奉存候、
従来我等不肖之身を以、
中将公御鞅掌之　御志業を奉戴シ、聊犬馬之労を尽し、
如此大事之場ニ遭遇致し候儀、固より其任ニあらす、
昼夜忘寝食令苦慮候、此上如何之分を以、臣子之大義
を尽し、前条之御趣意ニ可奉対答候哉、奉比較も恐入
候得共、我等
朝廷ニ所以奉尽之道、即チ各我等ニ尽す所以と、一轍
之理と存候間、一身一家之上ニ於ては申迄も無之、断
然弊習を脱シ、当世之事務ニ通達し、
朝廷非常之
御盛典ニ基キ奉リ、上下戮力シテ奉安
宸襟候様、一層其職掌を奮励し、補助之任を尽度所存
候間、各心附候儀ハ不差置極諫シ、今般大事御受之詮
を立シメ、家名不失様貫徹致シ呉度頼存候、此旨末々
迄も可申聞置候事、

二二九ノ三
今般以云々上文同故略ス御大任之御事ニて、此末万一取締向等、不行届儀共有之候ては、御越度は勿論之御事なから、奉対
朝廷急度不相済事候付、我々共初一統心附之儀は、不差置可奉言上旨、　御直ニ　御沙汰承知仕、誠ニ以何共恐入難有次第之御事候条、謹て奉拝見、
御趣意之程末々迄も厚致貫徹、只管忠勤可仕候、
但末々之者江は、支配頭・主人等より可申聞候、
伊勢
糺
(按)　京都ニ於テ藩士ニ布知セシモノナリ、

二三〇　藩老御親征行幸ノ件ヲ藩地ニ報ス

明治元年三月二十六日、藩老御親征行幸ノ件ヲ藩地ニ報セリ、
主上　御親征付　御下坂之儀、去ル五日
御出輦被
仰出置候処、被　召延、同廿一日丑ノ半刻
御出輦、別紙御宿割之通八幡并森口　御一泊ニて、去ル廿三日未ノ刻、大坂表江　御機嫌能
着御被為
在候段被仰渡、乍恐恐悦奉存上候、就右
天気　御窺等之儀、別紙之通被
仰出置候付、
太守様ニは去ル廿一日　御参
内、
天気御窺被為済候、
御着輦ニ付ては、明廿七日
禁中　大宮御所江御参
内、
天気御窺之筈御座候、
一右ニ付、在国之面々は為名代重臣を以、右同日
天気可伺旨被　仰出候付、明日
中将様為御名代、島津主殿(久籌)御使者相勤筈御座候、
一五節句其外御祝儀等之儀、被
仰出候書附壱通、
右御留守居首尾書等相添、此段申越候条、
中将様被達
御聴、其許申渡等之儀は、何分も可被取計候、以上、

但重臣為名代可窺旨、被仰渡候書付は不差越候、

辰三月廿六日　　嶋津伊勢

嶋津圖書殿

桂　右衛門殿

川上龍衛殿

新納刑部殿

町田内膳殿

（按）別紙ハ、三月二十一日車駕親征ノ項ト同シキヲ以テ略ス、

二三一　藩老近日来下附ノ公布諸件ヲ藩地ニ報ス

明治元年三月二十六日、藩老近日来下附ノ公布諸件ヲ藩地ニ報セリ、

二三一ノ一

一大坂

行幸之上、海軍

天覧被遊候ニ付、軍艦并蒸気船出船留之儀、

一去ル十八日、蒸気船兵庫港揚碇、関東江被差廻と之儀、

一銃隊人数百人駿州三嶋江云々之儀、

一行幸

御留守中、高松之家来江巡邏被仰付候儀、

一今般朝敵を除之外一切大赦被

仰出候儀、

一小枝橋（京都市）辺百姓・家来は、御用相成候付、武家は下鳥羽・

上鳥羽江下陣之儀、

一去ル十四日

先帝山陵江

御参詣御願之儀、

右七通之通、

太政官代弁事局より被仰渡候付、達

貴聞向々江申渡候、御留守居首尾書相添、此段申越候

条、

中将様被達

御聴、其元申渡等之儀、何分も取計ニて可有之候、以

上、

辰三月廿六日　　嶋津伊勢

嶋津圖書殿

桂　右衛門殿

川上龍衛殿

新納刑部殿

町田内膳殿

二三一ノ二
三月

一中原猶介(尚勇)江海軍参謀被仰付候儀、
一御禁制高札之儀、
一酒井雅楽頭(忠惇、姫路藩主)被止入京・官位之儀、
一徳川慶喜
朝廷を奉軽蔑、彼之情実万々御採用難被成等之儀、
一去ル九日就
行幸、列奉行脇路より通行可致云々之儀、
一在京之人数等相調可差出との儀、
一先般御高拾万石御返献之儀、先ツ其儀ニ不及云々之御
儀、
一去ル廿一日
御出輦ニ付、御列奉行より伺書、
一王政復古
神武創業之始ニ被為基、諸事御一新云々之儀、
一大坂市中取締被免、巡邏被仰付候儀、
右拾行之通本文御書付銘々日付を以前ニ補ひ入置也、
太政官代弁事局より被仰渡候付、達
貴聞向々江申渡、御留守居首尾書等相添、此段申越候
条、
中将様被達
御聴、其元申渡等之儀、何分も被取計ニて可有之候、
以上、

辰三月廿六日　嶋津伊勢

嶋津圖書殿
桂　右衛門殿
川上龍衛殿
新納刑部殿
町田内膳殿

二三二　島津忠義大坂着御伺トシテ参内ス

明治元年三月二十七日、忠義大坂着御御伺トシテ参　内
セラル、
(記)藩記ヲ載ス、
一去ル廿三日未之刻、大坂
御機嫌能着御ニ付、今廿七日於禁中仮建可奉伺
天気、大宮御所ヘモ御同様伺　御機嫌申上候様、被仰

出候ニ付、今巳半刻御供揃、　御上下ニテ諸大夫ノ間ヨリ御上リ、新御廊下ヘ御扣被遊候処、再和清之間ニテ交野左京大夫様御出会、
天聞御承知被遊御退出、夫ヨリ　大宮御所ヘ御上リ、御取次岡本左衛門権尉ニ御出会、御機嫌御伺被遊御退出候事、

三月二十七日

二三三　天草島警備藩兵糧食処分ノ件ヲ稟申ス

明治元年三月二十七日、天草島警備藩兵糧食処分ノ件ヲ稟申ス、
当正月長崎奉行退去之砌、天草表ヘ浮浪輩致渡海、混雑之聞有之、当所為警衛国許ヨリ差出候人数、彼地ヘ差渡、早々鎮静為致候様、会議所ヨリ達之趣致承知、正月廿一日ヨリ当月七日迄人数差出、急速之儀別段兵粮滞島中彼地之貢米食料相用候処、凡九十四石八升ニ相及候段、別紙之通彼地庄屋共ヨリ承届候、右ハ何様可被仰付哉、御差図被下度、此段奉伺候、以上、

島津修理大夫内

三月廿七日

汾陽次郎右衛門（光遠）

島津忠義家記

二三四　在京ノ諸侯ニ令シテ、鹵簿ノ数ヲ録上セシム

明治元年三月二十八日、在京ノ諸侯ニ令シテ、鹵簿ノ数ヲ録上セシム、
年頭其外廉立候参
内之節、列廻リ総人数・持道具等、又平常行列定人数何人、兵隊召連候向ハ幾隊ト申所、御用見合相成候間、来ル晦日中ニ、書取ヲ以テ可申出候事、
右之通被
仰出候間、此段相達候事、

三月廿八日　　弁事役所

二三五　諸標記等ニ禁裏ノ字ヲ冒シ及ヒ菊章ヲ濫用スルヲ禁ス

三月二十八日

諸標記等ニ禁裏ノ字ヲ冒シ、及ヒ菊章ヲ濫用スルヲ禁ス、
一禁裏御用或ハ　禁裏御料、又ハ　禁裏御内抔ト会符・
牓示杭・標札等ニ書記シ候儀ハ、有之間敷事ニ候処、
往々見受候ニ付、以来屹度相改、　御用　御料ト而
已書記イタシ候様被
仰出候事、
但標札ハ姓名相記シ、又ハ官名・役名等記シ候儀
不苦候事、
一提灯又ハ陶器其外売物等ニ、御紋ヲ画キ候事共、如
何ノ儀ニ候、以来右ノ類　御紋ヲ私ニ附ケ候事、屹
度可禁止旨被
仰出候事、
但御用ニ付、是迄被　免之分モ、一応伺出可申事、
右之通被
仰出候条、末々迄不洩様可申達事、
三月

有栖川宮家記
黒田長知家記

二三六　貢士ハ藩主朝官奉職スル者ハ勝手タルヘキヲ令ス

明治元年三月二十九日、貢士ハ藩主朝官奉職スルモノハ勝手タルベキヲ令セラル、

達書

各藩ヨリ貢士差出候
御趣意ハ、先達テ
御沙汰之通ニ候処、主人議定職或ハ参与職等被
仰付置候藩々ハ、勤役中其儀ニ不及候、尤在勤中タリトモ貢士差出度輩ハ、勝手次第ニ相心得候様被
仰出候事、
三月

二三七　本藩兵山陰道鎮撫使警衛ヲ免セラル

明治元年三月二十九日、本藩兵山陰道鎮撫使警衛ヲ免セラル、
二三七ノ一

薩州江

山陰道鎮撫使警衛儀被
仰付置候処、被　免候旨
御沙汰候事、
三月廿九日

二三七ノ二
留守居ノ届書ヲ載ス、

御書付一通

但山陰道鎮撫使警衛被免と之儀

愛宕大夫様

右は軍防局より御呼出ニ付、罷出候処、右大夫様御出会、御別紙被成御渡、左候て川南東右衛門儀、御用之儀有之候間、暫く西園寺殿江御借用相成候付、被相達候旨被仰聞候付、可申上旨申上置候、

右之通御留守居附役遠武橘二相勤申候間、別紙相添此段申上候、以上、

三月廿九日　　新納嘉藤二（立夫）

伊勢様

（記）

山陰道鎮撫総督、正月五日京都ヲ発シ、山陰道各藩ヲ鎮撫シ、三月二十七日京都ニ帰ラル、仍テ藩兵ノ警衛ヲ免セラレタルナリ、

二三八　本藩鹵簿ノ数ヲ録上ス

明治元年三月晦日、本藩鹵簿ノ数ヲ録上ス、

上申書

一兵隊一小隊

一駕籠廻弐拾二人

一馬壱疋

一手鑓壱本

一立傘壱本

一茶弁当

右ハ年頭等廉立候参内之節、列廻リ平常行列定数、且兵隊召連候向ハ幾隊ト申儀、御届可申上旨被　仰渡趣承知仕、其節取調申候処、年頭等平常之無差別、当分非常中右之通召連申候間、此段申上候、

三月晦日　　薩摩少将内　赤井直之進

（記）

二十八日、在京諸侯ノ鹵簿ノ数ヲ録上セシメタリ、

（按）左ニ二三藩ノ人員ヲ載ス、

【参照一】

上申書

年頭等廉立参内之節

一弐百弐拾五人　重臣等総供人数

一対先挿箱
一鎗　弐筋
一長刀　一振
一長柄傘　一本
一跡挿箱　一
一供鑓　数不定
平定参内等之節
一百四拾五人　供頭等総人数
一対先挿箱
一鑓　弐筋
一長刀　一振
一長柄傘　一本
一跡挿箱　一
一供鑓　三筋
御所辺等若出火之節
一百六拾四人　重臣等総供人数
内九人　騎馬供
外重臣召連人数不定
一百五拾人銃隊　二隊
一対先挿箱
一鑓　弐筋
一長刀　一振
一長柄傘　一本
一跡挿箱　一
一床几　一脚
一茶弁当　一荷
一供鑓　数不定
右召連人数高等如斯御座候、此段御届申上候、以上、
三月晦日　恒川新左衛門
加賀中納言内〔前田斉泰〕
弁事局記

【参照二】

仙臺藩上申書

仙臺中将〔伊達宗城〕養子侍従在京中、廉立候人数・持道具等左ニ、
一先供弐人
一先銃隊壱小隊
一挾箱添壱人
一先対挾箱
一先鑓弐本
一小人組頭壱人

一装束傘壱本
一打物壱振
一馬廻三拾人
一側役四人
一用人壱人
一年寄壱人
一右筆壱人
一供締弐人
一手鑓壱本
一長柄傘
一草履取弐人
一供小走六人
一挾箱添壱人
一後対挾箱
一蓑箱
一乗馬弐匹
一茶弁当
一薬箱
一供方坊主
一騎馬供三人
一小人之者弐拾人
一陪卒人数不同
一同勢馬弐匹
一後銃隊一小隊

右之通ニ御座候、且平常之儀ハ装束・傘不為持、布衣供等都テ平服ニテ被連候事、

弁事局記

二三九　元徳川領肥前松浦郡内ノ炭礦支配ヲ本藩ニ命セラレタキコトヲ稟申ス

蒸気仕掛之製鉄所、且蒸気船数艘所持仕候得共、領内江石炭出産之場所全無御座候付、本徳川領肥前松浦郡之内江品位宜敷石炭有之、本同所支配之代官免許之上、去ル丑年所中相対ヲ以一山買入、車道・川筋迄モ致手入、多人数相掛、山仕込仕、是迄用弁仕来候、然処此節之変態ニ立到候テハ、御直支配ニ可罷成儀ト奉存候、就テハ右山之外ニ用意仕置候場所迚モ無御座候間、右之一山并ニ川筋・港口迄、修理大夫江支配被仰付被下候様奉願候、於

朝廷モ、　追々　御軍艦
御備付可被為
在儀ト奉存候付、猶又人数ヲ加ヘ出品殖増候様執計、
御用分丈ハ可成奉備候様可仕心組ニ御座候間、御免許
之程偏ニ奉願候、此段可奉願旨修理大夫申付越候、以
上、

島津修理大夫内
三月　汾陽次郎右衛門

「右書付ハ、此節本田李兵衛出崎ニ付相渡候、着崎之上ハ次郎
右衛門等申談、都合能可取計旨、委細李兵衛ヘ申含候之事」
島津忠義家記

二四〇　松平ノ苗字ヲ止メ、島津ト復称スル旨ヲ藩内ニ達ス

三月
一松平之苗字ヲ称シ居候族ハ、本姓ニ復シ候様被〔從〕
朝廷被仰出候付、向後島津之　御称号御用可被遊旨、
被仰出候段、京都ヨリ申来候、其旨一統ニ奉承知候様
向々ヘ致通達、諸郷・私領ヘモ可申渡、領主・地頭可
申渡候、
三月　〔島津久治〕圖書

二四一　封土十万石返献願稟申ノ旨ヲ藩内ニ達ス

明治元年三月日欠、封土十万石返献願稟申ノ旨藩内ニ達ス、
藩庁
王政御一新之御時節、敵兵厳制御威力被為備度、御用
途御領地之内十万石被遊御返献度旨、御別紙之通、先
月十一日御留守居ヲ以、太政官内国掛非蔵人鴨脚加賀
ヘ被差出候段御到来候、右ニ付テハ　御先代様御相伝
之御封土ニ候ヘ共、
朝廷御用途被為調兼候御時節、難被黙止御時宜合ニテ、
右通被遊御返献度　御深志之間、其段一統厚可被承知、
左候間、地面区別取調方等之儀ハ、追テ御差図之上早
々可申渡候条、此旨向々ヘ可致通達候、
三月　圖書　右衛門
龍　衛
刑　部

二四二　藩庁人別調書式改定ヲ達ス

明治元年三月日欠、藩庁人別調書式改定ヲ達ス、

御領国中人別帳ノ儀、是迄何宗ト宗旨書記候得共、右ハ被召止、士分以上ノ儀モ、人別毎ニ何歳ト年輩相記候様被仰付候、是迄年付ノ儀ハ、格式モ有之事候得共、脱体人別改ノ儀ニ付、右ノ通取扱可被致旨、人別改奉行ヘ申渡、向々并諸地頭・領主ヘモ不洩様可申渡候、

三月　　刑部

二四三　藩不急ノ役場ヲ廃シ、繁用ヲ省キ簡易取扱方ヲ達ス

三月

一此節不急之御役場追々御引取、亦ハ合併被仰付候儀ハ、時世変態難被捨置御所置、人々奉承知通ニテ、万端繁用ヲ省キ、治事取行候様無之候テハ不相済事候間、存向之由、役場御用取扱等ニ付テハ、新規ニ役局被召建候同様相心得、先例古格ニ不泥、簡易ニ取拵、格外ニ致吟味、筆者・小役人等相減、人少ニテ致御用弁候様、屹ト取調被仰付候条、奉行頭人誠実ニ汲受可尽評議候、右ニ付テハ、御改革取調掛御役々局々ヘ出席、吟味承届候様被仰付候間、篤ト申談、涯々其功相顕候様可勉強候、此旨向々ヘ可致通達候、

三月　　刑部

二四四　藩内借地譲受渡願等ノ手続ヲ達ス

座付士并与力・足軽等御借地、且医師其外諸士屋敷譲受、勤内御借地願ノ儀ハ不及披露、御勘定奉行ヨリ可致免許候、

一初テ高持成并高上リ願ハ、高奉行前ニテ取シラヘ、無子細候ハヽ不及披露可免許候、

但訳有之者ハ可得差図候、尤分地別立ノ儀ハ、是迄ノ通、

一大奥女中宿下リ御暇、御広敷御用人承届、不及申出候、

一諸郷役ハ、地頭請持掛郡奉行申談、可被申付候、

御奉公障等ノ者ハ、兼テ地頭ヘ可達置候間、人柄不及伺候、尤重ミ等被召入候儀ハ、是迄ノ通不被心得候、

但諸郷・私領其外役々ヘ、宗門方掛申付候節、一向

宗執行ノ者ヘ勤方申付候節、人柄伺ノ儀ハ、以来直ニ宗門方掛ヘ致問合可被申付候、

右可申渡候、

三月　　刑部

二四五　藩地ニ諸人惣髪・乱髪勝手タルヘキ記事

三月

鹿児ニハ、諸人勝手ニ惣髪・乱髪ニ相成不苦仰出有之候由、

二四六　土方久元日記

二四六ノ一
明治元年三月二十五日　晴

朝拝如例、九時ヨリ屋敷ニ行、七時ニ帰リ、暮頃ヨリ薩邸及ヒ岩倉様ニ罷出候テ、拝謁致シ、四時頃引取候事、

二四六ノ二
明治元年三月十九日

朝拝如例、早朝ヨリ徳大寺殿ニ罷出、夫ヨリ屋敷ニ行、八時ヨリ太政官代ニ出、暮比御用済ミ候処、岩倉公三條殿ヘ御出ニテ御用出来、四過頃帰候事、今夕ハ於丸山、本藩執政ト筑前執政ト、七時比ヨリ懇会有之候筈ニ候処、自分ハ岩倉卿御出ニ付、御用出来候テ断候ナリ、

二四七　大久保利通日記

明治元年三月

十八日

一太政官ヘ出席、今日圓山ニ、肥前侯御父子・長州公・阿州公・藝州公・細川御兄弟御一同御集会ニテ、小子モ罷出候、

二四八　強盗ノ類ニ付キ上之京町年寄ヘ達

上之京

町年寄中

一近比強盗ノ類、夜々所々町家ヘ押込、金銭等押取イタシ、逃去候モノ多有之候、此段為心得御通達ニヲヨヒ

候様ニト、今日万里小路殿御沙汰ニ候、以上、

三月二十七日

二四九　土方久元日記

明治元年三月二十七日微雨或ハ晴

朝拝如例、五時ヨリ御供揃ヲ以テ、西本願寺及城内并天王寺等為御見分、醍醐御同道ニテ御出被遊候ニ付、御跡乗ヲ以テ御供被仰付、色々珍敷所ヲ致拝見候ナリ、森寺和州ト薩藩小松帯刀ト、自分同様騎馬御供ナリ、御帰ハ暮前比ナリ、

二五〇　大坂行幸供奉衣体ニ付キ回達

三月

二月二十八日回達二通

大坂　行幸供奉衣体

堂上　　鎧・直垂

但地下之輩軍装、

武家　　戎服着用

於　行在所ハ

水干・狩衣取交

太政官代参入総テ是迄之通、

馬印・小幡之類堅停止之事、

御親征御趣意書ハ諸触有之候間、別段不申入候事、

有栖川宮家記

二五一　土方久元日記

明治元年三月九日　晴

朝拝如例、今朝御用向有之候テ、屋敷ニ行、毛利恭助（吉盛、土州藩士）ニ致面会、夫ヨリ致帰宅候、毛利恭助来リ候テ致小酌、今夕ハ何方ヘモ不行、

二五二　大久保利通日記

明治元年三月

十日

一太政官ヘ出席、今日ハ阿州侯・長州侯・藝州侯・細川良公子（島津忠義）君公御同行、圓山端乃寮ヘ御集会御催ニテ、

二字ヨリ御出向被為在候、誠ニ壮観稀ナル御事也肥後細川侯ハ御差支也、木戸・廣澤・長谷川・米田〔虎雄〕、阿州ヨリ四五輩参居候、今夜十一字帰ル、

二五三　土方久元日記

明治元年三月十日　雨

朝拝如例、今朝格別之用事モ無之、屋敷ニ行、九時頃帰候、七時頃ヨリ筑前生ヨリ案内ニ預リ、笹伊亭ニ罷越候テ、立花左衛門・團平一郎・馬場蒼心・中村到・肥塚静逸ニ致面会、国許家老処置之儀ニ付頼談有之、跡ニテ酒宴ニ相成、遂ニ致一泊候、帰ハ翌朝五時半比ナリキ、

二五四　大坂行幸供奉ニ付キ達

三月

大坂　行幸御滞陣中、各月給賜候ニ付、総日々之雑費等ハ不被出候事、

但於家来モ同様之事、且於食事ハ日々被出候、

高張或ハ袖摺・傘籠、或ハ籠長持一ツ不苦候間、更申入候事、

大坂　行幸供奉宮・堂上以下供之面々、平士直垂着用無用之事、

壬生基修家記

二五五　土方久元日記

明治元年三月廿八日　雨

朝拝如例、五時ヨリ　行在所ヘ被為召候テ罷出、御用被仰付、後藤象二郎方迄馭切ニテ罷越、九時引取候テ再度致拝謁、夫ヨリ筑前藩士招ニ寄リ、水野同断、北野新地池田屋ト申所ニ行、両筑・秋月・大村之諸藩士ニ致面会候テ、五時前ニ致帰宅候ナリ、筑前家老小河民部・吉田主馬等モ面会ニテ、三奸人処置之儀ニ付、段々内話有之候事、

二五六　大久保利通日記

明治元年三月

廿九日

一弥差扣被　仰付候、木戸入来、顧問御断之一条云々承候、

晦日

一差扣御免、太政官へ出席、今日條公御帰京ニ付、秘事一条御評議ニ付、條卿へ参殿、岩倉卿・木戸参ル、今夜種々御評議候得共、関東一左右御待ニ相成候筋相決ス、

二五七　土方久元日記

明治元年三月二十九日

二五七ノ一

朝拝如例、七時半之御供揃ヲ以テ、三條様御乗切、騎馬供計ニテ御上京被遊ニ付、右御供被仰付、伏見ニ御中食被召上候テ、八半比ニ御着京被遊候、直ニ岩倉家ニ御出被遊、入夜四時半頃御帰館ニ相成候事、自分ハ川原町屋敷ニ五時半頃致帰宅候事、今日ハ昼迄ハ雨甚シク、少モ止ミ無之、皆々難儀セリ、

二五七ノ二

明治元年三月三十日

朝拝如例、五時致参殿候処、御用出来イタシ、大久保利通市蔵方ニ行、夫ヨリ直ニ復命致シ、條公ニハ太政官代ニ御出被遊ニ付、自分ハ川原町邸ニ行、毛利恭助等致面会、九時帰リ、夫ヨリ御用モ無之致休足候事、

二五八　英国公使襲撃ノ兇徒ヲ処刑ス

三月

英国公使ヲ襲撃セシ兇徒三枝直洞（蓊、大和人）・朱雀貞固（操、城人）山ヲ、梟首ニ処シ、其党三人ヲ流ス、尋テ外交ノ朝旨ヲ海内ニ告諭シ、横逆ヲ外人ニ加フルコト勿ラシム、

二五八ノ一

三月

浪人

（大和浄蓮寺僧）

三枝蓊（サイクサ　シゲル）

其方儀、此度入京被仰付候英吉利公使参内之途中、同類申合抜刀切懸リ、手疵ヲ負セ、御新政之砌、外国御交際ヲ妨ケ、乱行ニオヨヒ、朝廷ヲ軽候次第、重畳不届之至ニ付、苗字大小御取揚、斬罪之上梟首被　仰付之、

以上、梟日数三日、

三月

刑法事務局

外国事務局筆記

二五八ノ二
三月

英人ヘ及乱妨候蓊儀、今朝粟田口ニヲイテ、斬罪無故障相済、同人並操首級共梟首取計置申候事、

三月四日

外国事務局筆記

二五八ノ三
三月

川上邦之助
松林織之助
大村貞助

右ノ者共去二月三十日、英国公使参朝之節、狂暴之所業ヲ企候者共ヨリ及示談候砌、条理弁別取押置候趣ニハ候へ共、至重之大典沮廃致シ候儀乍存知、政府ヘモ不訴出、始終私情ヲ以、皇国之災害ヲ醸成致シ候義、誠以不軽罪科候間、永ク遠流被　仰付候事、

三月五日

官中日記
外務省記

二五八ノ四
三月

川上國(邦)之助
大村貞助
松林織之助

右三人、今度隠岐国流罪被　仰付候間、護送方之儀、手配イタシ、用意調次第裁判所ヘ可申出候事、

三月

内国事務局記

案スルニ、九月ニ至リ、三人皆赦ニ遇テ帰ル、

二五八ノ五
三月

刑法局奏案

英人ヘ乱妨イタシ候者

右ハ、此度入京被　仰付候英吉利人参内之途中、同類申合抜刀切懸リ、手疵ヲ負セ候次第、

御新政之砌、外国御交際ヲ妨、乱行之及振舞候始末、
屹ト御重典ニ
不被処候テハ、
朝威モ立兼、外国ヘ被対候テモ相済申間敷、右ニ付即
日参
内モ被差延、大不敬ヲ犯候筋ニモ罷成、途中刦囚之
者、律条ニオイテ、上ヲ犯候造意不軽儀ヲ以、死罪ニ
相定、増テ此節之儀、外国御交際礼迄被設候砌、右之
振舞重畳不届者ニ付、顕戮斬罪之上、梟示可被
仰付哉、
但梟示ハ、日数三日程モ可被懸置哉、尤申渡之節、
苗字大小御取揚被
仰付、平人ニ落サレ戮ニ可被就哉、且又同類之首
級モ、右一同梟首可被
仰付哉ト奉存候事、

刑法事務局

蓊以下ノ口供書、諸書見ル所ナキヲ以テ、之ヲ司法省ニ
質セシニ、一モ存スルモノナク、唯刑法局一通ノ奏案ア
ルノミ、即チ本書是ナリ、然レトモ其実ニ上申セシヤ否
ハ詳ナラスト云、案スルニ、蓊等二人ノ処刑之ニ拠リシ
モノニ似タリ、故ニ収録シテ参考ニ供ス、

二五八ノ六
三月

英国公使ヘ書翰二通

以手紙致啓上候、然ハ過日於伏見駅、東久世少将ヨリ、
乱妨人余類三人之者、同罪ニ可申付様御話申置候処、
刑法局ニ於テ、右三人之モノ厳シク遂吟味候処、別冊
口書之通、右悪業之企致承知候故、朋友之親ヲ以、手
ヲ尽切諫ニ及候旨ニハ無相違候得共、右之次第全ク政
府ニ届出モ不致、甚以不行届之至ニ付、生涯孤島遠流
申付候、尤生涯孤島遠流之刑ハ、我国法ニオイテ死刑ヲ
除ク之外、至極之重科ニ有之候、就テハ一応御相談之
上、右之刑法ヲ可相行筈之処、処置失当、彼是手抜ニ
相成候段、其辺重畳我政府之過失ニテ、貴国ニ対シ如
何ニモ申訳無之候ニ付、拙者共ヨリ右御詫申入度、如
斯御座候、以上、

辰三月七日　　岩倉前中将（具視）
　　三條大納言（実美）

英国公使
（Sir Harry Parkes K. C. B.）
サア・ハルリー・パークス・ケ・シ・ビ

閣下

外務省記

外務省記ニ云、別冊口書見ヘス、尚取調ヘシト、

以手紙致啓上候、然ハ於京師去ル晦日、参内之中途及暴行候三枝蓊・朱雀操、斬罪ニ処シ梟首ニ及候、罪状之文意公使ヲ軽シ候場合ニ相成、必竟外国交際不取剛トハ乍申、第一日本政府之不行届ヨリ生候次第、別テ失敬之至ニ候、就テハ別紙開港地ヘ之布告書ハ、通行之儀其侭差置候得共、入京被　仰付候モノ云々迄消除キ布告イタシ置、尓来右様失敬之文意、屹ト無之様可致候間、此節之儀ハ御海容可被下候、御出帆後相成候間、以書面此段御詫申進度如此御座候、以上、

辰三月九日

肥前侍従（鍋島直大、佐賀藩主）
宇和島少将（伊達宗城、前宇和島藩主）
東久世前少将（通禧）

英国公使
サア・ハルリ・エス・パークス・ケ・シ・ビ

閣下

外務省記

以上二書、謝状ニ係ル、但公使駁議ノ事、別ニ見ル所ナシ、

二五八ノ七
三月

附録外国事務局輔書翰

以手紙致啓上候、然ハ貴国之公使参内之中途、及暴行候三枝蓊罪状之儀、過日入御覧候紙面、今日市中ヘ普ク相触、尚町内会所毎ニ張紙イタシ候様、申渡置候間、此段為御心得如此御座候、以上、

三月十日

伊達少将
東久世前少将

英国公使代（Mitford）
ミツトホルト

閣下

外務省記

二五八ノ八
三月十一日

復書

御尊翰拝読仕候、然ハ浪人三枝蓊罪状之儀、今日市中ヘアマネク御張出之趣、委細承知仕候、右之趣書面ニ

相認、公使へ差送可申候、然処先日、
朝廷ヨリ公使へ御約束相成候ニハ、長崎並ニ神戸ヘモ
御張出之由候得共、是等ハ如何ニ御座候哉、為念得貴
意度、御報旁如此御座候、早々以上、

ミツトホルト

伊達少将
東久世前少将
閣下

外務省記

二五八ノ九
明治元年三月一日

昨二月卅日、閣下参　朝之中途、大和之産三枝蓊、城
州桂村之産朱雀操、意外之暴行ニ及、貴国之兵士数人
ニ手ヲ負セ候次第ニ相運ヒ候処、幸附添之者ヨリ一人
ハ打留、一人ハ貴国兵士召捕候段申出候、尤我之政府
ニ於テハ、専外国交際ヲ重シ、普親睦ヲ厚センカ為、
参朝之儀モ申入候儀ハ、兼テ御諒知之通候処、頃日ニ
至リ、右様之所業数々有之候ハ、畢竟我之政令不行届
ヨリ生候次第、各国ヘ対シ実以汗背心外之至候、勿論
右之者余類之有無精々探索ヲ尽シ、何処迄モ根ヲ可断
候、又召捕候三枝蓊ハ、両国政府之重大之礼式ヲ妨ケ、
不届至極ニ付、厳科ニ可処ハ勿論之事ニ候、且又貴国
之兵士手負之者治療不相届、終ニ及死亡候欤、又ハ是
ヨリシテ職掌ニ離レ、活計ヲ失フ者ハ、我政府ヨリ至
当之養育料ヲ与ヘテ、忿恚之一端ヲ慰シ申度ハ、我政
府之実意候間、此段貴下兵士ハ勿論、本国政府ヘモ厚
意貫徹候様、以書面申入ヘク旨、朝命有之候ニ付、此
段如是御座候、以上、

辰三月一日

三條大納言（実美）
岩倉右兵衛督（具視）
徳大寺大納言（実則）
越前宰相（松平慶永）

英国公使
サー・ハルリー・パークス・ケ・シ・ビ
閣下

外務省記
官中日記

二五八ノ一〇
明治元年三月二日

英国公使復書

昨朔日附御書致披閲候、然ハ一昨晦日拝謁之タメ、
皇宮ヘ罷参途中ニ於テ、拙者ヘ対シ暴発有之候段
御門政府ヘ聞エシ処、御痛心セラル、趣致承知候、扨
条約ヲ取結ヒシ外国ヘ対シ、親睦ヲ被尽度思召ヲ以テ、
折角　御門陛下ヨリ各国公使ヲ御請待相成候得ハ、本
国皇帝ハ勿論、政府ニ於テモ日本ニ対シ、　御門陛下
同様之懇情ヲ抱キ、且他之大国皇帝ヲ尊崇スル礼儀ヲ
以テ、　御門陛下ヲ敬スル本意ヲ顕カタメ、早速洪恩
之御請待ヲ受度罷出候処、豈計ンヤ、不幸ニシテ悪心
之者共アリテ、右　御門之思召ヲ妨奉ラントセシハ、
元来本国皇帝ヘ対シ、至極失敬之所業ニ候、　御門陛
下ニ対シ、猶一層之失敬ニ当候段閣下達可被察、自然〔断カ〕
御門政府ヨリ、早速右一件之処置、可及筈ト信候故、
閣下達ヘ苦情ヲ申立不致、且　御門ヨリ数度見舞之使
者ヲ被遣而已ナラス、猶閣下達ヨリ御書状被差越、生
残候同類探索等被及候ハ、　御門並ニ其政府ニ於テ、
真実ニ如斯暴発有之ヲ痛心被成証拠ニ候ヘハ、矢張是
迄之通、御懇親可申ト存候、且昨日、閣下達ヘ面会之
砌御談シ申候ハ、此度之処置ハ勿論閣下達被仰候通、
是迄政令不行届之処、自今政令十分行届ヘキ様尽力イ
タシ、後来右等之所業無之様御処置可有之、尤是迄貴
国之内、外国人ヲ犯候ヲ潔キ事ト思フ党与有之候処、
最早今日ニ至リテハ、外国人殺害ヲ可恥様ニ至ラサレ
ハ、職掌不相済事、貴国政府ニ於テ被察、猶　御門於
テモ外国ト懇親之交ヲイタシ度故、外国ヘ対シ悪業ヲ
ナスモノハ、日本之国害ニ相成ニ付、万一右様之所業
ニ及候者ハ、厳重ニ罰ヲ可与旨、天下中ヘ布告スヘキ
御約束ニ御座候、右之意ヲ以テ御布告ニ相成候ハ、、
右悪党之者心ヲ改ムルハ必然也、是又外交永久相続之
一端ト存候、且此公使館護卒之内、或ハ死亡シ、或ハ
怪我之療治不行届ニテ、其職ヲ離レ候モノ有之候ハ、、
養育料被差出度　御門之御意、拙者ハ勿論、定テ本国
皇帝陛下ニ於テモ、定テ満足ニ被思召ト存候、右者怪
我之浅深ヲ吟味シ、本国政府ニ於テ、請取理有之ト思
ヒ拙者ヘ命ヲ下シ候ハ、、猶可申入候、就テハ　皇宮
ヘ参　内之為、拙者ニ附添居候後藤象次郎・中井弘蔵
両人之立派ナル所業ヲ不得不述、右両人自己之命ヲ不
惜、只々職掌ヲ尽シ度意ヲ以テ、早速殺害人ヘ打掛リ、
其場ニテ一人ヲ打取候ヘトモ、中井弘蔵深手ヲ負シ段、
気之毒至ニ存候、尤拙者之申立ヲ不被待トモ、日本帝

王並国民之名ヲ惜、如斯我命ヲ不顧候モノハ、自然御門之寵愛ヲ可蒙筈存候、右之段回答如斯御座候、以上、

三月二日　　ハルリー・エス・パークス

三條大納言

岩倉右兵衛督

徳大寺大納言

越前宰相

閣下

外務省記
官中日記

二五八ノ一
明治元年三月二日

阿波藩隊長上申書

私共義、去月晦日英国人参内仕候節、三藩（阿波・尾州・細川）申談之上後隊警固罷在、先隊ヘハ壱町半余モ相隔居申所、知恩院門前通リ大和橋筋ヘ折曲候所ニテ、小銃一二発相聞候内、先隊混雑之模様ニ相見ヘ、殊ニ路傍見物人群集之中一入雑沓ニ相至、進退不得自由候得共、組銃隊之内半隊分配、急速相進メ、警固可仕内英国人引返シ来リ候ニ付、両隊相纏メ知恩院ヘ護送仕、罷帰候義ニ御座候、前顕之掛リ、後隊罷在程隔候事故、乱妨之模様等相見認メ不申候、御尋ニ付此段申上候、以上、

三月二日　　蜂須賀美作

蜂須賀茂韶家記

二五九　平田宗高日記

三月九日

京都ヨリ取出之書

今般

御親征、当月十五日

御出輦、戦地

御巡覧、大坂ヘ

行幸、西本願寺一往行在ニ相成、右ニ付

太守公供奉先鋒被為蒙仰、右ニ付諸事手当向等被仰付候処、御延引相成、当分ニテハ御出輦等之御日限モ不被仰出候得共、今日モ太政官江

行幸、

太守公ニモ被為入筈候間、左様心得可有之候、

二六〇　土方久元日記

三月七日　晴

朝拝如例、五時ヨリ致参殿、御用モ段々有之候事、佐々木三四郎(高行、土州藩士)・住江甚兵衛(訓一、熊本藩士)両人共、色々御用談有之候也、九時ヨリ太政官代ニ罷出テ、八半比引取、七時ヨリ薩(島津忠義)州公・長州世子(毛利元徳)君参殿ニテ、小松帯刀(清廉)・大久保市蔵(利通)・吉井幸輔(友実)・木戸準一郎(孝允)・廣澤兵助(真臣)・前田杏齋(元温)来リ候テ、共々於御前御酒被下、五半頃両君公共御引取ニ相成候、

(以下略)

跡ニテ又々御酒被下、四時頃ヨリ園町一力ニ行、同藩五六輩、筑前團平十郎・中村到・小野登人・徳永久兵衛等ト共ニ致酒宴、左森寺大和守(ママ)・前田杏齋モ致同行候事、今朝五時頃ナリキ(今朝翌八日事)、

二六一　外国事務局書翰

先般土佐少将家来於堺表及暴行、開港地内ヘ藩人兵仗ヲ携出入致候儀、御差止ニ相成候様、仏公使朝廷ヘ申立候趣有之、其通被　仰出置候処、今般於京師右間隔相開呉候様、土佐前少将ヨリ及直談候処、仏公使承伏致シ候趣申出候、就テハ尓来開港地内出入之儀、差免候条、為念御方ヨリ此段御引会可被成候、以上、

三月五日　　外国事務局

伊藤俊助(博文)殿

豊範家記ニ云、豊範国許ニアリシカ、堺出張之兵暴動之報ヲ聞キ、即日蒸気船ヲ発シ、二月二十四日大坂ニ着ス、又云、総人員二十名之内十一名自裁、余九人ハ仏蘭西人ヨリ寛典ニ被処度旨、懇願ニ及ヒシ故、熊本・廣島両藩ヘ御預、三月三日土佐守方ニ受取、藩許ニ差下シ、五月二十一日、

朝廷御沙汰之旨ニ従ヒ処分ス、

二六二　英国公使襲撃事件ニ関スル中外新聞記事

慶應四年三月五日

京師ニテ英国公使疵ヲ受ケシ事

今日不図驚クヘキ一新聞ヲ得タリ、即チ英国人書状ノ訳文ナリ、依テ紙数未満ナリト雖モ、期日ヲ待タスシテ之ヲ印行シ、急ニ看官ニ報告ス、両三日ノ間ニ必詳説ヲ得テ、再ヒ訳出スヘシ、

一千八百六十八年三月二十八日、即日本三月五日於横濱江戸某公足下ニ呈ス、

亜墨利加ノ蒸気船ローウルト号スル船、今朝兵庫ヨリ到着セリ、去ル二十二日即チ二月二十九日、佛国公使(Léon Roches)ロセス及ヒ和蘭公使(Dirk de Graeff Van Polsbroek)ポルスプルツク、

皇帝陛下ニ謁見ス、次日即チ二月三十日、英国公使(Sir Harry Parkes K. C. B.)ハルリー・パークス、京都ニ於テ

皇帝ノ宮殿ヘ昇ラントスル途中ニテ、卒尓ニ襲撃セラレ、自身モ少シク疵ヲ被リ、外英人九人疵ヲ受ケタリ、其内二人ハ最深手ナリ、是ニ依テパークスハ、

皇帝ニ謁見セズシテ大坂ニ引返シタリ、英・佛及ヒ和蘭ノ官吏等、直チニ横濱ニ帰ルコトヲ決セリ、

此報告尚ホイマタ詳ヲ悉サストイヘトモ、多分相違無カルヘキモノナリ、

英吉利在留館某

副啓、帰港ノ上日本ノ兵卒、即浪人輩ヲ殺害スベシトノ風説アリ、

二六三　横濱新聞抄訳　堺事件

慶應四年三月五日

横濱新聞ノ抄訳

一千八百六十八年三月二十八日、日本三月五日記ス、

昨夜飛脚此地ニ到着シ、ハルリー・パークス君京都ニ於テ、天子ノ禁闕ヘ趣カントスル途中ニテ襲ハレ、其護衛ノ騎兵九人手疵ヲ受ケ、日本人一人殺サレ、一人ハ虜トナリタル旨ヲ報告セリ、

此事ニ付テハ、風聞マチ〳〵ニシテ、イマタ何者ノ所為トモ分リ難シ、但シ怪我人ハ九人ニテ、其内二三人ハ死シタル由、パークスハ其乗リタル馬ヲ斬ラレタルノミニテ、自身ニハ怪我コレ無キ由ナリ、

此事件ノ末、如何成リシヤ、イマダコレヲ聞カス、然レトモ佛蘭西蒸気船トプレイ并ニ英吉利蒸気船エドヘンチユール、急ニ大坂ニ出立セリ、是レ蓋シ公使等ヲ迎ヘ帰ラン為ナルベシ、

此度ハ、公使等実ニ彼兇徒等ノ信スヘカラサルヲ知リ、

自今以後、決シテ右様ノ異変無カルヘキ処置ヲ行ハン事、是レ我輩ノ欲スル所ナリ、

最早寛大ノ処置ヲ行フヘキ時ニアラス、欧羅巴人・米利堅人、身ニ一毫ノ罪無クシテ命ヲ失ヘル者、既ニ三十人ニ及ヘリ、此後カクノ如キ枉死ノ数増加セン事疑ヒ無シ、然レハ手荒キ処置ヲ行ヒテ、日本人ノ暴悪ヲ止ムヘキ事当然ナリ、

先日、佛蘭西ミニストルノ為セシ処置ハ甚手早クシテ、且ツ其目的ヲ得ルノ良策ニテ、此地ニ在ル外国人等極メテ敬服セリ、此度英吉利ミニストルモ、亦宜ク是ニナラフベシ、

先日、仏人十一人堺ニ於テ殺害セラレシカハ、佛国公使五ケ条ノ事ヲ三日間ニ決断アルヘキ旨、若シ三日ヲ過キ候ハヽ、直様兵ヲ差向ケ可申云々ノ趣ヲ、京師ヘ掛合ニ及ヒタリ、是ニ依テ五ケ条共ニ速ニ行ハレタリト云、右ケ条ノ第一ハ、　朝廷ヨリ書面ヲ以テ罪ヲ謝セラレ、第二ハ、外国事務総裁自身ニ佛船ヘ往キテ謝シ、第三ニハ、土佐ノ士官・兵卒乱妨セシ者ヲ刑シ、第四ニハ、土佐人脱剣セスシテ、外国人ノ居留地ニ立入ルヲ許サス、第五ハ、償金十五万ドル、此五ケ条ナリト云フ、

外国人ノ枉死亦夥シイカナ、第一ニ米利堅人十人水死シ、次ニ仏人十一人殺害セラレ、又此度朝廷ノ賓客トシテ懇ニ招待ヲ受クヘキ英吉利人、故無クシテ襲ハレタリ、

コルシカ人ノ語ニ、一人殺サルレハ、一人ヲ殺ストイヘル事アレトモ、吾等ハ是ニ倣フ事ナク、宜ク一人殺サルレハ千人ヲ殺スノ心ヲ以テ、復讐ヲ行フヘシ、吾等一度命令ヲ下セハ、日本ハ外国ノ才智兵力ニ屈服セサル事ヲ得ス、日本人若シ頑固ナルトキハ、遂ニ印度人ノ轍ヲ履ムニ至ルヘシ、

日本人ハ欧羅巴・米利堅等ニ往キテ、其国人ノ如ク自在ニ歩行スルモ妨無シ、何故日本ニテハ外国人ニコレヲ許サヾルヤ、畢竟日本人ヲシテ其陋習ヲ改メ、公平ノ法ヲ守ラシメンカ為ニハ、大軍ヲ上陸セシメテ国内ニ攻入リ、軍艦ヲ以テ海岸ヲ囲マサルヲ得ス、

即今兵庫ト神戸トノ間ノ門ヲ閉チ、外国人ノ通行ヲ禁セリ、何故トモ解スヘカラス、何ノ道理ニ由テ、此ノ如ク吾等ノ自由ヲ妨クルヤ、夫レ条約ハ正シキ道理ヲ行ハン事ノ請合ナリ、然ルニ此国民ハ、何故道理ニ背

ケル事ヲナスヤ、彼等実ニ敵対ヲ好ムヤ、又ハ唯戯レナリヤ、其裁判ハミニストルノ処置ニアルヘシ、

黒澤孫四郎訳

二六四　開港延引ノ報告

慶應四年三月五日

開港延引ノ報告（英文ノ訳）

方今日本政府ノ形勢一変スルニ因リ、江戸及ヒ新潟ヲ安全ニナサンカ為ニ、暫時其開市・開港ヲ遏ムヘシ、而シテ日本在留英国女王殿下ノ特派公使全権ミニストルハ、事態治定スルニ至ルマテ、右ノ都府及ヒ港ニ英国人居留スルハ、危険ナルヘシトノ説ヲ守ルヘシ、是レヲ以テ、全権公使ハ英吉利人ニ告知シ、来ル第四月一日即チ日本三月九日、右二ケ処ノ開市・開港ヲ暫時延引シテ、他日英人右両処ニ居留安全ヲ得、且ツ交易ヲ成スヘキ節ニ至リ、速ニ報告スヘキモノナリ、

一千八百六十八年三月二十八日、即日本三月五日

兵庫ニ在ル英国女王殿下ノ公使官、

二六五　横濱新聞紙ヘラルドノ訳

慶應四年閏四月

横濱新聞紙ヘラルドノ訳

日本国中寺院ノ僧徒ハ、　御門ヲ其法侶ノ長トシ、法王ノ如キモノト思ヒ、偏ニ其身ヲ倚頼セシニ、此度神道帰一ノ号令出タルニ依リ、大ニ騒擾ヲ発セントス、若シ仏徒相集マリテ事ヲ起サハ、疾雷ノ轟クガ如ク、忽チ全国ヲ驚カスニ至ルヘシ、其勢必ス南北両部ノ会盟諸侯ヨリモ、遙ニ大ナル威権ヲ握ルニ至ラン、スベテ開化未全ノ国ニ於テハ、神仏ノ信仰甚シキヨリ、寺社ノ権勢甚大ニシテ、帝王ト雖モ制馭シ難キ事多シ、希クハ日本ノ　御門陛下此事ニ注意シテ、其禍ヲ避ケ、全国ヲシテ安寧ナラシメ玉ハン事ヲ、